

岐阜県文化財保護センター  
調査報告書 第136集

東野遺跡 II  
(第1分冊)

2016

岐阜県文化財保護センター

ひがし の  
東 野 遺 跡 II  
(第1分冊)

2016

岐阜県文化財保護センター



平成 24 年度発掘区（北から）



平成 25 年度発掘区（南から）



III期の遺物集合

## 序

坂祝町は、岐阜県中部の美濃加茂盆地西部から加茂野台地東部に位置します。町の南端を流れる木曽川は、日本ラインとして著名であり、また、名勝「木曽川」として国指定を受けています。

このたび、国土交通省中部地方整備局多治見砂防国道事務所による一般国道21号坂祝バイパス建設に伴い、坂祝町大針・黒岩地内にある東野遺跡の発掘調査を実施しました。東野遺跡は、木曽川右岸の中位段丘である加茂野台地の東端に位置しています。東に低位段丘面、南に旧河道が存在し、東遠方に御岳、恵那山が望めるこの河岸段丘上には、尾崎遺跡、半布里遺跡、大杉遺跡など多くの遺跡が立地し、集落跡が確認されています。平成15・16年度の発掘調査では、縄文時代から古墳時代後期の竪穴建物や掘立柱建物が見つかり、特に古墳時代前期は、美濃加茂盆地周辺の遺跡の中でも比較的規模が大きく、中心的な集落の一つであることが判明しました。

今回の発掘調査によって、縄文時代から鎌倉時代の竪穴建物や掘立柱建物、弥生時代の方形周溝墓などが見つかりました。弥生時代後期の竪穴建物からは、磨製石鏃やその未製品、製作用の工具が出土し、当地で磨製石鏃を製作していた可能性があることが判明しました。また、古墳時代前期は竪穴建物、大型の掘立柱建物、区画溝によって集落が形成されることが判明し、集落構造を考える上でも貴重な資料を得ることができたと考えています。本報告書が、広く県民の皆様に活用され、埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御理解と御協力をいただきました関係機関並びに関係者各位、坂祝町教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成28年1月

岐阜県文化財保護センター  
所長 宮田 敏光

## 例　　言

- 1 本書は、岐阜県加茂郡坂祝町に所在する東野遺跡（岐阜県遺跡番号 21501-10002）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、一般国道 21 号坂祝バイパスに伴うもので、国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘調査及び整理作業は、宇野隆夫帝塚山大学文学部教授の指導のもとに実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当は、本書第 1 章第 2 節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆並びに編集は河合洋尚が行った。
- 6 発掘作業における現場管理・掘削・測量などの業務と出土遺物の洗浄・注記は、株式会社ユニオングループに委託して行った。
- 7 整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの業務は、橋本技術株式会社に委託して行った。
- 8 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 9 自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託して行い、その結果は第 4 章に掲載した。
- 10 発掘調査及び報告書の作成に当たっては、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。  
記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）  
赤塚次郎　石黒立人　泉拓良　伊藤正人　嶺嶽茂　千田隆夫　長屋幸二　八賀晋　藤沢良祐  
藤村俊　渡邊博人　坂祝町教育委員会
- 11 本文中の方位は、世界測地系の座標北を示し、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系で表している。
- 12 土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2007『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 13 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

## 目次（第1分冊）

序

例言

目次

### 第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	3

### 第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8

### 第3章 調査の成果

第1節 基本層序	11
第2節 遺構・遺物の概要	12
第3節 東野Ⅰ期（旧石器時代）	24
第4節 東野Ⅱ期（縄文時代）	26
第5節 東野Ⅲ期（弥生時代）	70
第6節 東野Ⅳ期（古墳時代前期）	138
第7節 東野Ⅴ期（古墳時代後期）	241
第8節 東野Ⅵ期（古代）	257
第9節 東野Ⅶ期（中世）	291
第10節 東野Ⅷ期（近世）	307
第11節 時期不明	313

### 報告書抄録

### 第2分冊 目次

遺構一覧表

遺物一覧表

発掘区全城図分割図

### 第4章 自然科学分析

#### 第1節 分析の概要

第2節 ST1 出土人骨の放射性炭素年代測定

第3節 SI24 出土炭化材の放射性炭素年代測定

第4節 竪穴建物出土炭化材の樹種同定

第5節 SI47 出土の土器胎土と粘土塊分析

### 第5章 総括

## 挿図目次

図1 遺跡位置図.....	1	図63 SII8遺構図 (1) .....	87
図2 平成23・24・25年度試掘確認調査坑位置図及び壁面上層模式図.....	2	図64 SII8遺構図 (2) .....	88
図3 発掘区設定図.....	4	図65 SII8遺構図 (3) .....	89
図4 東野遺跡周辺の地質.....	8	図67 SII23遺構図 (1) .....	91
図5 周辺遺跡位置図.....	10	図68 SII23遺構図 (2) .....	92
図6 底面の形状の模式図.....	14	図69 SII23出土遺物 (1) .....	92
図7 打製・磨製石器の基部による分類模式図.....	18	図70 SII23出土遺物 (2) .....	93
図8 打製・磨製石器の側縁及び刃部形態分類模式図.....	21	図71 SII24遺構図 (1) .....	96
図9 打製・磨製石器の欠損部位分類模式図.....	18	図72 SII24遺構図 (2) .....	97
図10 打製・磨製石斧の欠損部位分類模式図.....	20	図73 SII24遺構図 (3) .....	98
図11 打製・磨製石斧の刃部形態分類模式図.....	21	図74 SII45出土遺物 (1) .....	98
図12 I期出土遺物.....	25	図75 SII45出土遺物 (2) .....	99
図13 SII01遺構図 (1) .....	27	図76 SII27遺構図 (1) .....	100
図14 SII01遺構図 (2) .....	28	図77 SII27遺構図 (2) .....	101
図15 SII01出土遺物 (1) .....	29	図79 SII29・SII50遺構図 .....	103
図16 SII01出土遺物 (2) .....	30	図80 SII29出土遺物 .....	104
図17 SII06遺構図 (1) .....	32	図81 SII1遺構図 .....	106
図18 SII06遺構図 (2) .....	33	図82 SII2出土遺物 .....	107
図19 SII06遺構図 (3) .....	34	図83 SII2遺構図 (1) .....	109
図20 SII06出土遺物 (1) .....	36	図84 SII2遺構図 (2) .....	110
図21 SII06出土遺物 (2) .....	37	図85 SII2出土遺物 (1) .....	112
図22 SII06出土遺物 (3) .....	38	図86 SII2出土遺物 (2) .....	113
図23 SII06出土遺物 (4) .....	39	図87 SII3遺構図 (1) .....	114
図24 SII36遺構図 .....	41	図88 SII3遺構図 (2) .....	115
図25 SII39遺構図 .....	42	図89 SII3出土遺物 .....	116
図26 SII39出土遺物 .....	42	図90 SB07遺構図 (1) .....	118
図27 SII40遺構図 (1) .....	44	図91 SB07遺構図 (2) .....	119
図28 SII40遺構図 (2) .....	45	図92 SB07出土遺物 .....	119
図29 SII40出土遺物 .....	46	図93 SA03・SA06遺構図 .....	121
図30 SII43遺構図 .....	47	図94 SII1遺構図 .....	122
図31 SII43出土遺物 .....	49	図95 SII15遺構団 .....	123
図32 SII46遺構図 (1) .....	49	図96 II期SII6遺構団 .....	124
図33 SII46遺構図 (2) .....	50	図97 III期SII6遺構団 (1) .....	125
図34 SII46出土遺物 .....	50	III期SII6遺構団 (2) .....	126
図35 SA08遺構図 .....	52	III期SII6遺構団 (3) .....	127
II期SP遺構図 (1) .....	52	III期SP遺構団 (4) .....	128
II期SP遺構図 (2) .....	53	III期SP遺構団 (5) .....	130
II期SK遺構団 (1) .....	56	III期SP遺構団 (1) .....	130
II期SK遺構団 (2) .....	57	III期SP遺構団 (2) .....	131
II期SK遺構団 (3) .....	58	III期SP遺構団 (3) .....	132
II期SK遺構団 (4) .....	59	III期SK遺構団 (4) .....	133
II期SK遺構団 (5) .....	60	III期SK遺構団 (5) .....	134
II期SK遺構団 (6) .....	61	III期SK遺構団 (6) .....	135
II期SK遺構団 (7) .....	62	III期SK遺構団 (1) .....	136
II期出土遺物 (1) .....	62	III期出土遺物 (2) .....	137
II期出土遺物 (2) .....	63	III期SII4遺構団 .....	139
II期出土遺物 (3) .....	66	III期SII7遺構団 (1) .....	140
II期出土遺物 (4) .....	67	III期SII7遺構団 (2) .....	141
II期出土遺物 (5) .....	68	III期SII9遺構団 .....	141
II期出土遺物 (6) .....	69	III期SII10遺構団 .....	144
SII02遺構団 .....	71	III期SII4・SII7・SII10出土遺物 .....	145
SII02出土遺物 .....	71	III期SII11遺構団 (1) .....	148
SII08遺構団 (1) .....	72	III期SII11遺構団 (2) .....	149
SII08遺構団 (2)・SII08出土遺物 .....	73	III期SII11出土遺物 .....	149
SII13遺構団 (1) .....	75	III期SII17遺構団 (1) .....	151
SII13遺構団 (2) .....	76	III期SII17遺構団 (2) .....	152
SII13出土遺物 (1) .....	78	III期SII17出土遺物 .....	153
SII13出土遺物 (2) .....	79	III期SII20遺構団 (1) .....	155
SII13出土遺物 (3) .....	80	III期SII20遺構団 (2) .....	156
SII13出土遺物 (4) .....	81	III期SII20遺構団 (3) .....	157
SII14遺構団 .....	84	III期SII20出土遺物 (1) .....	157
SII16遺構団 .....	85	III期SII28遺構団 (1) .....	159

図127 S128遺構図（2）・S130遺構図	160	図193 IV期SK遺構図（8）	233
図128 S131遺構図（1）	162	図194 IV期SK遺構図（9）	234
図129 S131遺構図（2）	163	図195 IV期SK遺構図（10）	235
図130 S132遺構図（1）	163	図196 IV期SK遺構図（11）	236
図131 S120出土遺物（2）・S128・S131出土遺物	164	図197 IV期SK遺構図（12）	237
図132 S132遺構図（2）	165	図198 IV期SK遺構図（13）	238
図133 S132出土遺物（1）	167	図199 IV期出土遺物（1）	238
図134 S132出土遺物（2）・S134出土遺物	168	図200 IV期出土遺物（2）	240
図135 S133遺構図	170	図201 S103遺構図（1）	242
図136 S134遺構図（1）	170	図202 S103遺構図（2）	243
図137 S134遺構図（2）	172	図203 S103遺構図（3）	244
図138 S137遺構図（1）	174	図204 S103出土遺物	245
図139 S137遺構図（2）	175	図205 S116遺構図	247
図140 S138遺構図（1）	175	図206 S135遺構図（1）	247
図141 S138遺構図（2）	177	図207 S135遺構図（2）	249
図142 S142遺構図（1）	179	図208 S135遺構図（3）	250
図143 S142遺構図（2）	181	図209 S135遺構図（4）	251
図144 S144遺構図（1）	181	図210 V期SD・SP・SK遺構図	253
図145 S144遺構図（2）	182	図211 V期SK遺構図	254
図146 S137・S138・S142出土遺物	183	図212 S115・S135・SP031出土遺物・V期出土遺物	254
図147 S145遺構図（1）	185		256
図148 S145遺構図（2）	186	図213 S105遺構図（1）	258
図149 S145出土遺物（1）	186	図214 S105遺構図（2）	259
図150 S145出土遺物（2）	187	図215 S105遺構図（3）	260
図151 S147遺構図（1）	188	図216 S112遺構図（1）	262
図152 S147遺構図（2）	189	図217 S112遺構図（2）	263
図153 S147遺構図（3）	190	図218 S105・S112出土遺物	264
図154 S147出土遺物（1）	190	図219 S119遺構図	266
図155 S147遺構図（4）	191	図220 S121遺構図（1）	267
図156 S147出土遺物（2）	193	図221 S121遺構図（2）	268
図157 S148遺構図（1）	195	図222 S121遺構図（3）	269
図158 S148遺構図（2）	196	図223 S122遺構図（1）	269
図159 S147出土遺物（3）・S148出土遺物	196	図224 S122遺構図（2）	271
図160 S149遺構図	198	図225 S122遺構図（3）	272
図161 SB01遺構図	200	図226 S119・S121・S122・SK1397出土遺物	272
図162 SB02遺構図	201	図227 S125遺構図	274
図163 SB01・SB02出土遺物	202	図228 S126遺構図（1）	275
図164 SB03遺構図（1）	203	図229 S126遺構図（2）	276
図165 SB03遺構図（2）	204	図230 S126遺構図（3）	277
図166 SB05遺構図（1）	206	図231 S126出土遺物	278
図167 SB05遺構図（2）	207	図232 SA02遺構図	280
図168 SB06遺構図	208	図233 SA14遺構図	280
図169 SB08遺構図（1）	209	図234 SA17遺構図	281
図170 SB08遺構図（2）	210	図235 VI期SD遺構図	281
図171 SB09遺構図（1）	211	図236 SK0009・SK0070・SL1・SL2・SK0008遺構図	283
図172 SB09遺構図（2）	212	図237 VI期SP・SK遺構図	284
図173 SB10遺構図	213	図238 VI期SK遺構図（1）	286
図174 SA01遺構図	215	図239 VI期SK遺構図（2）	287
図175 SA04遺構図	215	図240 VI期出土遺物（1）	289
図176 SA05遺構図	216	図241 VI期出土遺物（2）	290
図177 SA12遺構図	216	図242 S141遺構図（1）	292
図178 SA13遺構図	218	図243 S141遺構団（2）	293
図179 SA18遺構図	218	図244 SB04遺構団（1）	293
図180 SD39・SD48遺構図	219	図245 SB04遺構団（2）	294
図181 SB09・SA01・SA04・SD39出土遺物・SD48出土遺物（1）	220	図246 SA19遺構団	296
図182 SD48出土遺物（2）	221	図247 SD11遺構団	297
図183 SD48出土遺物（3）	222	図248 SD21・SD23・SD32・SD45遺構団	299
図184 IV期SD遺構図	222	図249 VII期SD遺構団（1）	300
図185 IV期SP遺構団	224	図250 VII期SD遺構団（2）	301
図186 IV期SK遺構団（1）	226	図251 VII期SP遺構団	302
図187 IV期SK遺構団（2）	227	図252 VII期SK遺構団（1）	304
図188 IV期SK遺構団（3）	228	図253 VII期SK遺構団（2）	305
図189 IV期SK遺構団（4）	229	図254 VII期SK遺構団（3）	306
図190 IV期SK遺構団（5）	230	図255 VII期出土遺物	307
図191 IV期SK遺構団（6）	231	図256 ST1・ST2・SE1遺構団	309
図192 IV期SK遺構団（7）	232	図257 VII期SD遺構団	311
		図258 VII期SP・SK遺構団	312

図259 VII期出土遺物	313	図270 時期不明SP遺構図（5）	325
図260 柱穴群1遺構図	315	図271 時期不明SP遺構図（6）	326
図261 SA07遺構図	316	図272 時期不明SP遺構図（7）	327
図262 SA09・SA10遺構図	317	図273 時期不明SP遺構図（8）	328
図263 SA16・SA20遺構図	319	図274 時期不明SP遺構図（9）	329
図264 時期不明SD遺構図（1）	320	図275 時期不明SP遺構図（10）	330
図265 時期不明SD遺構図（2）	321	図276 時期不明SP遺構図（11）	331
図266 時期不明SP遺構図（1）	321	図277 時期不明SP遺構図（12）	332
図267 時期不明SP遺構図（2）	322	図278 時期不明SP遺構図（13）	333
図268 時期不明SP遺構図（3）	323	図279 時期不明SP遺構図（14）	334
図269 時期不明SP遺構図（4）	324	図280 時期不明SP遺構図（15）	335

## 表目次

表1 東野遺跡の時期区分	12	表4 I期の石器類器種別数量	18
表2 検出遺構一覧表	12	表5 II期以降の石器類器種別数量	18
表3 土器類出土量	15	表6 器種別石材一覧	19

## 挿入写真目次

写真1 平成24年度作業風景	5	写真3 平成25年度作業風景	6
写真2 平成24年度現地見学会の様子	5	写真4 平成25年度現地見学会の様子	6

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

当遺跡は、加茂郡坂祝町黒岩、大針に位置する（図1）。平成15・16年度に国道248号太田バイパス道路改良（坂祝町）に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しており、縄文時代、古墳時代、古代の集落跡を確認している。

平成22年度、一般国道21号坂祝バイパス建設計画において、東野遺跡に隣接する事業予定地内に遺跡が展開する可能性が考えられたことから、岐阜県教育委員会（以下「県教育委員会」という。）が踏査をしたところ遺物の散布があったため、試掘確認調査の必要性が認められた。

試掘確認調査については、多治見砂防国道事務所長（以下「事務所長」という。）から県教育委員会教育長（以下「県教育長」という。）に依頼（平成23年4月27日付け国部整多調第9号）があり、これを受けて県教育委員会は、試掘確認調査を行うための諸条件が整った箇所から順次調査を行うこととなり、平成23・24・25年にそれぞれ試掘確認調査を実施した。

平成23年6月3日、7～9日にTP01～16（図2）の調査を実施し、縄文時代と古墳時代の遺構や、当該期及び中・近世の遺物を確認した。この結果、東野遺跡が南に広がることが判明したため、県教育長は坂祝町教育委員会教育長に遺跡範囲の変更の通知（平成23年6月29日付け社文第366号）をした。同年8月25日に開催した平成23年度第1回岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会において遺跡の取扱いについて検討し、TP03・04・07・09を含む範囲、TP12を含む範囲、TP13以南の3地点（図2、斜線網掛け範囲）の本発掘調査が必要との意見をまとめた。文化財保護法第94条第1項の規定に基づ

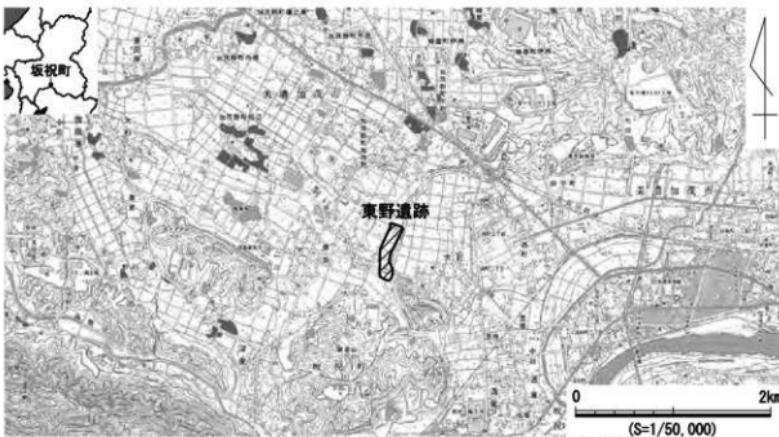


図1 遺跡位置図 (S=1/50,000 國土地理院発行1:25,000地形図「美濃關」「美濃加茂」)

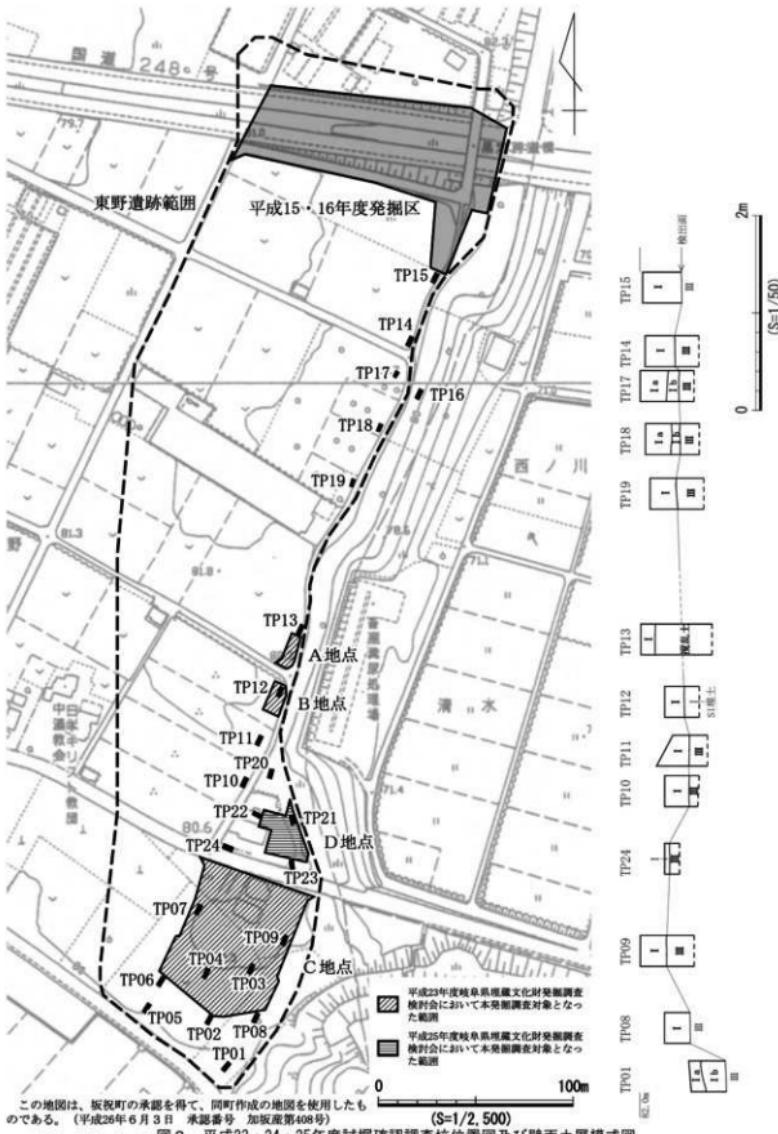


図2 平成23・24・25年度試掘確認調査坑位置図及び壁面土層模式図

き、事務所長から県教育長あて発掘の通知（平成 24 年 2 月 1 日付け国部整多調設第 48 号）が提出され、これに対し同法第 94 条第 4 項の規定に基づき、発掘調査の実施を求める勧告（平成 24 年 2 月 21 日付け社文第 4 号の 152）がなされた。事務所長から発掘調査の依頼を受けた岐阜県文化財保護センター（以下「センター」という。）は、平成 24 年 8 月 9 日から発掘調査を開始し、同法第 99 条第 1 項の規定に基づく発掘調査着手の報告（平成 24 年 8 月 23 日付け文財セ第 58 号）を県教育長に提出した。

平成 24 年 11 月 20 日に TP17~19（図 2）の調査を実施したが、遺構・遺物は確認できなかつた。

平成 25 年 5 月 20 日に TP20~24（図 2）の調査を実施し、縄文時代と古墳時代の遺構や、当該期の遺物を確認した。同年 6 月 4 日に開催した平成 25 年度第 1 回県埋蔵文化財発掘調査検討会において遺跡の取扱いについて検討し、TP21 を含む範囲（図 2、横線網掛け範囲）の本発掘調査が必要との意見をまとめた。検討結果を受けて、県教育長は事務所長に対し遺跡の取扱いについて再通知（平成 25 年 6 月 4 日付け社文第 4 号の 33）をした。事務所長から発掘調査の依頼を受けたセンターは平成 25 年 5 月 27 日から発掘調査を開始し、同法第 99 条第 1 項の規定に基づく発掘調査の報告（平成 25 年 6 月 12 日付け文財保第 63 号）を県教育長に提出した。

発掘作業は、平成 24 年度に 2,564 m<sup>2</sup>、平成 25 年度に 1,988 m<sup>2</sup>を実施し、整理等作業は、平成 26 年度に実施した。

## 第 2 節 調査の経過と方法

### 1 調査の方法

発掘作業においては、平成 15・16 年度調査（以下「前回調査」という。）と整合性をもたせるために、前回調査発掘区グリッド設定時の北西角である世界測地系座標の X = -61345、Y = -16705 を原点として 100×100m の大区画を設定し、北西から南東へアルファベット A～O を付した。さらにその内部に 5×5 m の小区画を設定し、調査区画の最小単位（グリッドと呼称）とした。調査杭には、南北列に西から 1～20、東西列に北から A～T の番号を付した。このため、グリッドの呼称は大区画と調査杭番号を用いて「A A01」のように表示した。また、調査進行の便宜上、平成 24 年度発掘区を C 1 地点、平成 25 年度発掘区を北から A、B、D、C 2 地点とした（図 3）。

基本層序は、前回調査を踏襲して I 層から VI 層まで設定し、I a 層を表土、I b 層を遺物包含層、II 層ないし III 層を遺構基盤層としたが、今回の発掘区は I 層の堆積が薄く、さらに後世の攪拌が強いため、I a 層と I b 層を明確に分けることはできなかつた。なお、C 1・2 地点の最も標高の高いところで一部 II 層を確認したが、ほぼ全域で I 层直下に III 層を確認できることが特徴である（図 2 及び第 3 章第 1 節参照）。

発掘作業では、まず重機により発掘区内全面の盛土及び I 层上層を除去した。遺物が認められる時点で表土掘削を止め、その後人力で掘削した。遺構検出作業は II 層ないし III 層上面で行った。遺構調査に当たっては、写真撮影、手測り実測、デジタル測量を行つた。発掘区全体の写真撮影は、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行つた。遺物包含層や遺構内から出土した遺物は、原則としてすべてトータルステーションにより出土位置を測定して取り上げた。その後、一部の遺構についてはサブトレーンチを設定して補足調査を行つた。

4 第1章 調査の経緯

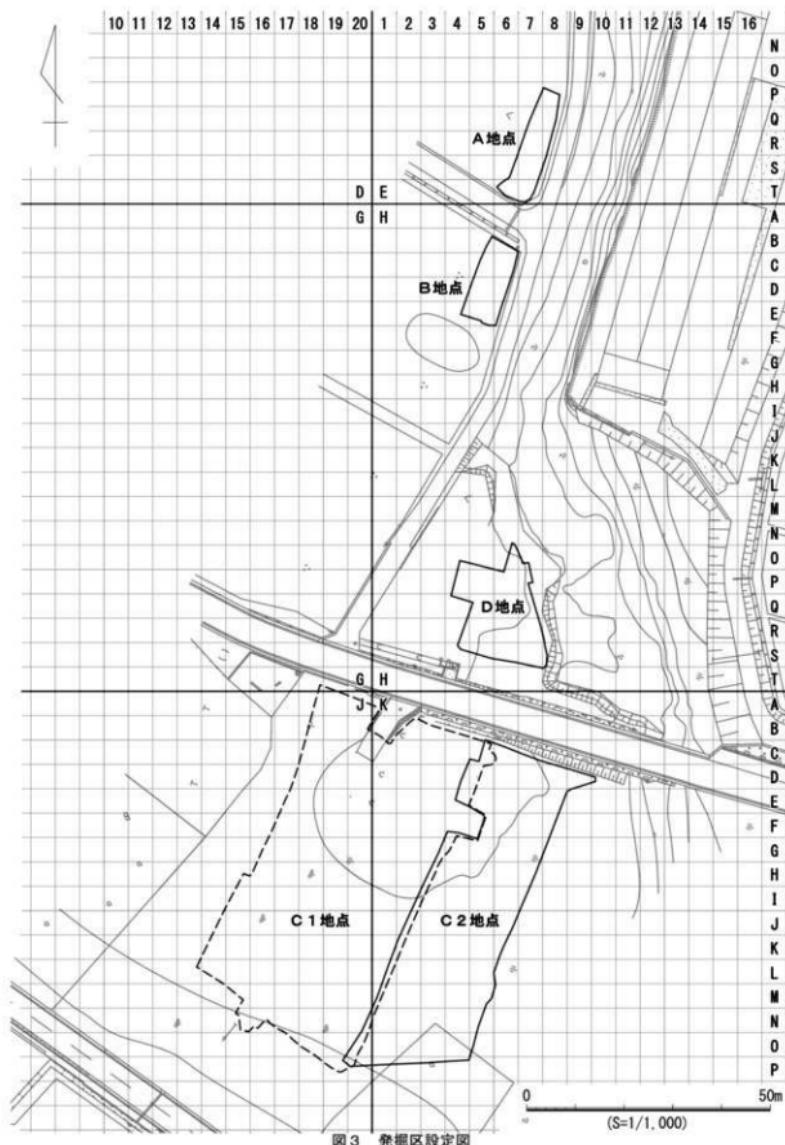


図3 発掘区設定図

なお、出土遺物の洗浄及び注記作業、遺物台帳作成（一次整理作業）は、発掘作業支援業務の一部として現地で行った。

## 2 調査の経過

現地での調査経過は以下の通りである。

### 平成 24 年度 発掘作業面積 2,564 m<sup>2</sup>

8月9日にC1地点の重機による表土掘削作業を開始し、発掘区中央部から南部までの表土除去を行った。17日に調査区画杭設定作業を行った。20日から人力による遺物包含層掘削、遺構検出作業、遺構掘削作業（以下「人力掘削」という。）を開始した。27日に当センター主催の普及活用事業「タイムスリップ探検隊」において発掘体験を行い、8組16名の参加があった。10月11日にC1地点内北部の電柱を撤去し、発掘区北部の表土掘削作業を開始した。15日に一次整理作業を開始した。23日に国際日本文化研究センター宇野隆夫教授の現地指導を受けた。11月23日にC1地点の一部を公開して現地見学会を開催し、230名の参加があった。12月18日に公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏に現地で指導を受けた。20日に発掘区全体の景観撮影を行った。21日から補足調査を開始し、26日に現地作業を完了した。28日に一次整理作業を完了した。平成25年1月28日に多治見砂防国道事務所に現地を引き渡した。

なお、以下の団体の研修、見学を受け入れた。

坂祝町議会、坂祝町広報課、坂祝町郷土史研究会、社会科を学ぶ会、岐阜県文化財巡視員



写真1 平成24年度作業風景



写真2 平成24年度現地見学会の様子

### 平成 25 年度 発掘作業面積 1,988 m<sup>2</sup>

5月27日にA・B・C2地点の重機による表土掘削作業を開始し、調査区画杭設定作業を行った。31日に人力掘削をA地点から開始した。6月11日にA地点の作業を完了し、B地点の人力掘削を開始した。13日にD地点の重機による表土掘削作業を開始し、調査区画杭設定作業を行った。24日にD地点の人力掘削を開始した。28日にB地点の作業を完了した。7月12日にD地点の作業を完了し、C2地点の人力掘削を開始した。31日に当センター主催の普及活用事業「タイムスリップ探検隊」において発掘体験を行い、12組27名の参加があった。10月1日に一次整理作業を開始した。3日に帝

## 6 第1章 調査の経緯

塙山大学宇野隆夫教授の現地指導を受けた。11月9日にC2地点を公開して現地見学会を開催し、224名の参加があった。28日に発掘区全体の景観撮影を行った。12月4日に公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター赤塙次郎氏に現地で指導を受けた。4日から補足調査を開始し、10日に現地作業を完了した。12日に一次整理作業を完了した。25日に多治見砂防国道事務所に現地を引き渡した。

なお、以下の団体の見学を受け入れた。

みのかも文化の森フォレッタくらぶ（ドキ土器わくわく講座）



写真3 平成25年度作業風景



写真4 平成25年度現地見学会の様子

整理等作業は、平成26年4月から平成27年3月まで実施した。発掘作業から整理等作業までの体制は以下の通りである。

センター所長 丸山和彦（平成24、25年度）、宮田敏光（平成26年度）

総務課長 村瀬誠三（平成24年度）、二宮隆（平成25、26年度）

調査課長 小谷和彦（平成24年度）、成瀬正勝（平成25、26年度）

調査担当係長 河瀬実浩（平成24、25年度）、藤田英博（平成26年度）

担当調査員 河合洋尚（平成24、25、26年度）、柏木賢一（平成24年度）、  
長谷川幸志（平成25年度）

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

当遺跡が立地する加茂郡坂祝町は、美濃山地の南に発達する美濃加茂盆地と各務原山地の接する加茂野台地東端に位置する。加茂野台地は、美濃加茂市加茂野町から北西方向に閔市まで標高70~80mの中位段丘が細長く続く。中位段丘は北西へ向かって緩やかに傾斜し、東の段丘下には低位段丘が広がる。この中位段丘と低位段丘を分ける段丘崖で、木曾川水系と長良川水系を分けている。

当遺跡南西の各務原山地部は主に美濃帯堆積岩類からなり、チャート、砂岩、泥岩などで構成され、東南東~西北西に連なる。これは、坂祝向斜と呼ばれる褶曲の軸が同方向に存在することに起因する。山地をつくる砂岩とチャートは物性が異なる。当遺跡南に位置する郷部山（標高179.8m）は砂岩層から成り、浸食風化に弱いため比較的なだらかな山体を形成する。当遺跡南西の城山（標高275.3m）はチャートから成り、浸食風化に強いため急崖をなす山体を形成する。このような特徴をもつため、東南東~西北西方向に急崖をなす山体と比較的なだらかな山体が交互に配列する。

当遺跡が立地する加茂野台地は各務原層に対比される加茂野層と呼ばれる段丘堆積物からなる。この層は、御嶽起源の御嶽火山第一軽石層、御嶽火山第三軽石層をはさむという特徴を持つ砂礫層及び砂層である。形成時期については、9~6万年前頃に遡ると考えられている。その上層に木曾川泥流堆積物が分布する。これは、御嶽火山起源の安山岩類である角礫と、泥流が流れる過程で取り込まれた河川礫である円礫とで構成される。八百津町の木曾川泥流堆積物中に含まれる樹木片の放射性炭素年代測定により、約4.9万年前の堆積物と考えられている<sup>1)</sup>。その上層に風成堆積物が載る。平成15・16年度調査における基盤層のテフラ分析により、IV層及びその上位層では、円磨した姶良Tnテフラが含まれていることが確認されている<sup>2)</sup>。その噴出時期である29,000年前~26,000年前以後徐々に堆積し、特にII層下部で堆積のピークが存在することが判明している。風成起源の堆積物が、その植生等によって土壤化され、加茂野台地は黒ボクと呼ばれる肥沃な土地となっている。

当遺跡東の美濃加茂盆地は低位段丘堆積物からなる。5段に識別される盆地中央部の低位段丘に対して、坂祝町地域は、大針面・酒倉面・前田面の上位3段に識別される。いずれも自然堤防状で、河川性の礫層で構成される。中位段丘上の東野に接する東部には、清水、西の川、十島など、低湿地特有の字名が現在も残る。

古代律令期に東山道各務駅（各務原市鵜沼辺り）から可児駅（可児郡御嵩町辺り）へ抜ける交通路として、かつ東山道可児駅から飛驒支路武儀駅（閔市下有知、美濃市中有知・上有知辺り）へ抜ける交通路として加茂野台地が利用されていたと考えられる。

当遺跡が立地する郷部山北麓について徳田誠志氏は、東に神坂峠と恵那山、北東に御嶽山、北に乗鞍を一望できることから、地理的に重要な役割を担っていた可能性を指摘している<sup>3)</sup>。

1) 中村俊夫・藤井登美夫・鹿野勘次・木曾谷第四紀巡査会 1992「岐阜県八百津町の木曾川泥流堆積物から採取された埋没樹木の加速器<sup>14</sup>C年代」『第四紀研究 vol.31』

2) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007「第4章 第2節 基盤層のテフラ分析」『東野遺跡（第2分冊）』

3) 徳田誠志 1992「古墳時代前末期の二古墳—岐阜県行基寺・前山古墳をめぐって」『肝臓 関西大学博物館課程創設三十周年特集』

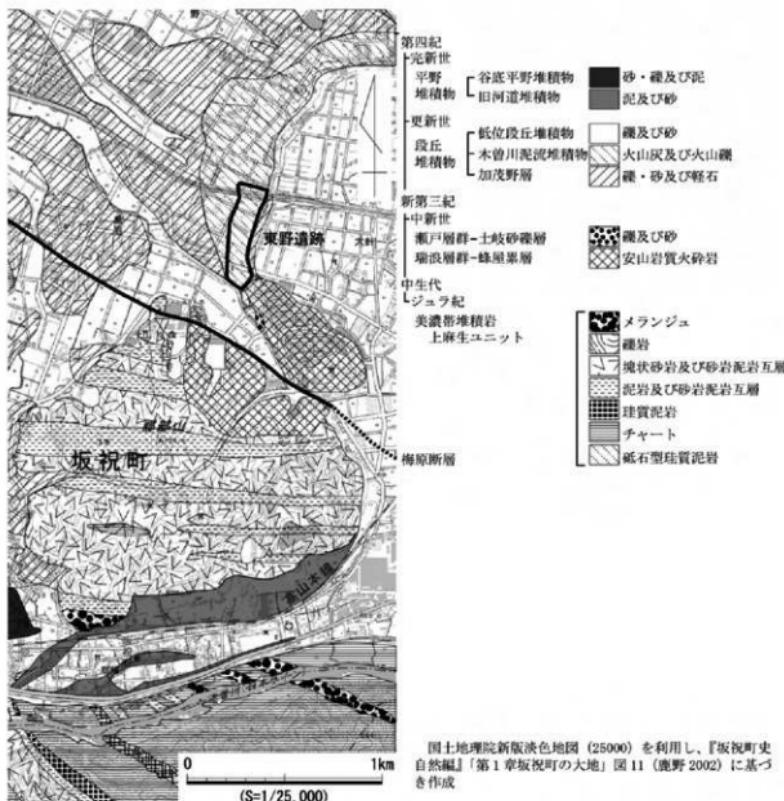


図4 東野遺跡周辺の地質 (S=1/25,000)

## 第2節 歴史的環境

東野遺跡（1）周辺には、いくつかの遺跡が確認されている。以下、当遺跡が所在する坂祝町内の遺跡を中心に、美濃加茂盆地から加茂野台地上に立地し、発掘調査等により詳細が明らかになってい る主な遺跡を時代順に概観する。なお、文中の遺跡名のあと番号は、図5と一致する。

旧石器時代の遺跡は、加茂野台地上に野田遺跡、平井遺跡、唐鋤遺跡（33）などがある。これらの遺跡では、ナイフ形石器や台形石器を表面採集している。当遺跡の平成15・16年度調査（以下、「前

回調査」という。）では、ナイフ形石器や台形石器、石核などが出土した。

縄文時代の遺跡は、低位段丘上に芦戸遺跡（19）、大林遺跡（22）など、中位段丘面に唐勧遺跡、稻辺遺跡（31）などがある。芦戸遺跡では中期の土器、打製石斧、磨製石斧、石錐を表面採集している。また、昭和61年の木曾川改修工事に伴う発掘調査で、中期の竪穴建物1軒、前期の土坑17基を確認し、前期後半から後期前半にかけての土器が出土した。大林遺跡では、中期の加曾利E式併行・里木II式が出土したとされる。

弥生時代の遺跡は、低位段丘上の芦戸遺跡、大林遺跡、中位段丘上の南野遺跡（2）、伊瀬栗地遺跡（7）、変電所南遺跡（8）などがある。南野遺跡では中期の竪穴建物1軒を確認した。その建物から当該期の土器や有孔磨製石鎌が出土した。伊瀬栗地遺跡では鉄劍や多孔銅鏡を伴う後期の方形台状墓を確認した。当遺跡西北西約3.2kmの大杉西遺跡（関市）では、後期の竪穴建物から有孔磨製石鎌、磨製石鎌未製品、砥石が出土しており、磨製石鎌製作工房の可能性を指摘している。

古墳時代の遺跡は、集落では南野遺跡がある。南野遺跡では竪穴建物3軒を確認しており、出土遺物から5世紀後半～6世紀初頭と位置づけている。第3号建物は、床面で焼土と炭化材を確認した焼失建物である。古墳は、前期の前山古墳（26）、後期の火塚古墳群（18）など町内にも多数存在する。前山古墳は古墳時代前期の円墳で、明治18年に発見され、銅鏡4面、玉類41個、剣1口が出土し、翌年宮内庁へ送付した経緯が残る。出土した変形四獸鏡、捩文鏡、珠文鏡から4～5世紀前半に位置づく。また、当遺跡南の郷部山南麓から西麓に多数の古墳が確認されており、野田古墳群（20）、神田古墳（23）、梅替古墳（25）などがある。梅替古墳は平成25年度に発掘調査が実施された。6世紀前半に築造された二段築成の円墳で、西向きに開口する無袖式の横穴式石室をもつことが判明している。玄室内から金銅製耳環、滑石製紡錘車、鉄鎌などが出土した。東北東約3.5kmの高位段丘南端部に、縄文から中世の複合集落の尾崎遺跡（美濃加茂市）がある。当該期に属する多数の竪穴建物や掘立柱建物、鍛冶遺構などを確認した。西北西約3kmの中位段丘面に大杉遺跡（関市）がある。縄文時代から古代の集落で、縄文時代から古代に属する多数の竪穴建物を確認した。当該期の竪穴建物の中には焼失建物や2本柱建物などがあり、また区画施設と考えられる溝状遺構を確認していることから当遺跡と類似性がある。

古代の遺跡は、伊瀬栗地遺跡、県主神社西遺跡（9）、雲埋廃寺跡（11）、輪形古窯跡（30）などがある。坂祝町酒倉に所在する雲埋廃寺跡は、雲梅廃寺と表記されることもある。大正末期の開墾時、7～8世紀代の單弁八葉文軒丸瓦が出土した。輪形古窯跡は太田元薬師廃寺跡（美濃加茂市）所用の湖東式軒丸瓦を焼いた窯とされる。当遺跡南東0.6kmに坂祝神社がある。坂祝神社は『延喜式神明帳』に記載のある「坂祝（サカハフリノ）神社」に比定されている。

中・近世の遺跡は、猿啄城居館跡（28）、猿啄城跡（29）などがある。町指定史跡の猿啄城跡は当遺跡南西の城山山頂に立地し、その東麓に猿啄城居館跡がある。当遺跡から東へ4kmに仲迫間遺跡（美濃加茂市）がある。近世末の墓坑群を確認した。墓坑内から葬送儀礼に伴うとされる木製龍頭が出土した。

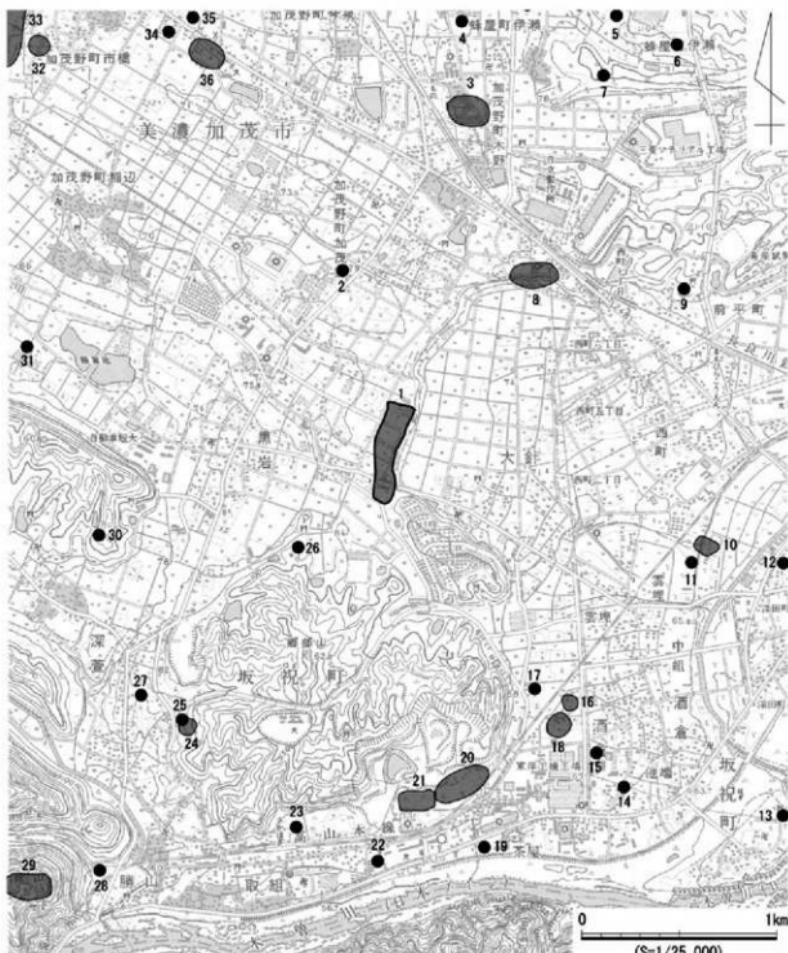


図5 周辺遺跡位置図 (S=1/25,000 国土地理院発行1:25,000地形図「美濃関」「美濃加茂」)

- 1 東野遺跡
- 2 南野遺跡
- 3 木野古墳群
- 4 下伊瀬遺跡
- 5 円満寺遺跡
- 6 ネンガ洞遺跡
- 7 伊瀬粟地遺跡
- 8 変電所南遺跡
- 9 県主神社西遺跡
- 10 トドメキ古墳群
- 11 雲埋庵寺跡
- 12 沖稻葉遺跡
- 13 東島古墳
- 14 北高見古墳
- 15 新木林古墳
- 16 西稻葉古墳群
- 17 山神古墳
- 18 火塚古墳群
- 19 芦戸遺跡
- 20 野田古墳群
- 21 野田遺跡
- 22 大林遺跡
- 23 神田古墳
- 24 見城寺跡
- 25 梅替古墳
- 26 前山古墳
- 27 南大洞古墳
- 28 猿啄城居館跡
- 29 猿啄城跡
- 30 輪形古窯跡
- 31 稲辺遺跡
- 32 德運寺遺跡
- 33 唐鋤遺跡
- 34 大塚古墳
- 35 西今泉古墳
- 36 きつね塚古墳群

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

東野遺跡A・B・D地点は、中位段丘面上に広がり、西北西へ向かう緩斜面上に立地する。また、A地点からD地点に向かって緩やかに傾斜する。C地点は南に旧河道を臨む微高地に位置し、南南西に向かって緩やかに傾斜する。C地点の最も高い範囲は、北に位置するD地点の標高より0.5~1.2m高い（図2参照）。

河川による堆積は、古木曾川による木曾川泥流堆積物（VI層）から下層となり、その上に堆積するI層からV層は、姶良Tn火山灰を起源とする火山ガラスの含有率が高く、含まれる火山ガラスが円磨されていることから、風成堆積によるものと考えられる（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007）。

基本層序は当遺跡の前回調査を踏襲した。

#### I層（黒色土・黒褐色土層）

遺物包含層と認識した層で、土壤化が進んだ風成堆積による黒色土層である。現代の耕作や構築物による攪拌を受ける、締まりのない黒色土層をIa層と設定した。前回設定した縄文時代以降の自然的要因や人的要因による土の攪拌が認められるが、現代の攪拌は一部にとどまる、やや締まる黒色土層のIb層は、今回の調査で確認できなかった。最上層が遺物を含み、後世に強く攪拌された層であることから、前回調査同様、縄文時代以降の遺構面はI層中に存在すると考えられる。

#### II層（黒褐色土層）

前回調査で確認した、土壤化の進みが弱く、縄文時代以降の自然的要因や人的要因による土の攪拌をあまり受けていない風成堆積による黒褐色土である。今回の発掘区では、C地点の標高の高い範囲で確認できたのみである。

#### III層（褐色土層）

風成堆積による褐色のシルト層である。この段丘面を広く覆う層である。Ib層及びII層を確認できなかった今回の発掘区でこの上面で遺構を確認したことから遺構基盤層と判断した層である。これより下の層で遺構や遺物は確認できなかった。

#### IV層（暗褐色土層）

風成堆積による暗褐色のシルト層である。

#### V層（褐色土層）

風成堆積による褐色のシルト層である。

#### VI層（褐色土層）

御岳の噴火により生じた土石流の堆積物（木曾川泥流堆積物）の層である。礫が多く、堅い地盤である。

## 12 第3章 調査の成果

### 第2節 遺構・遺物の概要

平成 15・16 年度調査(以下「前回調査」という。)で設定した時期区分を踏襲して当てはめると、今回の調査で確認した時期は 8 時期に及ぶ(表 1 参照)。

表 1 東野遺跡の時期区分

設定時期		東野Ⅰ期	東野Ⅱ期	東野Ⅲ期	東野Ⅳ期	東野Ⅴ期	東野Ⅵ期	東野Ⅶ期	東野Ⅷ期
時代		旧石器	縄文中期	弥生	古墳前期	古墳後期	古代	中世	近世
H24・25調査	遺構	-	○	○	○	○	○	○	○
	遺物	○	○	○	○	○	○	○	○
H15・16調査	遺構	-	○	-	○	○	○	-	-
	遺物	○	○	○	○	○	○	○	○

#### 1 遺構概要

##### (1) 遺構概要

調査で検出した遺構は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世のものがある(表 1)。前回調査では、段丘崖から西へ離れるにしたがいⅡ層が確認でき、その上面で遺構を検出したが、段丘崖に近い A・B・D 地点は、前回調査と同様Ⅰ層直下でⅢ層を確認した。また、C 地点は、標高の最も高い北寄りの範囲で一部Ⅱ層を確認したが、概ねⅠ層直下でⅢ層を確認した。これにより、大半の遺構をⅢ層上面で検出したが、自然による土砂の流入出がほとんどないため本来の遺構面はⅠ層中にあると考えられる。また、風成によって徐々に堆積しているため、縄文時代以降の生活面に層位的な差はほとんどないと考えられる。そのため、遺構の時期は遺構内部から出土した遺物と、時期の判明した遺構との重複関係によって決定した。出土した遺物が複数の時代にまたがる場合は、原則として時期の新しいもので時期決定をしたが、出土状況や出土量も判断材料にした。

検出した遺構は、堅穴建物、掘立柱建物、柵、方形周溝墓、溝状遺構、土器埋納遺構、墓坑、井戸、柱穴、土坑などである。ただし、時期が判明した遺構は前述の判断基準によって約 48.8% にとどまる。

表 2 検出遺構一覧表

設定時期	時代	SI	SI 付属	SB	SB 柱穴	SA	SA 柱穴	SZ	SD	SP	SK	SL	ST	SE	合計
II期	縄文時代	7	82	0	0	1	4	0	0	28	125	0	0	0	247
III期	弥生時代	11	115	1	12	4	19	3	6	83	123	0	0	0	377
IV期	古墳時代前期	21	221	8	77	6	22	0	8	27	268	0	0	0	658
V期	古墳時代後期	3	30	0	0	0	0	0	3	4	25	0	0	0	65
VI期	古代	7	80	0	0	3	12	0	5	9	79	2	0	0	197
VII期	中世	1	8	1	13	1	5	0	17	17	58	0	0	0	121
VIII期	近世	0	0	0	0	0	0	0	6	4	9	0	2	1	22
不明		0	0	0	0	5	19	0	17	277	1,452	0	0	0	1,770
合計		50	536	10	102	20	81	3	62	449	2,139	2	2	1	3,457

遺構番号は、平成 24 年度は調査担当者が 2 名のため、略号として「AS」「BS」を用い、発掘作業時に通し番号を付与した。平成 25 年度は「AS」を用い、平成 24 年度の通し番号を継続して付与した。その後、整理等作業時に遺構の種別ごとに下記の略号と、略号毎に通し番号を付与した。また、建物等に付属すると判断した遺構については、「SI01-」のように付属する遺構を先頭に記し、遺構の種別(M・P・炉・竈・壁際溝)と、種別毎に通し番号を付与した。

遺構略号 S A - 櫻 S B - 建物（竪穴建物を除く） S D - 溝状遺構 S E - 井戸  
 S I - 竪穴建物 S K - 土坑（穴） S L - 焼土遺構 S P - 柱穴  
 S T - 近世墓坑 S Z - 周溝墓 NW - 倒木痕・根痕  
 M - 竪穴建物内盛土状遺構・竪穴建物内周堤状遺構  
 P - 竪穴建物内柱穴・土坑、掘立柱建物柱穴、櫛柱穴

#### ①Ⅱ期の遺構（縄文時代中期）

Ⅱ期の遺構は、竪穴建物、櫻、溝状遺構、柱穴、土坑である。土坑の多くは性格不明のものであるが、墓の可能性が考えられるものもある。

#### ②Ⅲ期の遺構（弥生時代中期・後期・末期～古墳時代初頭）

Ⅲ期の遺構は、竪穴建物、掘立柱建物、櫻、方形周溝墓、溝状遺構、柱穴、土坑などの遺構である。前回調査で遺物は確認したが、遺構は確認できなかった時期である。土坑の多くは性格不明のものである。

#### ③Ⅳ期の遺構（古墳時代前期）

Ⅳ期の遺構は、竪穴建物、掘立柱建物、櫻、溝状遺構、柱穴、土坑である。当遺跡の遺構は、この時期に属するものが最も多い。土坑の多くは性格不明のものである。

#### ④Ⅴ期の遺構（古墳時代後期）

Ⅴ期の遺構は、竪穴建物、溝状遺構、柱穴、土坑である。土坑の多くは性格不明のものである。

#### ⑤Ⅵ期の遺構（古代）

Ⅵ期の遺構は、竪穴建物、櫻、溝状遺構、柱穴、土坑、焼土遺構である。土坑の多くは性格不明のものである。

#### ⑥Ⅶ期の遺構（中世）

Ⅶ期の遺構は、竪穴建物、掘立柱建物、櫻、溝状遺構、柱穴、土坑である。土坑の多くは性格不明のものである。

#### ⑦Ⅷ期の遺構（近世）

Ⅷ期の遺構は、墓、井戸、溝状遺構、柱穴、土坑である。土坑の多くは性格不明のものである。

#### ⑧時期不明の遺構

検出した遺構のうち、51.2%が時期不明の遺構となる。これは、遺構の所属時期を、供伴する遺物や遺構の重複関係によって決定したためであり、Ⅱ～Ⅷ期に属する可能性が考えられる。

#### （2）遺構一覧表・遺構実測図

##### ①遺構一覧表

- ・遺構の検出層位は基本層序と検出面で表し、Ⅲ層上面で検出した遺構の場合「Ⅲ層上面」と表記した。

- ・遺構の規模の単位はmであるが、（ ）で示したものは、全形が確認できなかったため、残存長を測ったものである。

- ・平面形・底面形は、形状（a～d）と長軸長と短軸長の比（1～4）で表示した。

a 円形	b 方形	c 不定形	d 不明
------	------	-------	------

1	～1.2	2	～1.5	3	～2.0	4	2.0 を超える
---	------	---	------	---	------	---	----------

- ・土坑断面形は、断面の形状（A～E）と、底面での短軸長と深さとの比（1～6）、底面（a～d）と壁面（1～5）の状況の4つの文字で表示した。

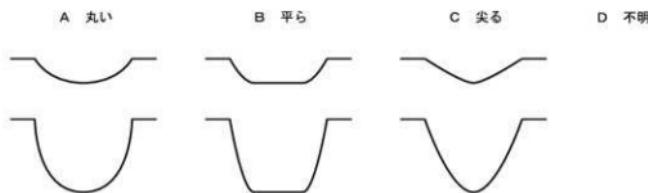


図6 底面の形状の模式図

- 深さ：底面での短軸長 1-1 : 0.3 未満 2-1 : 0.7 未満 3-1 : 1.1 未満 4-1 : 1.5 未満  
 5-1 : 1.5 以上 6-不明
- 底面の状況 a-丸いか平らのまま b-底が2段になる c-底面が凸凹 d-不明
- 壁面の状況 1-壁が開く 2-壁が直立に近い 3-壁面に段がある 4-袋状に広がる 5-不明
- ・遺構の埋土は、分層数と堆積状況（A～H）で表示した。
 

A-埋土が單一層 B-ほぼ水平な堆積 C-中央がU字状に凹む堆積 D-凹みが偏った堆積  
 E-ブロック状に土層があり込む堆積 F-最上層が掘り込んだ状態となるもの  
 G-柱痕跡状の土層があるもの H-その他
  - ・出土遺物は以下の略号と出土点数で表示した。

- J-縄文土器 H-弥生土器・土師器類 P-須恵器 K-灰釉陶器 Y-山茶碗 T-陶磁器類  
 S-石器 R-鍛 D-土製品 I-鉄製品 C-炭化物 N-種実類 L-粘土塊・焼土塊 B-骨類
- ・遺構の重複関係は、「新>古」の関係を示す。
  - ②遺構実測図
  - ・重複関係で消失した平面（上端、下端、遺構ケバ等）は黒50%調子落としで表示した。
  - ・遺物出土状況図に示した遺物実測図の縮尺は、原則8分の1で示している。

## 2 遺物概要

### （1）遺物概要

出土した遺物は、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世のものがある。

#### ①土器類

土器類の出土量は出土点数・質量・個体数<sup>1)</sup>とそれぞれの割合を表3にまとめた。この中には、試掘確認調査で出土した遺物を含む。土器類の種別の状況は遺構の数の確認状況とよく似ている。出土点数は弥生土器・土師器類が最も多く、次いで縄文土器である。なお、報告書内で図示した遺物は、遺構の所属時期を決定した根拠となるものや、遺構や遺物包含層から出土した時期判別がある程度可能なもの、特徴的なものを抽出した。

表3 土器類出土量

	縄文土器	弥生土器	土師器			弥生・土師器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗	陶磁器類	合計
			IV期	V・VI期	VII期						
出土点数(点)	3,032	1,978	3,379	560	13	6,293	1,032	300	387	219	17,193
割合(%)	17.64	11.50	19.65	3.26	0.08	36.60	6.00	1.74	2.25	1.27	100
質量(g)	44,782	37,098	31,969	7,953	80	40,082	17,298	3,115	2,564	3,701	188,642
割合(%)	23.74	19.67	16.95	4.22	0.04	21.25	9.17	1.65	1.36	1.96	100
残存率(X/12)	265	536	604	91	14	231	309	139	128	95	2,412
割合(%)	10.99	22.22	25.04	3.77	0.58	9.58	12.81	5.76	5.31	3.94	100

### 縄文土器(Ⅱ期)

3,032点出土した。時期判断できたほとんどは中期後葉のものである。これを、既存の研究成果を参考にして、有文深鉢を中心に器形・文様などの特徴から、必要に応じて分類を行った。縄文土器の分類は次のとおりである。

・深鉢 東海地方西部のものについては形態により大きくA～Fに分け、形態によってさらに細分した。それ以外のもの(東海地方西部の土器に比定が困難であるもの)は量的に少ないので細分せず掲載した。

<深鉢A>有文深鉢で口縁部に隆帯で文様を描くものをこの類とした。さらに、区画文が連続するものをA1類、1区画が収束しながら連続するものをA2類とした。

<深鉢B>有文深鉢で口縁部に沈線で文様を描くものをこの類とした。さらに、区画文が連続するものをB1類、1区画が収束しながら連続するものをB2類、その他のものをB3類とした。

<深鉢C>有文深鉢で口縁部が立体的なものをこの類とした。

<深鉢D>有文深鉢で口縁部文様のないものをこの類とした。

<深鉢E>無文深鉢をこの類とした。さらに、器面調整が縄文のものをE1類、ナデなどその他のものをE2類とした。なお、胴部文様が確認できない深鉢D類の口縁部片や口縁部が確認できない胴部片もこの類に含まれる。

<深鉢F>胴部のみの有文深鉢で口縁部形態が不明のものをこの類とした。さらに、胴部区画が隆帯のものをF1類、沈線のものをF2類とした。

・その他の土器 浅鉢、ミニチュア土器、鉢か壺の可能性がある土器などがある。

### 弥生土器・土師器類(Ⅲ～VII期)

12,223点出土した。弥生時代中期、弥生時代後期、弥生時代末期～古墳時代早期(弥生土器、1,978点)、古墳時代前期(IV期土師器、3,379点)、古墳時代後期・古代(V・VI期土師器、560点)、中世(VII期土師器、13点)のものが出土した。弥生土器と土師器が明確に分類できる場合は分類し、分類できない場合は弥生土器・土師器類(6,293点)とした。石黒立人氏の編年(石黒1997)、赤塚次郎氏の編年(赤塚1986・1990・1994・1996・2002・2004)を参考に以下の通り形態分類を行った<sup>2)</sup>。

なおIV期土器については、前回報告時の分類を四角印で末尾に記載した。

#### Ⅲ期土器(弥生土器)

・壺 形態により大きくA～G・X類に分け、A・B・X類は形態によってさらに細分した。

<壺A>口縁部と口頸部を比較し、口縁部が広がるものをこの類とした。いわゆる広口壺で、加飾のあるものをA1類とし、その他のものをA2類とした。

<壺B>口縁部が立つ、いわゆる直口壺で、口径 15 cm 以上の大型の直口壺を B1 類、口径 15 cm 未満の中、小型の直口壺を B2 類とした。

<壺C>頸部がないものをこの類とした。いわゆる無頸壺である。

<壺D>頸部が短いものをこの類とした。いわゆる短頸壺である。

<壺E>頸部が長いものをこの類とした。いわゆる長頸壺である。

<壺F>頸部が細くなるものをこの類とした。いわゆる細頸壺である。

<壺G>頸部が太くなるものをこの類とした。いわゆる太頸壺である。

<壺X>壺ではあるが欠損などにより形状が把握できないものの中で、底部が残るものをこの類とした。さらに、平底になるものを X1 類、丸底になるものを X2 類とした。

・壺 形態により大きく A～D・X 類に分け、B・D・X 類は形態によってさらに細分した。

<壺A>口縁部に段を持つものをこの類とした。いわゆる受口状口縁、有段口縁の類である。

<壺B>口縁部が屈曲しないものをこの類とした。いわゆるく字状口縁の類である。口縁部が外反するものを B1 類、口縁部が直線的なものを B2 類、口縁部が内彎するものを B3 類とした。

<壺C>弥生中期後半の壺で、口縁部が短く屈折する叩き調整の壺をこの類とした。

<壺D>弥生中期の壺で、口縁部がゆるやかに外反する条痕文系の壺をこの類とした。クシ状工具による器面調整の壺を D1 類、その他の条痕調整の壺を D2 類とした。

<壺X>台部や底部のみ出土するものをこの類とした。台付壺を X1 類、平底壺を X2 類とした。

・高坏 形態により A～D に分けた。

<高坏A>坏底部に段を持ち、脚が大きく緩やかに広がるものをこの類とした。いわゆる有段高坏である。

<高坏B>坏底部に稜を持ち、脚が緩やかに広がるものをこの類とした。いわゆる有稜高坏である。

<高坏C>口縁端部が短く立って坏部が盤状になり、脚が長いものをこの類とした。いわゆる盤状高坏である。

<高坏D>坏部が浅く、口縁部が外反する形状のものをこの類とした。

#### IV期土器（古墳前期土師器）

・壺 形態により大きく A～E・X 類に分け、A～D・X 類は形態によってさらに細分した。

<壺A>口縁部と口頸部を比較し、口縁部が広がるものをこの類とした。いわゆる広口壺で、加飾のあるものを A1 類とし、その他のものを A2 類とした。**壺A**

<壺B>口縁部が立つ、いわゆる直口壺で、口径 15 cm 以上の大型の直口壺を B1 類、口径 15 cm 未満の中、小型の直口壺を B2 類とした。**壺B**

<壺C>有段口縁壺で、上段幅が広いものを C1 類、下段幅が広いものを C2 類とした。**壺C**

<壺D>小型壺をこの類とした。胴部径に対し口径が広いものを D1 類、胴部径と口径がほぼ同じか口径が小さいものを D2 類とした。**壺D**

<壺E>柳ヶ坪形壺をこの類とした。**壺E**

<壺X>壺ではあるが欠損などにより形状が把握できないものの中で、底部が残るものをこの類とした。さらに、平底になるものを X1 類、丸底になるものを X2 類とした。**壺X**

・壺 形態により大きく A～C・X 類に分け、B・C・X 類は形態によってさらに細分した。

<甕A>口縁部に段を持つものをこの類とした。いわゆる受口状口縁、有段口縁の類である。

<甕B>口縁部が屈曲しないものをこの類とした。いわゆるく字状口縁の類である。口縁部が外反するものをB1類、口縁部が直線的なものをB2類、口縁部が内彎するものをB3類とした。**甕B**

<甕C>口縁部が屈曲するものをこの類とした。いわゆるS字状口縁の類である。明瞭にS字になるものをC1類、口縁部のS字が不明瞭で屈曲が弱いものをC2類、頸部で屈曲し、口縁端部に向けて緩やかにのびるもの、いわゆる山陰系口縁甕をC3類とした。**甕A**

<甕X>脚台部や底部のみ出土するものをこの類とした。台付甕をX1類、平底甕をX2類、丸底甕をX3類とした。**甕X**

- ・高环 形態によりA～Cに分け、C類は形状によりさらに細分した。

<高环A>坏底部に段を持ち、脚が大きく緩やかに広がるものをこの類とした。いわゆる有段高坏である。**高环A**

<高环B>坏底部に稜を持ち、脚が緩やかに広がるものをこの類とした。いわゆる有稜高坏である。

<高环C>脚に屈折部を持つものをこの類とした。いわゆる屈折脚高坏である。脚柱部が下方に向かって広がるものをC1類、脚柱部の側辺が平行あるいは平行に近いものや、エンタシス状にふくらむものをC2類とした。**高环B**

- ・その他の土器 器台、鉢、ミニチュア土器、手捏ね土器、手培り型土器、長胴甕（V・VI期甕）、VII期土器皿、VII期伊勢型鍋などがあるが、少量のため分類せず、器種を記載した。

#### 須恵器（V・VI期）

1,032点出土した。渡邊博人氏の編年（渡邊1996）を参考に以下の通り形態分類を行った<sup>3)</sup>。

- ・坏身 口縁部下の外面に受部を持つものや、口縁部下の外面に受部を持たないものがある。また、受部をもたないものには無台のものと有台のものがある。なお、坏の中には本来脚部を持つ高坏だったが、欠損のためその有無が確認できなかったものも含んでいる。
- ・坏蓋 受部を持つ坏身に伴う蓋や、受部をもたない坏身に伴うつまみ付きの蓋がある。後者はかえりをもたないもののみである。
- ・高环 長脚高坏や短脚高坏がある。
- ・その他の土器 甕、壺、横瓶、瓶類、巣などがある。

#### 灰釉陶器（VI期）

300点出土した。碗、皿、壺類がある<sup>4)</sup>。

#### 山茶碗（VII期）

387点出土した。碗、皿、壺類がある<sup>4)</sup>。

#### 陶磁器類（VII・VIII期）

219点出土した。瀬戸、美濃、常滑産のものがある<sup>4)</sup>。

#### ②石器類

石器類の出土点数と割合を表4・5に、器種別石材を表6にまとめた。旧石器時代のものは後出する遺構や遺物包含層、表土層などから11点出土した。縄文時代以降の石器類は竪穴建物出土が多い。なお、図示した遺物は、遺構出土のものを中心に抽出した。また、剥片類は割合から除外している<sup>5)</sup>。

表4 I期の石器類器種別数量

器種	ナイフ形石器	角錐状石器	石刃	旧石器石核	剥片類	合計
出土点数(点)	3	3	2	2	1	11
割合(%)	27.27	27.27	18.18	18.18	9.10	100

表5 II期以降の石器類器種別数量

器種	打製石核	石錐	スクレイバー	楔形石器	打製石斧	磨製石錐	磨製石斧	石核	R F	M F	石棒	磨石・砥石類	石墨・台石	砾石	鍛錬車	石臼	剥片類	合計
出土点数(点)	30	6	12	5	86	56	7	13	102	175	1	88	16	142	1	3	166	909
割合(%)	4.0	0.8	1.6	0.7	11.6	7.5	0.9	1.7	13.7	23.6	0.1	11.8	2.2	19.1	0.1	0.4	-	100

## 打製石錐

鋭利な先端部と柄に装着するための基部を打ち欠きによって作出した小型の石器。合計30点出土した。石材は、チャートが23点、下呂石が4点、黒曜石が3点である。基部の形態によって4分類し、さらに数の多い1類を基部の抉りの形態からa、bに細分した。

1a類 基部の抉りが直線的あるいは丸いもので、13点出土した。側縁や脚部の形状は、直線的なものや外彎するもの、内反から外彎するものなどバラエティに富む。脚部は尖るものが多い。

1b類 基部の抉りが彎曲するもので、3点出土した。側縁は直線的、脚部は尖るものが多い。

2類 基部に抉りがなく直線的なもので、4点出土した。側縁はすべて外彎するものである。

3類 基部が凸状のもので、3点出土した。これは1・2類では確認できなかった、側縁に角を持つものである。

4類 石錐の未製品をこの類とした。6点出土した。

その他、破片が1点出土した。なお、打製石錐一覧には側縁部や脚部の形状、欠損部位についても、図7～9に基づいて一覧表に記載した。



図7 打製・磨製石錐の基部による分類模式図

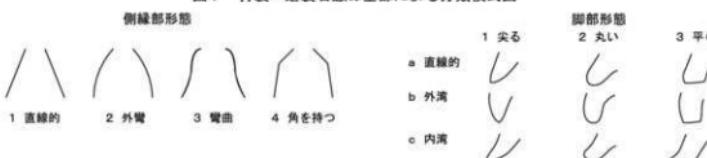


図8 打製・磨製石錐の側縁及び脚部形態分類模式図

表6 器種別石材一覧

出土点数 器種内石 材比率%	打製 石器	石鎚	スカ レイ ヤー ル	楔形 石器	打製 石斧	磨製 石斧	磨製 石斧	石核	BP	MP	石棒	磨石 + 敲石	石皿 + 台石	砾石	錐 車	石臼	剥片 類	ナイ フ形 石器	角頭 状 石器	石刀	旧石 器 石核	合計 点数 石材 比率	
流紋岩																	1					1	0.1
																	0.6						0.1
黒曜石	3								2	6								10					21
	10.0								2.0	3.4							6.0						2.3
下呂石	4	1	2					2	14	16					1		15				2	57	
	13.3	16.7	40.0					15.4	13.7	9.1					0.7		9.0				66.7	6.2	
濃飛 流紋岩															7							7	
															8.0							0.8	
安山岩		1	14		1			2	1		17	2	2			2						42	
		8.3	16.3		14.3			2.0	0.6		19.3	12.5	1.4			1.2						4.6	
玄武岩			1														1					2	
			8.3													0.6						0.2	
蛇紋岩						1																1	
						14.3																0.1	
ハナガ リタケ付						1																1	
						14.3																0.1	
鹿れい岩																	1					1	
																0.6						0.1	
花崗岩											38	6	1		3	1						49	
											43.2	37.5	0.7		100.0	0.6						5.3	
結晶片岩		6									1											7	
	7.0										1.1											0.8	
片麻岩		1																				1	
	1.2																					0.1	
砂岩		2						3	1	25	8	127			7							173	
	2.3							1.7	100.0	28.4	50.0	89.4			4.2							18.8	
輕灰砂岩																	1					1	
															0.6							0.1	
泥岩		1	24	47				3				11				3						89	
	20.0	27.9	83.9					2.9				7.7				1.8						9.7	
頁岩									2							1						3	
									1.1							0.6						0.3	
†→	23	5	9	2	1			11	73	144						109	3	3	2	1	386		
	78.7	83.3	75.0	40.0	1.2			84.6	71.6	82.3						65.7	100.0	100.0	100.0	33.3	42.0		
ホルン フェルス						35	2		8	2						10						57	
						40.7	3.6		7.8	1.1					6.0						6.2		
粘板岩						7									2						9		
						12.5									1.2						1.0		
軽灰岩						4																4	
						57.1																0.4	
滑結 凝灰岩			1												2							3	
			8.3												1.2							0.3	
緑色片岩			2																			2	
			2.3																			0.2	
墨色片岩			1												1							2	
			1.2												100.0							0.2	
珪岩								1														1	
								0.6														0.1	
点数合計	30	6	12	5	86	56	7	13	102	175	1	88	16	142	1	3	166	3	3	2	3	920	



図9 打製・磨製石器欠損部位分類模式図

### 磨製石器・磨製石器未製品

銳利な先端部と柄に装着するための基部を研磨によって作出した小型の石器。6点出土した。また、石材や加工状況等から磨製石器未製品と判断したものが41点、磨製石器の破片と判断したものが9点出土した。石材は、泥岩が47点、粘板岩が7点、ホルンフェルスが2点である。磨製石器未製品については加工状況によって以下のように形態分類をした。

- 1類 磨製石器の石材と思われるもので、一次加工の痕跡が認められないもので、8点出土した。
- 2類 三角形状に調整剥離加工され始めているが、未研磨のもので、21点出土した。
- 3類 全体を研磨しはじめているが、磨製石器としての形状が未整形のもので、6点出土した。  
本報告では二次加工品としている。
- 4類 磨製石器としての形状は整っているが、縁辺部の刃部が未整形・整形途中のもので、6点出土した。三次加工品としている。

なお、磨製石器・磨製石器未製品一覧には側縁部や脚部の形状、欠損部位についても、図7～9に基づいて一覧表に記載した。

### 石錐

銳利で細い先端部を作り出した石器。6点出土した。石材はチャートが5点、下呂石が1点である。

### スクレイパー

素材剥片の縁辺部に連続した剥離を施して、刃部を作り出した石器や、抉り状の刃部を持つもの。ただし、連続した剥離が認められても1/2以上の欠損があると想定されたものは、便宜的に調整剥離を施す剥片(RF)に含めた。12点出土した。石材はチャートが9点、玄武岩、安山岩、溶結凝灰岩が各1点である。

### 楔形石器

剥片の相対する二縁辺に、潰れ状あるいは階段状の剥離痕が発達する石器。5点出土した。石材は、チャート、下呂石が各2点、泥岩が1点である。

### 打製石斧

略長方形の形態で、ほぼ全周を二次加工し、長軸の一端に刃部を持つ石器。刃部は長軸の両端にある場合もある。86点出土した。この中には、打製石斧片と思われる小片についても点数に加えている。石材は、ホルンフェルスが35点、泥岩が24点、安山岩が14点、結晶片岩が6点、砂岩、緑色片岩が各2点、チャート、黒色片岩、片麻岩が各1点ずつである。中には、川原石を素材としたとわかる自然面を残しているものがある。平面形態が不明なものを除くとすべて短冊形である。なお、欠損部位については図10に基づいて、刃部形態については図11に基づいて記号化し、一覧表に記載した。

### 磨製石斧

略長方形の形態で、刃部を研磨により作り出した石器。7点出土した。石材は、凝灰岩が4点、蛇紋岩、安山岩、ハイアロクラスタイルが各1点ずつである。なお、欠損部位については図10に基づいて、刃部形態については図11に基づいて記号化し、一覧表に記載した。

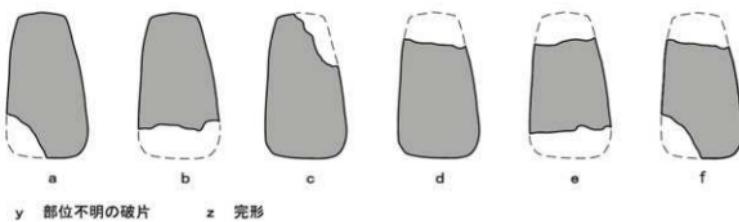


図10 打製・磨製石斧欠損部位分類模式図



図11 打製・磨製石斧刃部形態分類模式図

### 横刃形石器

台形状の形態で、長い側辺に刃部をもつ石器である。形態は打製石斧に似るが、短軸方向に刃部が認められるものをこの類とした。1点出土した。石材はホルンフェルスである。

### 石核・旧石器石核

素材剥片を剥離した残核を総称して石核とした。旧石器時代に属するものを石核A、それ以外のものを石核Bとして分類した。石核Aは3点出土した。石材は下呂石2点、チャート1点である。石核Bは10点出土した。石材は、チャート11点、下呂石2点である。

### 調整剥離を施す剥片（RF）

素材剥片の縁辺部に二次加工を施してあるが、刃部として機能していないと思われるものを調整剥離を施す剥片（RF）とした。102点出土した。石材は、チャートが73点、下呂石が14点、ホルンフェルスが8点、泥岩が3点、黒曜石・安山岩が各2点である。

### 微細な剥離痕を有する剥片（MF）

剥片の縁辺に微細な剥離痕が確認できる剥片である。鋭い縁辺を刃部として使用した結果、刃こぼれ状の微細な剥離痕が生じたものと、偶発的に生じたものがあり、これらを明確に区別することはできなかったため、両者を合わせて微細な剥離痕を有する剥片（MF）とした。微細な剥離痕は、スクレイパーの刃部で観察できる連続した剥離が2mm前後の長さを持つため、便宜的に長さ2mm未満の長さのものとした。175点出土した。石材は、約82%がチャートである。

### 磨石・敲石類

握り拳大から手の平大の大きさで、楕円形の川原石（円礫）を用い、表面に磨痕や敲打痕などが観察できる石器。磨痕と敲打痕が混在する石器が見られるため分類せず、一括した。88点出土した。石材は、花崗岩が38点、砂岩が25点、安山岩が17点、濃飛流紋岩が7点、結晶片岩が1点である。

### 石皿・台石

手の平大よりも大きく扁平な川原石の平坦面に、磨痕や敲打痕が認められる石器。明確に石皿・台石と思われるもののみをこの類としたため、元々石皿・台石として機能していたが破碎したため原型が明確に判別できないものについては砥石の中に含めている。16点出土した。石材は、砂岩が8点、花崗岩が6点、安山岩が2点である。

### 砥石

握り拳大から手の平大の大きさで、円礫や角礫を用い、表面に磨痕や擦痕が明瞭に残る石器。この中には元々石皿として機能していたが原形をとどめないため判断がつかず、砥石の中に含めたものもある。また、砥面に敲打痕が確認できるものもあるが、砥面をもつものはすべて砥石とした。142点出土した。石材は砂岩が約90%を占める。

### 石製品

砂岩製の石棒1点、黒色片岩製の紡錘車1点、花崗岩製の石臼3点（1個体）が出土した。

### 剥片類

剥離作業によって生じた剥片や碎片などをまとめて剥片類とした。二次加工や微細な剥離痕が確認できなかったものである。166点出土した。石材は、チャートが約66%、下呂石が9%を占めている。

### ナイフ形石器

旧石器時代の石器のうち、刃器などの剥片に刃潰し剥離を加え、現在のナイフに似た形に仕上げた石器。3点出土した。石材は、すべてチャートである。

### 角錐状石器

旧石器時代の石器のうち、周縁に急角度の鋸歯状の調整を加え、一端に尖部を設ける石器。4点出土した。石材は、すべてチャートである。

### 石刃

旧石器時代の石器のうち、石刃技法によって作出された側縁に刃部を有する綫長の剥片石器。2点出土した。石材は、すべてチャートである。

### ③土製品類

5点出土した。内訳は、土偶2点、土製勾玉1点、土鍤1点、近世土人形片1点である。

### ④鉄製品類

12点出土した。形状が判断できるものは鉄鏃1点、鉄釘2点の合計3点である。

### ⑤その他の出土遺物

人骨21点<sup>6)</sup>、種実類2点（桃核、胡桃）、炭化物213点、粘土塊・焼土塊12点が出土した。人骨はすべてST1出土である。炭化材は堅穴建物出土については樹種同定し、第4章第4節に掲載した。

## (2) 遺物一覧表・遺物実測図

## ①土器觀察表・土製品觀察表

- ・「No.」は、本文中の掲載番号である。
- ・「地区・遺構」は、遺物が出土した調査区画（グリッド）、もしくは遺構で、複数の地区や遺構から出土した遺物が接合した場合には、地区や遺構を記入している。
- ・「層位」は、表土層・遺物包含層出土の場合は基本層序番号（I a・I b・IIなど）を、遺構出土の場合は土層分層前は埋土を深さ約5cmごとに区切り、上層から順に「a・b・cなど」の順に付与した。分層後はその土層番号（1・2・3など）を記入した。複数の層位から出土した遺物が接合した場合は、すべての層位を記入した。
- ・土器の觀察表にある、「口径」・「器高」・「底径」・「最大径」の単位はcmである。欠損している場合は、残存長を（ ）内に記入した。
- ・「残存率」の口縁部残存率は、(X/12)を計測（宇野 1992）し、12分の1以下については、1/12に切り上げた。底部残存率は底部を四分割し、4分の1未満を「1/4↓」、4分の1以上4分の2未満を「1/4↑」、4分の2以上4分の3未満を「2/4↑」、4分の3以上完存を「3/4↑」と表した。不明のものは「-」を記入した。
- ・「胎土」に記載した含有物は、肉眼で識別したものである。
- ・土器觀察表の「文様」は、沈線・刺突・隆帶などと記載し、その幅や径を（ ）内に記入した。単位はcmである。
- ・報告文書内の出土点数は取上点数で、座標をもつ点数と座標のないものの実点数を合計している。

## ②石器一覧表・鉄製品一覧表

- ・「No.」「地区・遺構」「層位」は、土器觀察表と同じである。
- ・「石材」の鑑定は、肉眼觀察で行った。
- ・「長さ」・「幅」・「厚さ」の単位はcmである。また、「質量」の単位はgである。「刃角」の単位は度であるが、小数点第1位以下は切り上げた。なお、欠損している場合は、（ ）内に残存値を記入した。
- ・摩耗痕や線状痕の有無は、ルーペ（×10）で行った。

## ③遺物実測図

- ・土器の調整の重なる部分は、原則として最も新しい調整を図化した。
- ・土器片や土偶片のうち割れ面を明確にした方がよい場合は、網掛けをした。
- ・石器実測図中の網掛けは摩耗の範囲を、実線は線状痕の方向を表した。
- ・石器の自然面はドット、節理面は一点鎖線で表した。

## 注

- 1) 個体数の計測方法は、口縁部計測法（宇野 1992）を用いた。
- 2) 弥生土器・土偶器類に関しては、赤塚次郎氏・石黒立人氏の指導を受けた。
- 3) 須恵器に関しては、渡邊博人氏の指導を受けた。
- 4) 灰輪陶器・山茶碗・陶磁器類に関しては、藤澤良祐氏の指導を受けた。
- 5) 石器に関しては、長屋幸二氏の指導を受けた。
- 6) 人骨に関しては、千田隆夫氏の指導を受けた。

### 第3節 東野Ⅰ期（旧石器時代）

旧石器時代に属すると明確に判断できる遺構は確認できなかった。旧石器時代の遺物12点は、ナイフ形石器、角錐状石器、石刃、石核、剥片である。すべて旧石器時代より後出する遺構、遺物包含層から出土している。

#### ナイフ形石器（図12）

ナイフ形石器は3点出土した。1はKH5グリッドで出土した。基部を折損する。左側縁部は刃潰し状に調整する。右側縁部下方に微細な剥離が連続する。先端に刃こぼれ状に剥離が点在する。縦長剥片を用いる。2はKF5グリッドで出土した。右側縁部を刃潰し状に調整する。左側縁部を、大きく3回剥離させて刃部を作出する。刃部に微細な剥離が連続する。縦長剥片を用いる。3はKF1グリッドで出土した。左側縁部を刃潰し状に調整する。右側縁部に微細な剥離が連続する。腹面に打点とフィッシャーが認められる。縦長剥片を用いる。

#### 角錐状石器（図12）

角錐状石器は3点出土した。4はSI38（IV期）で出土した。両側縁部を刃潰し状に調整し、先端部を作出する。用い方は横である。5はKF7グリッドで出土した。左側縁部に自然面が残り、右側縁部に刃潰し状の調整を加えて扁平な三角形をつくりながら先端部を作出する。刃部は自然面と調整によって鋸歯状になる。腹面は打点が残り、背面は材から剥離した面となる。未製品の可能性がある。7はKD7グリッドで出土した。左側縁部を直線状に、右側縁部を弧状に調整する。高い打点から刃潰し状に調整を加えて三角形の断面をつくり、先端部を作出する。用い方は縦である。

#### 石刃（図12）

石刃は2点出土した。8はSK1941（IV期）で出土した。左側縁部に微細な剥離がある。9はKD8グリッドで出土した。右側縁部に微細な剥離がある。どちらも頭部調整があり、剥離面が打面となる。唇状バルブをもつ。

#### 石核A（図12）

石核Aは2点出土した。10はKH7グリッドで出土した。風化の著しい下呂石である。縫面に爪状のクラックが発達し、拳大よりやや大きいサイズの原縛から得られたものと考えられる。長軸端部の一方で、横長剥片を1枚取り出す。背面側は、不定形の剥片を1枚剥離している。石核になる以前に横長剥片2枚を取り出した剥離面が見られる。いわゆる横剥ぎ技法を駆使する。

#### 剥片

剥片は1点出土した（取上番号 10804）。SI13（III期）で出土した。石材は溶結凝灰岩で、当遺跡の近隣では関市板取地区や愛知県新城市鳳来寺山で産する。当該期の板取産の溶結凝灰岩製石器は、岐阜市日野遺跡や岐阜市寺田遺跡で出土しているが、現在のところ日野・寺田遺跡以東での出土は確認されていない。今後の調査に依るが、このことからこの剥片は鳳来寺山のものである可能性が考えられる。



図12 I期出土遺物

## 第4節 東野II期（縄文時代）

### 1 壺穴建物

当該期の壺穴建物を7軒確認した。

#### SI01（図13～16）（AS0004）

**検出状況** C地点 JD18～JE19 グリッドで検出した壺穴建物である。III層上面で検出した。建物北西部を SI03、北部を SI04、北東部から東部を SZ1、西部を SI02 に切られる。平面形は東西辺は直線的でやや長く、南北辺は丸みを帯びる。主軸の方位は N-23° - W である。

**埋土** 黒色土と黒褐色土がほぼ水平に堆積し、壁際埋土がやや傾斜して堆積する。SI01 北部の SI03（V期）と近接する範囲の埋土中から完形の須恵器坏身（24）や須恵器片が出土し、炭化物の混じるブロック状の焼土が認められる。埋土中に赤褐色土・黑色土・褐色土ブロックを含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** III・IV層を掘り込んでいる。壁面はやや開く。壁の残存高は最大で 0.12m である。

**床面** ほぼ平坦である。貼床（7層）が全体にわたって明瞭に残る。貼床は褐色土が主体で、ところどころ黒色土や黒褐色土を含み、固くしまる。床面で検出した遺構は柱穴 6基、壁際溝 2条、炉 1基、立石遺構 1基、性格不明土坑 15基である。埋甃は確認できなかった。壺穴内の位置関係と埋土状況から P01、P02、P03 を主柱穴と判断した。この場合、P02 と対になる主柱穴は SZ1 によって消失したと考えられる。P01、P02、P03 に明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱痕跡から柱径は 0.08 ~ 0.11m と想定できる。柱埋戻土最上層に貼床層が確認できることから、貼床形成後、柱穴が掘削されたと考えられる。P04、P14 は柱穴である。明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。P04 は、壺穴内の配置状況と壺穴北部で壁際を 2条検出したことから、建物を北側に広げたときの主柱穴である可能性も考えられる。この場合、P04 に対応する柱穴は、SZ1 によって消失したと考えられる。P22 は床面で検出した柱穴である。最上層に壺穴埋土に類似する黒色土層（1層）が、底部に柱の当たり状の硬化範囲が確認できる。柱痕跡と柱の当たりが確認できることから SI01 埋土との土色の類似によって検出できなかった SI01 より後出する柱穴の可能性が高いと考えられる。壁際溝は、建物の残存する部分のうち、SI02 と接する北西部を除いて壁際を巡る。深さ平均 0.19m を測る。北辺は 2条の溝が巡り、内側の溝は約 0.03m と浅い。建物の建替えの可能性が考えられる。

**炉** 建物中央部や南寄りで検出した。南辺で断削された川原石と角礫が長軸をそろえて並んだ状態で出土し、炉内側である川原石の断削側が被熱していたことから石囲炉と判断した。南辺以外は明確な炉石の存在を示す痕跡は確認できなかったが、抜き取られた可能性がある。埋土はほぼ水平堆積である。川原石の内側に被熱痕が残るにもかかわらず、炉底面と埋土にはその痕跡は明瞭ではない。炉底部から深鉢（20）が出土した。炉底部に接した状態で内面を上にした破片がまとまり、その上に外面を上にした破片が重なる、あるいは埋土を挟んで重なる状態で出土した。土器上で焼土や炭化物、土器の二次被熱などの火を使用した痕跡は確認できない。炉石の抜き取りの可能性及び土器上面で火を使用していないことから、建物廃絶時の儀礼行為の可能性を窺わせる。

**立石遺構** 建物内、北辺ほぼ中央部で検出した P05 は立石遺構である。長辺 26 cm の川原石の下部 11 cm を穴中央部に埋めて立てている。川原石に人為的な痕跡は認められない。壁際溝 1 より内側の床面

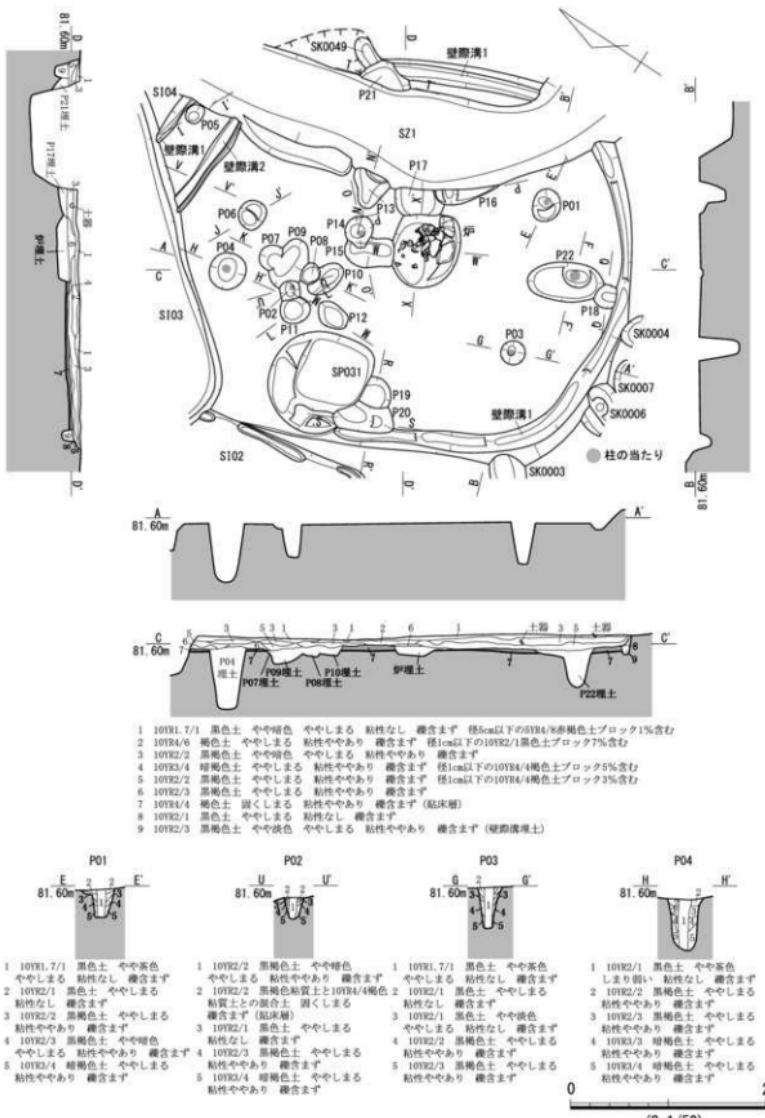


図13 SI01遺構図(1)



図14 SI01遺構図(2)

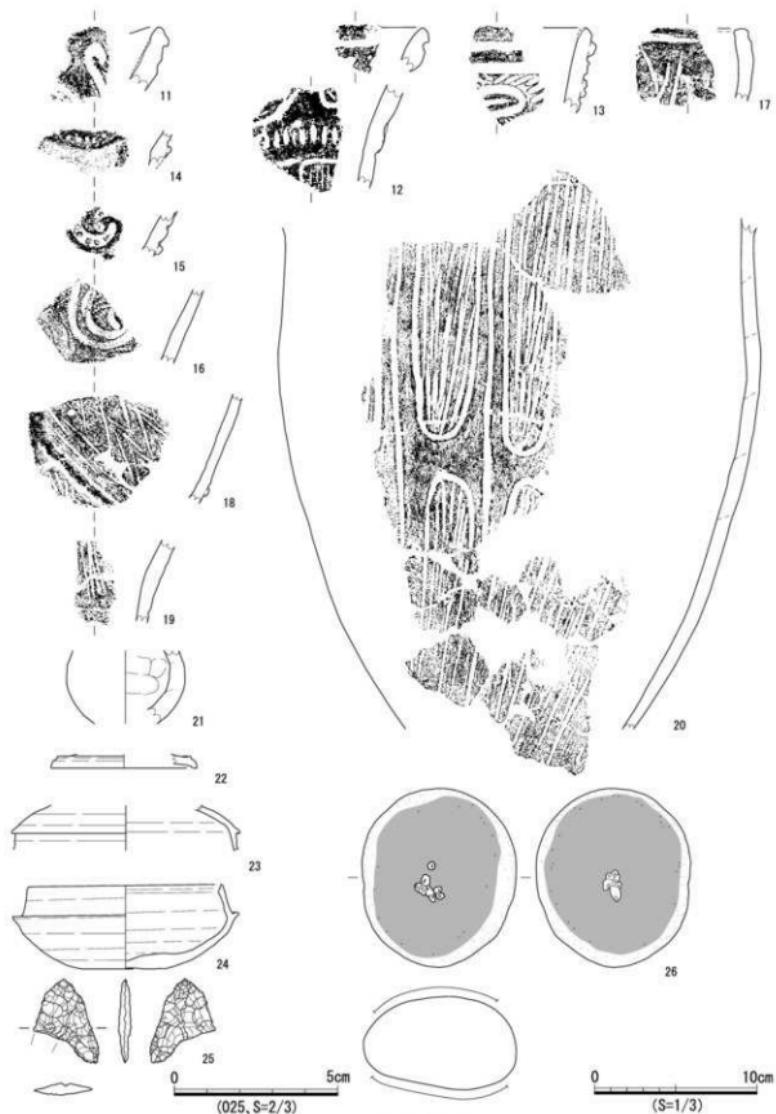


図15 SI01出土遺物(1)

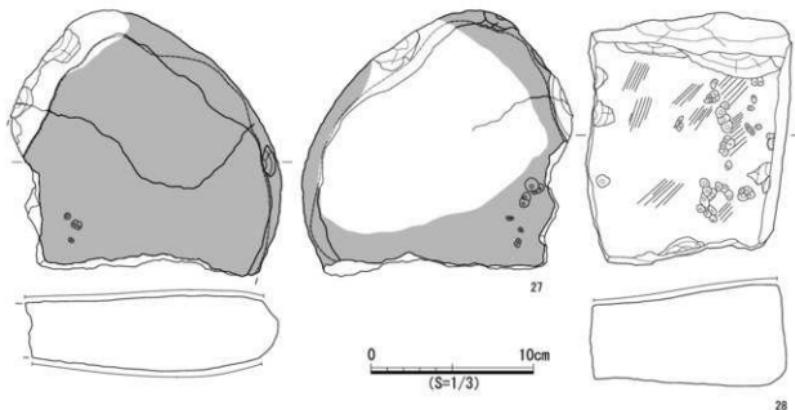


図16 SI01出土遺物（2）

で検出したことからSI01に属すると判断した。

**床下** 貼床除去後、遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況** 繩文土器146点、弥生土器9点、古墳前期土師器3点、古墳後期以降土師器16点、時期不明土師器27点、須恵器5点、山茶碗1点、礫3点、石器類24点が出土した。埋土上層から弥生土器・土師器類、須恵器が出土したが、下層の掘削にしたがい縄文土器の出土量が増加した。

**出土遺物** 11～13は炉出土、14、15は埋土出土の深鉢A類である。11のみ深鉢A2類で、波状口縁である。口縁部文様体間に沈線でS字文を施す。内面はナデ調整する。炉出土の3点は別個体である。12は口縁部外面上端部に沈線が1条巡る。その下に文様帶をもつ。渦巻文と区画がならび、区画内に斜方向の短沈線を埋める。頸部に刺突が巡る。胴部外面は方形区画内に沈線を埋める。13は口縁部外面上端に沈線が1条巡る。その下に隆帶を貼り付ける。隆帶によって区画文を開始し、渦巻文を隆帶でつくり、隆帶中に沈線を引く。区画内に短沈線を埋める。14は口縁部文様帶である。そうめん状の貼付隆帶の間を沈線状になだらか後に円形刺突を施す。15は口縁部文様帶である。そうめん状の貼付隆帶で渦巻文をつくり、その内側に沈線を施す。沈線内に円形刺突を施す。16、17は深鉢B類である。16は口縁部である。口縁端部を折損する。沈線による渦巻文を施し、沈線外にL R縄文が見られる。内面はミガキである。17は口縁部文様帶である。口縁端部で内彎する。口縁端部に沈線を巡らせ、その下部にランダムな方向の沈線を施す。18はP15出土の深鉢F1類である。胴部外面を隆帶で区画し、やや崩れた羽状文で埋める。19、20は深鉢F2類である。19は沈線で区画し、区画内を右下がりの短沈線で埋める。20は炉出土である。胴部外面は上下二段に長楕円形の区画を配し、縱方向の沈線を充填する。区画間に縦位の沈線を施す。21はII期ミニチュア土器である。壺形で器壁が厚い。分厚い部分が底部近くになると思われる。内面は指押さえ、指ナデ調整する。外面は指ナデ調整する。外面は凹凸が顕著である。22は須恵器無蓋高杯の据部である。脚屈曲部から据に向けて平坦面をつくり、突

帯状にふくらんだ後、裾側に窪みを巡らせてから面をつくる。23は須恵器壺蓋である。形状は天井部が丸みを帯び、口縁部は垂下する。24は須恵器壺身である。底部外面がややくぼむ。内面に煤が付着する。6世紀後半に比定でき、隣接するSI03出土遺物とほぼ同時期である。25は打製石鏃である。基部の抉りが深い。形状は側縁部に角を持つ五角形である。基部を大きく抉ってから脚を作出する。脚、左側縁、右側縁の順に調整する。26は磨石・敲石類である。全面に使用痕の磨面が確認できる。表裏ともに中央部に敲打痕が残る。27は石皿である。全体が被熱する。表面はややくぼみ、作業範囲（一点鎖線内）が明確である。表裏隅部に敲打痕が見られる。28は砥石である。砥面は1面で、斜方向に線状痕が残る。敲打痕が見られる。全体が被熱によって赤色化する。

**時期** 炉出土土器（20）から東野Ⅱ期と判断した。

#### SI06（図17～23）（AS0550）

**検出状況** C地点JJ20～KK1グリッドで検出した堅穴建物である。III層上面で検出した。建物南部をSI07に切られる。平面形は、各隅がやや明瞭になった梢円形である。埋甕と炉から想定できる主軸の方位は、N-22°-Eである。

**埋土** 黒色土と黒褐色土がほぼ水平に堆積し、壁際埋土がやや傾斜して堆積する。埋土中に暗褐色土ブロックを含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** III・IV層を掘り込んでいる。壁面は北、西はやや開くが、東はほぼ直立に近い。南側は、SI07によって立ち上がりを消失しているため、壁際構造をSI06の規模とした。壁の残存高は最大0.14mである。

**床面** ほぼ平坦である。貼床（7層）が、建物の残存する部分全体にわたって明瞭に残る。貼床は黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合土で、固くしまる。床面で検出した遺構は柱穴7基、壁際溝2条、炉1基、埋甕1基、性格不明土坑15基である。堅穴内の位置関係と埋土状況からP01、P02、P03、P04をこの建物の主柱穴と判断した。4基に明瞭な柱痕跡、P01以外で柱の当たりが確認できる。柱径は、0.10～0.17mと想定できる。柱埋戻土最上層に貼床層が確認できることから、貼床形成後、柱穴が掘削されたと考えられる。P05はP07西で切り合う柱穴だが、壁際溝の掘削により消失したため、この建物の時期に後出する遺構の可能性が高いと考えられる。P12、P14は柱穴である。2基ともに明瞭な柱痕跡が確認できる。P22はP03の掘方である可能性も考えられる。壁際溝は、建物の北部中央、南部中央を除きほぼ全周する。深さ平均0.18mを測り、SI07によって消失した南部でも壁際溝を検出した。また、南東部は壁際溝が2条に分かれしており、壁際溝1>壁際溝2となる。柱配置から拡張や立て替えの痕跡が確認できなかったことから、壁際溝を掘削し直した可能性が考えられる。

**炉** 建物ほぼ中央部やや北寄りで検出した。平面形はやや東西に長い隅丸方形である。検出した平面形の北東隅部に接して一辺50cmの亜角礫が据えられており、その上面の一部に煤と被熱痕が認められるが、その他の使用痕は確認できない。この礫の下に炉の埋土を確認し、埋土から土器が出土したことから、炉石ではないと判断した。炉は床面を皿状にくぼませている。炉を囲む炉石は確認できず、その圧痕も不明瞭だったが、抜き取りの可能性がある。炉外縁の北東及び北西隅部で拳大の亜円礫が出土した。炉埋土は中央がくぼむ堆積で、自然に埋没した可能性が高いと考えられる。埋土中から深鉢（31）が出土した。炉底部に接した状態で内面を上にした破片がまとまり、外側を上にした破片がその上に重なるか、埋土を挟むように出土している。出土範囲周縁部の土器は立って出土しているも

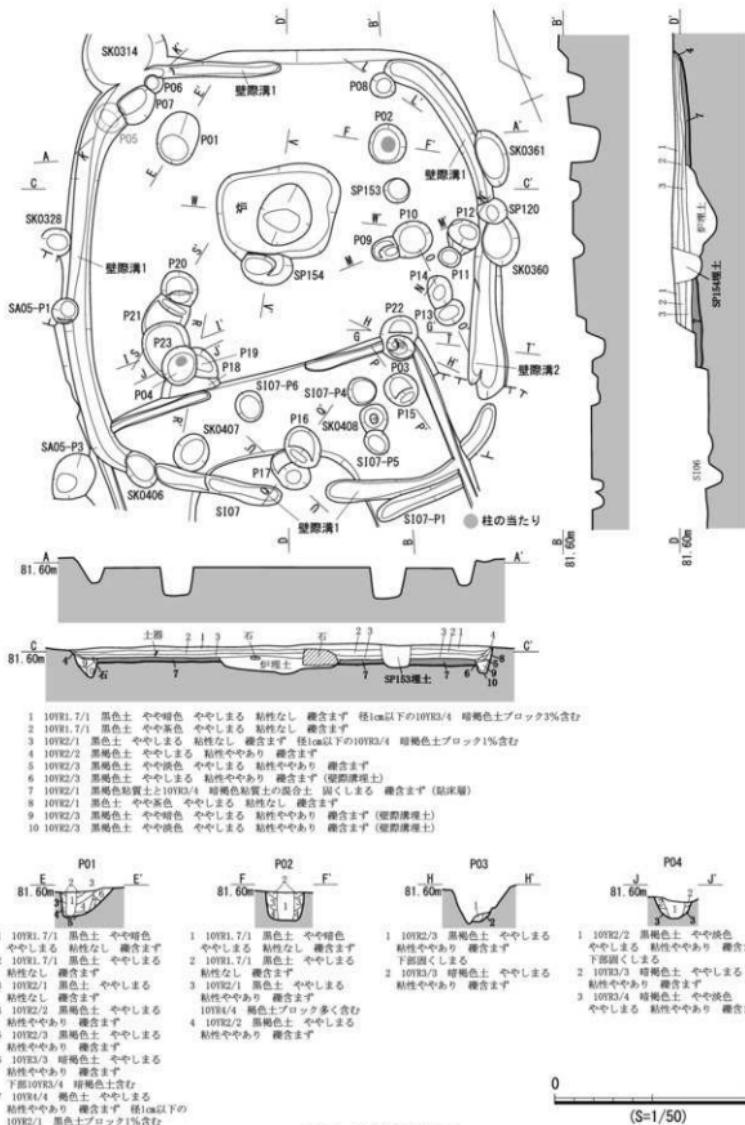


図17 SI06遺構図(1)

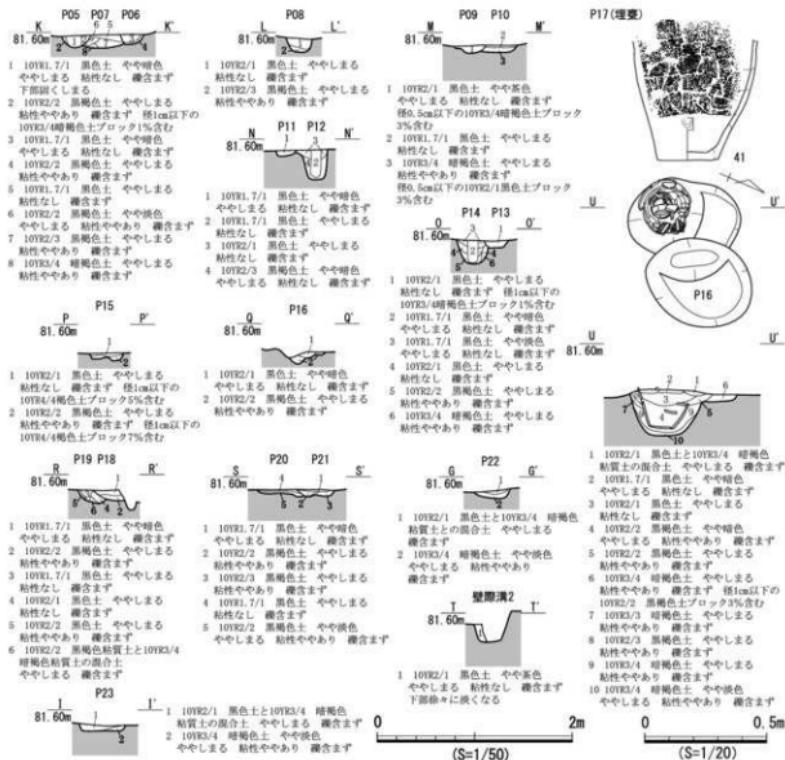
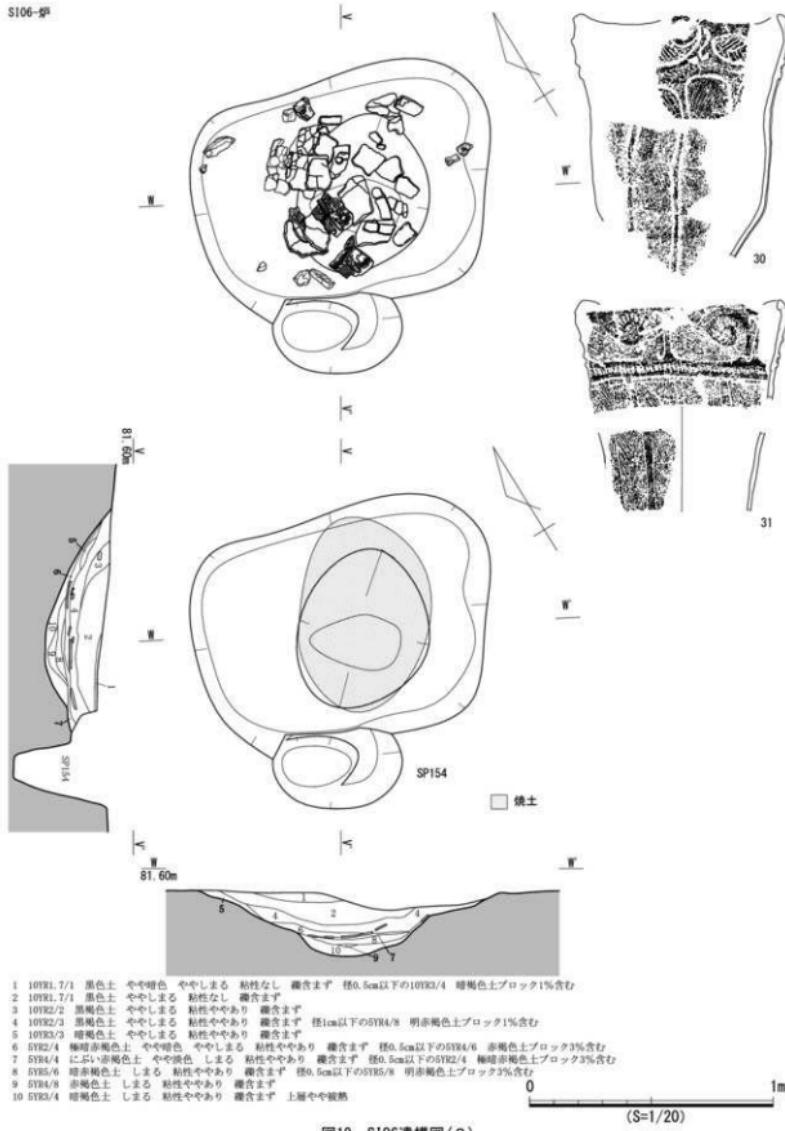


図18 S106遺構図(2)

のが多い。4個体の土器があることが判明した(29、30、31、35)。炉の底部に焼土、炭化物は認められないが、基盤層のⅢ・Ⅳ層に被熱が認められる。炉石の抜き取りの可能性及び土器上面で火を使用していないことから、建物廃絶時の儀礼行為の可能性を窺わせる。

**埋壺** 南辺に近接し、壁際構の途切れる部分で確認したP17は、S106主軸からやや西に寄る。埋設される深鉢F2類(41他)は口縁部が折損するが、意図的に口縁部を折損して埋設したか、S107(IV期竪穴建物)の掘削時に折損したかは不明である。なお、S107埋土中から41に接合する土器片は出土しなかった。また、上部が内部に落ち込む破片が認められる。土層観察から、まず9・10層上に土器を置き、次に9・7・5層の順で土器外部に土を充填し、その後4・3・2層の順に内部が埋まったと考えられる。北側で深鉢が破損し、5層が3層下部に潜り込んでいることから、埋設時には内部が空洞だったことを示す。

**床下** 貼床除去後、遺構は確認できなかった。



**遺物出土状況** 縄文土器 625 点、弥生土器 2 点、時期不明土師器類 14 点、須恵器 2 点、礫 2 点、石器 50 点が出土した。埋土上層から縄文土器片が多量に出土したが、下層の掘削にしたがい破片が大きくなっていた。

**出土遺物** 29~32 は炉出土の深鉢 A2 類である。すべて波状口縁で、満巻文と区画文がセットで収束し、収束間に S 字文や蕨手文を入れて連続する。29 の区画内は短沈線を充填する。頸部に刺突が巡る。胴部は沈線で区画し、区画内に L R 縄文を充填する。内面は横方向のミガキが残る。30 は隆帯で満巻文をつくり、区画内に羽状沈線を埋める。頸部に刺突が巡る。胴部は隆帯で逆 U 字状に区画し、区画内に羽状沈線を埋める。胴下半部は被熱のため器面が荒れる。口縁部内面にミガキが残る。31 は口縁端部が内彎し、内側に肥厚する。満巻文は隆帯でつくり、内に放射状の刻みを施す。区画内は斜方向の短沈線を埋める。頸部隆帯間に刺突が巡る。胴部は沈線で方形に区画し、羽状沈線を埋める。胴下半部と底部を折損する。32 は口縁部文様帶で、隆帯による満巻文が明瞭な満にならない。その内縁に円形刺突を施す。33~35 は深鉢 A 類である。33 は口縁部文様帶で、隆帯が満巻き状に曲線を描き、隆帯内部に細い沈線が 2 条巡る。隆帯の両脇に太い沈線が巡り、内部側に刻みを施す。外部側は三角形状に区画し、縦方向の短沈線を施す。頸部に刺突が巡る。34 は口縁部文様帶で、波状口縁の頂部に S 字文を施す。満巻文内縁に斜方向の刻み、外縁に放射状の刻みを施す。35 は波状口縁で、満巻文が天に向かい、区画間に隆帯を貼り付ける。沈線で満巻文を描き、区画内に羽状沈線を充填する。36、37 は深鉢 B 類である。36 は平縁で、口縁部が開き、端部で屈曲して直立する。外面は逆台形状の区画内に短沈線を充填する。37 は口縁部文様帶で、沈線で区画する。地文は L R 縄文である。38 は深鉢 D 類である。波状口縁で、地文の L R 縄文に縦方向の波状文を施す。口縁部文様を省略して胴部文様帶が口縁端部まである。39 は深鉢 E2 類である。口縁部外面は無文で、ナデ調整する。口縁端部でやや内彎する。深鉢 D 類の口縁部の可能性もある。40 は炉出土の深鉢 F1 類である。隆帯による区画で脇に縦位の沈線を施す。区画内は斜方向の短沈線を埋める。41 は P17 出土の埋甕で、深鉢 F2 類である。胴下半部に穿孔下半分が残る。胴部は縦位の沈線によって区画する。被熱によって器面が荒れるため、沈線以外の文様は不明である。底部が残存する。42、43 は東海地方西部にみられない深鉢である。42 は深鉢の口縁部で波状口縁である。透孔がある。透孔の周囲に 3 重の円形を沈線で描く。口縁端部が肥厚し、面をもつ。内面は透孔下で段をつくる。その段の周囲にミガキが残る。43 は隆帯で口縁部と胴部を分ける。口縁部文様は残存する範囲は無文である。胴部は区画内に L R 縄文を充填し、区画間に蕨手文を施す。44、45 は浅鉢である。44 は波状口縁で、頂部を外方に曲げて輪にして立体的にする。胴部外面にミガキを施す。内面は剥離のため調整不明である。45 は底部である。内外面はミガキを施す。鉢底部との接合部に焼成が届いている。44 と 45 は接点はないが、胎土とミガキの単位が類似することから同一個体と考えられる。46~49 は打製石器である。46 は打撃時に薄くはがれたことを利用して、剥離部を側縁にして微調整して側縁部を作出する。47 は表面に凸部がある。基部は浅く抉る。右側縁部は外反し、左側縁部は内彎する。48 は未製品である。剥離後にボジ面を強く押圧して薄くする途中のもので、側縁部を細かく調整し三角形状に作出する。49 は凸基盤の未製品である。基部を抉った後、右側縁部の調整を施す。左側縁は背面上方に僅かな調整が認められるのみである。50 は打製石斧である。刃部を折損する。背面に線状痕が認められる。51 は炉出土の磨製石斧である。全体を磨き、側縁部に面をつくる。ほぼ斜方向の線状痕である。側縁部との境の稜にやや傾きの大きい斜方向

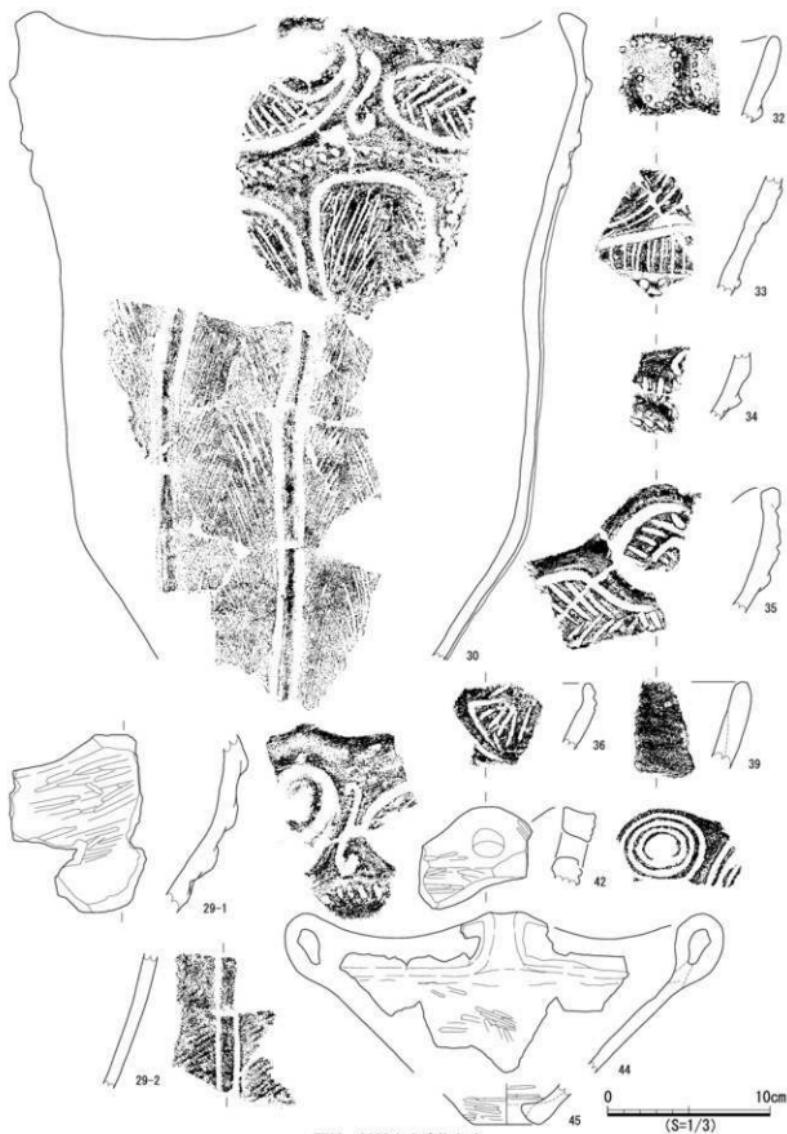


図20 SI06出土遺物(1)

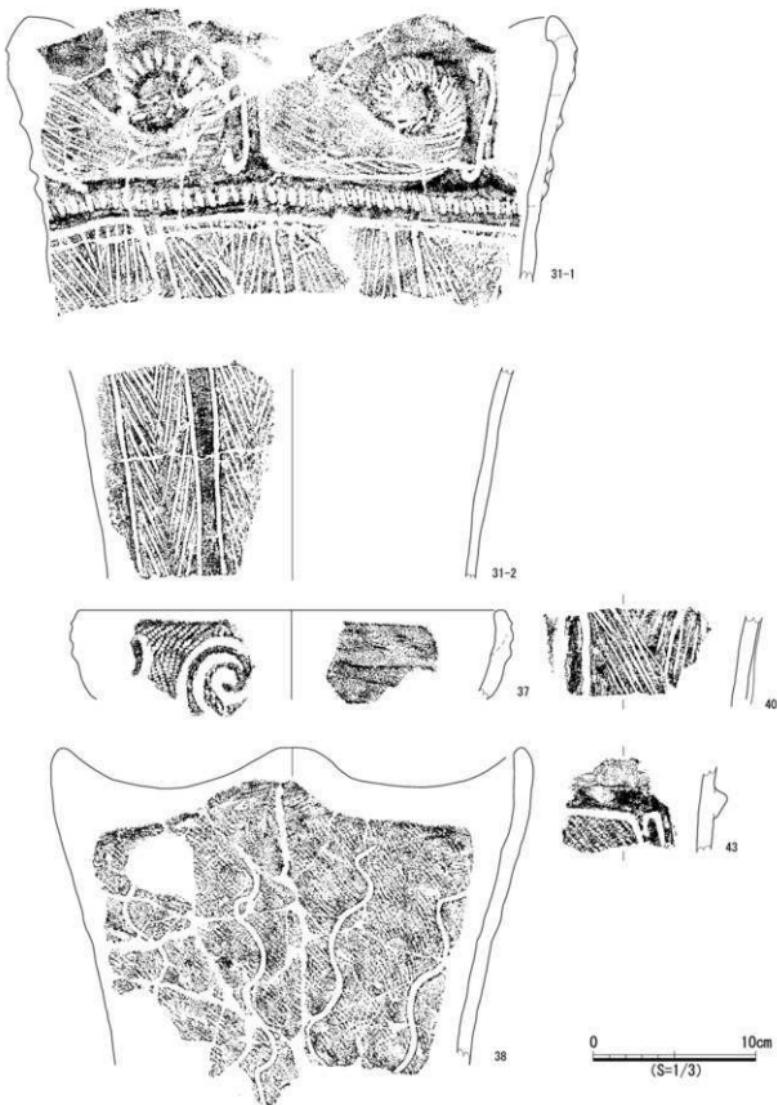


図21 SI06出土遺物（2）

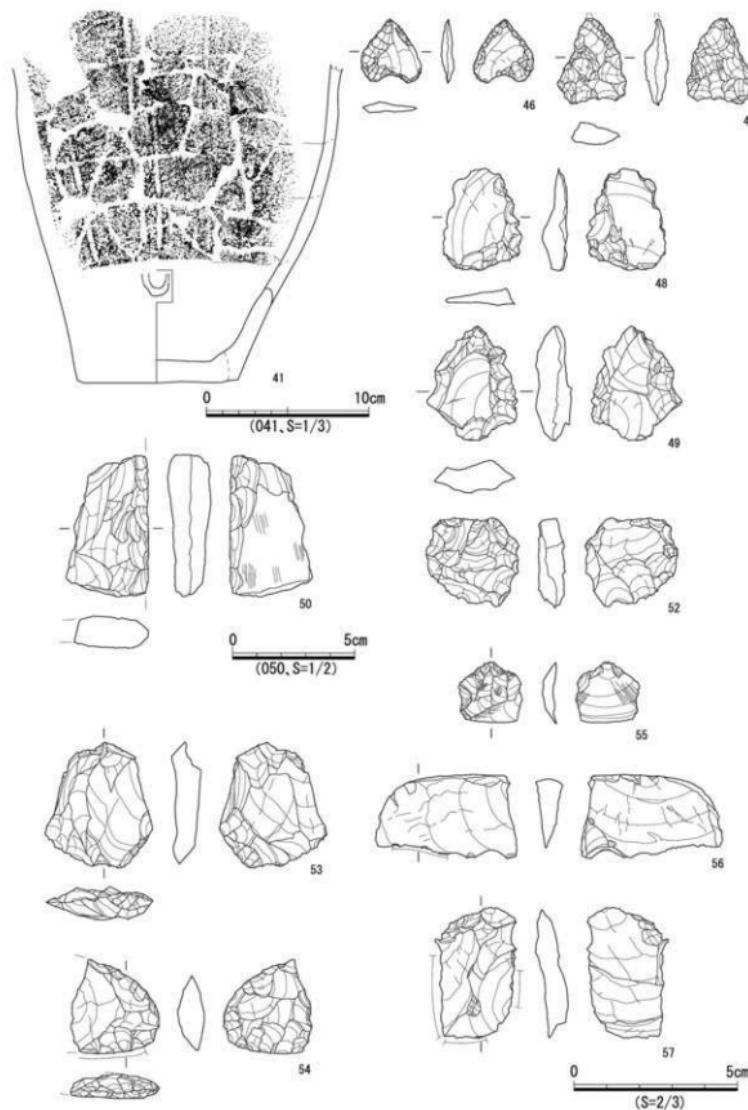


図22 SI06出土遺物（3）

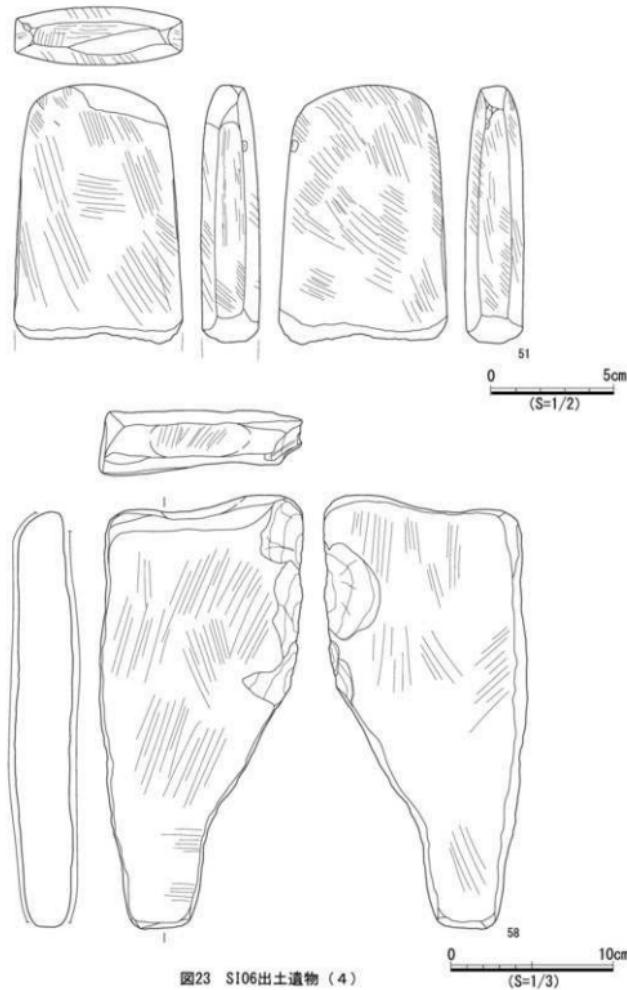


図23 SI06出土遺物（4）

の線状痕が認められる。52は楔形石器である。左右の側縁に階段状剥離が見られる。上辺に自然面が残る。下辺は鈍角に仕上げる。53、54はスクレイパーである。53は打点の相対する辺に細かい調整を施して刃部を作出する。刃部は使用のためかやや摩耗している。54は曲線的に剥離を施し、その辺を刃部として使用する。55はR Fである。先端部を三角形に加工していることから石鏃等をつくる途中

の可能性も考えられる。56、57はMFである。56は上辺は自然面で、その対辺に微細な剥離が連続する。57は略長方形の剥片に微細な剥離が残る。58は砥石である。表面に線状痕が多く、強く研がれる。裏面にも線状痕が残るが、表面ほどではない。上部にくぼみがあり、線状痕が集中する。

**時期** 床面出土土器(38)、炉埋設土器(30)から東野II期と判断した。

**SI36(図24)(AS2688)**

**検出状況** C地点KJ5・6グリッドで検出した竪穴建物である。III層上面で検出した。南西部をSI35に、東部を倒木痕等に切られること、南東部は南に向かってややくだる地形で、床面と掘方が消失していることから、平面形は不明である。SB08に切られる。検出時に床面が露出していた。長軸の方位はN-18°-Wである。

**埋土** 検出時に床面に到達し、埋土が確認できないため堆積状況は不明である。

**壁** III層を掘り込んでいる。壁は消失しているため、壁面形状は不明である。

**床面** ほぼ平坦である。貼床(3層)が全体にわたって明瞭に残る。貼床は黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合土で構成される。床面で検出した遺構は壁際溝、柱穴1基、性格不明土坑8基である。炉や埋甕は確認できなかった。P7は柱穴であるが、主柱穴か否かは不明である。明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は約0.09mである。壁際溝は、北辺西部、西辺にわずかに残る。深さ平均0.07mを測る。貼床層を切っていることから、貼床形成後に掘削されたと考えられる。

**床下** 貼床除去後、遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況** 貼床層から縄文土器1点が出土した。床面上層の遺物包含層から須恵器、弥生土器、土師器、縄文土器の破片が出土したが、主体は縄文土器である。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。貼床層出土の縄文土器(取上番号13143)は深鉢E2類の胴部片である。

**時期** SI35、SB08に切られること、貼床層及び床面上層遺物包含層出土土器から東野II期の可能性が最も高いと判断した。

**SI39(図25・26)(AS2827)**

**検出状況** C地点KL5・6～KM5グリッドで検出した竪穴建物である。III層上面で検出した。SD19に切られる。建物東部は発掘区外であり、平面形は不明である。長軸の方位は、N-15°-Eである。

**埋土** 黒色土がほぼ水平に堆積し、壁際埋土がやや傾斜して堆積する。

**壁** III～V層を掘り込んでいる。西壁面はやや開き、北壁面の傾斜は急である。壁の残存高は最大0.25mである。

**床面** ほぼ平坦である。貼床層(8層)が、建物の残存する部分全体にわたって明瞭に残る。貼床層は黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合土で、固くしまる。貼床層上の壁沿いで黒褐色土のしまる層(硬化層・5層)が確認できる。壁際溝埋土に被る。硬化層は竪穴内壁際で確認できる。これらのことから、建物機能時に持ち込まれた土が硬化した可能性が考えられる。この場合、竪穴建物の機能時には壁際溝は埋まっているが、壁際溝の機能は壁の崩れを防ぐための壁押さえを固定するためのものである可能性が考えられる。床面で検出した遺構は柱穴1基、壁際溝、土坑4基である。炉や埋甕は確認できなかったが検出した竪穴掘方から発掘区外に存在すると想定できる。竪穴内の位置関係から床面南西部で検出したP1をこの建物の主柱穴と判断した。4本柱建物の可能性が想定できる。明瞭な柱痕

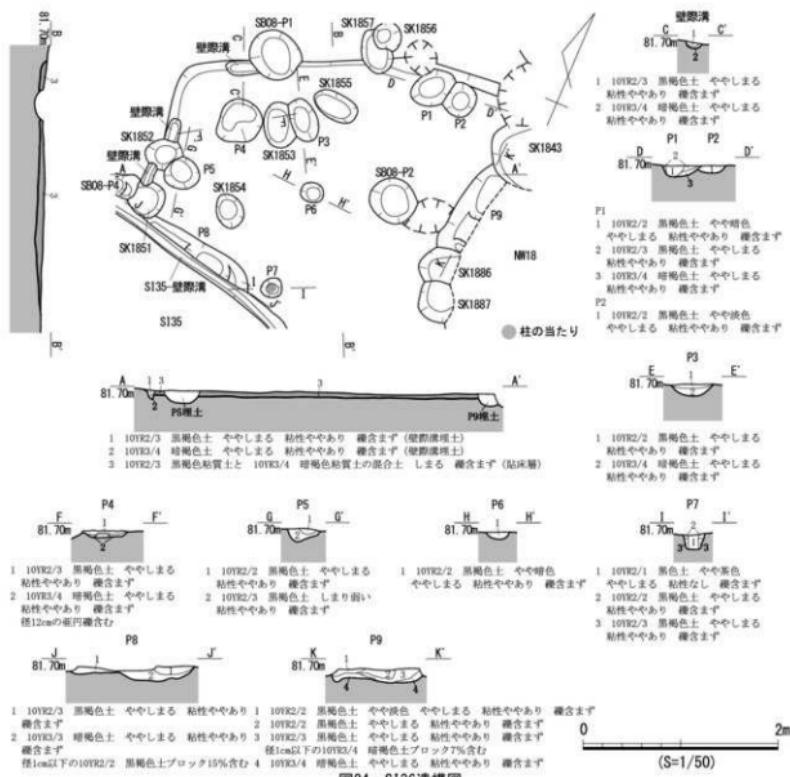


図24 S136遺構図

跡と柱の当たるが確認できる。柱径は約0.15mと想定できる。P1の最上層に貼床層が確認できないことから、貼床形成後、柱穴を掘削したと考えられる。壁際溝は、建物の壁際を巡る。深さ平均0.12mを測る。貼床層を切る。これらのことから、竪穴掘方の掘削→貼床の形成→壁際溝掘削・壁押さえの埋設、主柱穴の掘削→生活による硬化層の形成と考えられる。

**床下** 貼床除去後、遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況** 縄文土器24点、時期不明土師器1点、石器類1点が出土した。

**出土遺物** 59は深鉢B類の口縁部である。沈線によって区画し、縄文を埋める。原体は不明である。端部は擬口縁で、沈線は擬口縁の端部を抜ける。60は深鉢E2類である。外面はナデ調整し、やや内彎する。

**時期** 埋土出土土器から東野II期の可能性が高いと判断した。

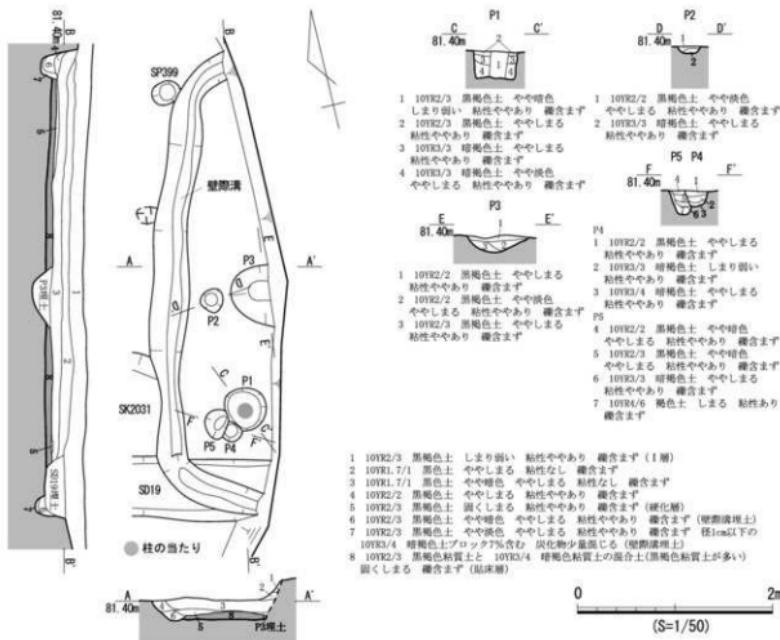


図25 SI39遺構図



S140 (図27~29) (AS3207)

**検出状況** C地点 KN4 ~ KO5グリッドで検出した堅穴建物である。III層上面で検出した。SD48に切られる。柱穴、炉、断続する壁際構造遺構を検出したことから、壁際構造遺構に囲まれる範囲をSI140と判断した。掘方は残存していない。建物南東部は発掘区外だが、壁際構からやや胴張りの隅丸方形と考えられる。主柱穴と炉から想定できる主軸は、N-16° -Wである。

**埋土** 埋土が確認できないため堆積状況は不明である。

**壁** III層を掘り込んでいる。壁は消失しているため、壁面形状は不明である。

**床面** 床面は確認できない。上層の攪拌によって貼床を消失したか、元来貼床を形成していなかったかは不明である。SI40 の想定範囲内で検出した遺構のうち、SI40 と関連する遺構を柱穴 3 基、炉 1 基、埋甕 1 基、壁際溝 2 条と判断した。竪穴内の位置関係から P 1、P 2、P 3 をこの建物の主柱穴と判断した。P 2 は SD48 底で検出した。4 本柱建物と想定できる。明瞭な柱痕跡、柱の当たりが確認できる。柱径は 0.09~0.13m と想定できる。P 2 は SK2023 と重複しており、半裁時に SK2023 埋土との類似によって掘りすぎている。壁際溝は断続する。また、南部と西部で切り合う 2 条の溝を検出した。外側の溝（壁際溝 1）が内側の溝（壁際溝 2）を切る。深さ平均 0.11m を測る。

**炉** 建物中央部北寄りで石圓炉を検出した。炉南西側が SD48 に切られるため、北辺と東辺のみが残存する。掘方はテラスをもつ二段構造である。掘方テラス部分に礫を置き、外縁側に土を充填（6~9 層）する。J-J' 側の充填土は 7・9 層が残る。南辺の炉石が欠落していることから、炉石欠落後の埋没過程で 2・3 層が堆積したと考えられ、3 層と 7・9 層の間の分層線上に炉石が据えられていた可能性が考えられる。掌大の角礫 2 個をやや開き気味にして据えて方形に囲い、その間隙や背面の掘方内部に掌大の礫を充填し固定する。炉石は燃焼部側が強く被熱する。最下層（5 層）が燃焼面で、その上に焼土ブロックと炭化物を含む 4 層が堆積する。炉中央燃焼部上の 3 層基底面で深鉢（64）が出土した（図 28 右上段）。土器上で火を使用した痕跡は確認できない。最下層で出土した破片は、すべて外面を向いている（図 28 右中段）。これらのことから、建物廃絶時の儀礼行為の可能性を窺わせる。

**埋甕** SD48 底部で P 4 を検出した。主柱穴から想定できる主軸からやや東にずれる。埋設される無文深鉢（63）は上半部が折損し、内部に落ち込む破片が認められる。埋土中に底部片がなく、底部穿孔していたと考えられる。掘方は北部がやや深くなる二段構造で、深くなる側に深鉢が埋設される。

**床下** 貼床除去後、遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況** SI40 関連遺構から、縄文土器 3 点、石器 1 点が出土した。SI40 プラン上層の遺物包含層から、弥生土器・土師器類、縄文土器が出土した。主体は縄文土器である。

**出土遺物** 61、62 は炉出土の深鉢 A 類である。61 は波状口縁で、沈線と隆帯により口縁部文様帯を構成する。62 は口縁部と底部で接点はないが、出土状況と土器胎土から同一個体の可能性が高いと判断した。口縁部文様帯は隆帯による区画で、内部に L R 縄文を充填する。63 は深鉢 E2 類で埋甕である。口縁部から胴上半部と底部を折損する。底部は全面を欠き、埋土からの出土もないため、底部穿孔の可能性が考えられる。外面は無文で、縦方向のナデ調整する。内面は指ナデ調整する。底部の立ち上がりに棒状工具でなでた沈線状の痕跡が残る。64 は炉出土の東海地方西部にみられない深鉢である。平縁で、底部から胴下部は開き、胴部中程で直線的に立ち、胴上部から口縁部は大きく開く。文様帯が口縁部端から胴下部まで続き、胴下部 3 分の 1 は無文帯である。文様は沈線によるもので、長短の S 文字を渦巻文状に組み合わせる。大きな文様とやや小さな文様を横方向に順に並べ、二個対になる。口縁端部は横方向の短沈線と S 文字がランダムに並ぶ。65 は鉢である。口縁部外面に竹管による刺突を施す。刺突に規則性はない。沈線文が一部残る。口縁端部でやや内彎する。66 は P 5 出土の磨石・敲石類である。磨面が敲打痕を切る。風化が顕著である。

**時期** 炉出土土器（64）から東野 II 期と判断した。

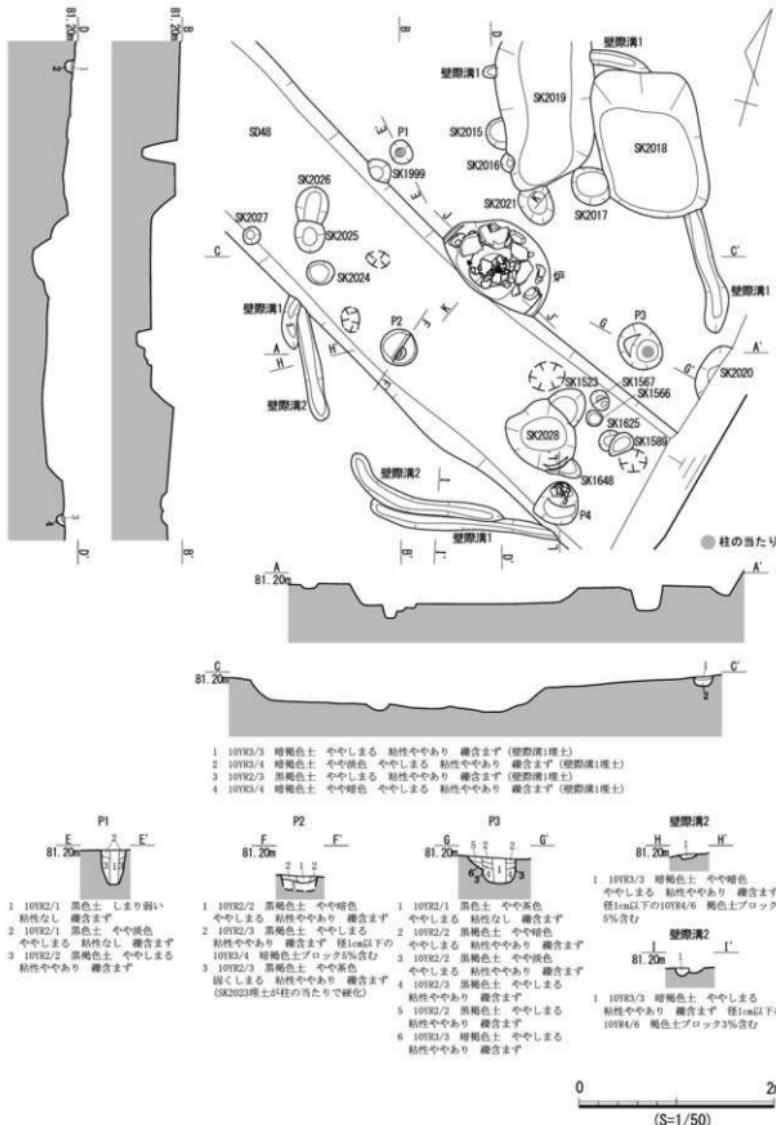


図27 S140遺構図(1)

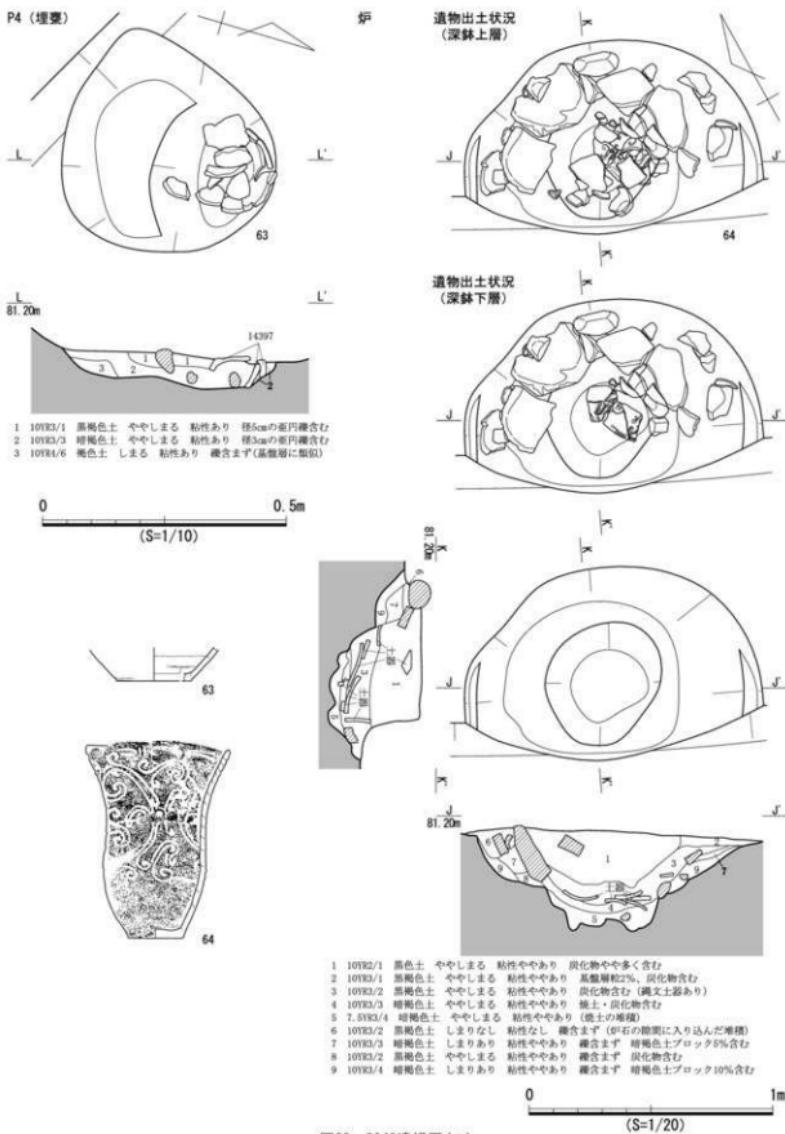


図28 SI40遺構図(2)

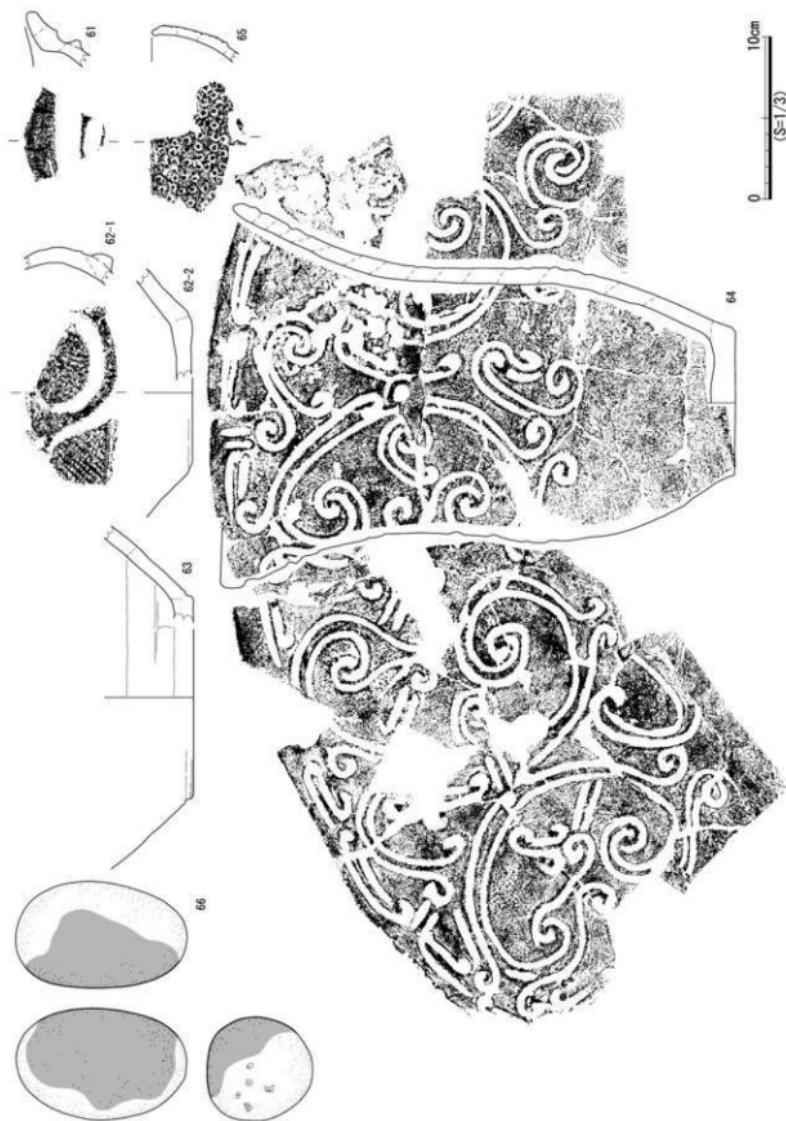


図29 S140出土遺物

## SI43（図30・31）(AS1490)

検出状況 A地点 EQ8～ER8 グリッドで検出した堅穴建物である。III層上面で検出した。建物東部は町道下である。残存部から隅丸方形と想定できる。長軸の方位はN-40°～Eである。

**埋土** 黒色土、黒褐色土、暗褐色土がほぼ水平に堆積し、壁際埋土がやや傾斜して堆積する。埋土中に暗褐色土ブロックを含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** III・IV層を掘り込んでいる。壁面はやや開く。壁の残存高は最大0.05mである。

**床面** ほぼ平坦である。貼床（10層）が全体にわたって明瞭に残る。貼床は黒褐色土と暗褐色土の混合土で、固くしまる。床面で掌大の角礫（取上番号7118）が出土した。使用痕は認められないが、被熱している。床面で検出した遺構は柱穴1基、壁際溝、性格不明土坑2基である。炉や埋甕は確認で

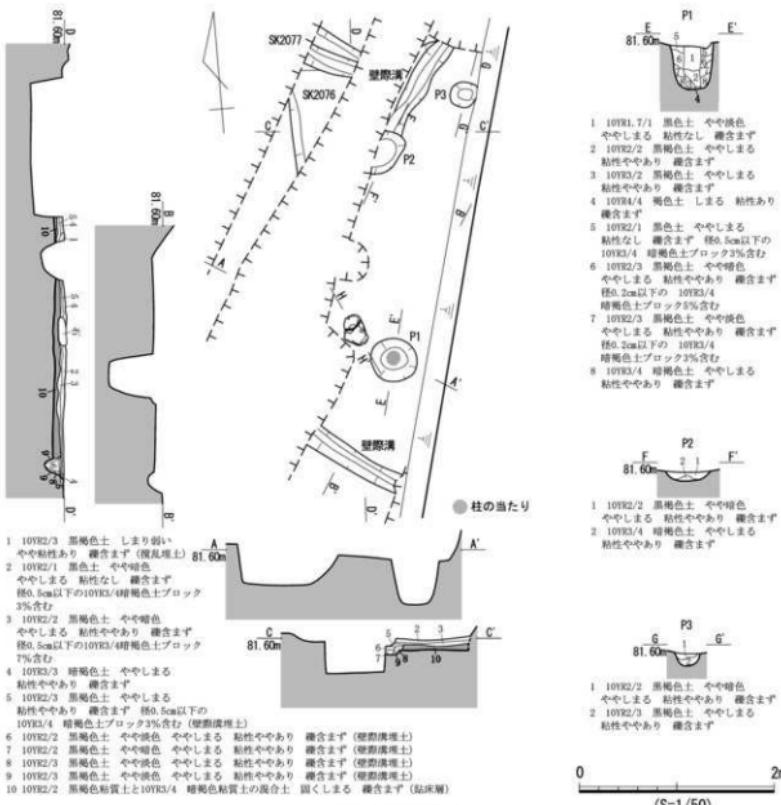


図30 SI43遺構図

きなかった。竪穴内の位置関係からP1をこの建物の主柱穴と判断した。明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は約0.16mと想定できる。主柱穴の位置から4本柱建物の可能性があり、残る主柱穴は発掘区外と考えられる。壁際溝は建物の残存する部分の壁際を巡る。深さ平均0.17mを測る。

**床下** 貼床除去後、遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況** 縄文土器20点、土偶1点、石器1点が出土した。埋土下層から縄文土器が出土した。縄文土器の多くは深鉢の胴部片である。

**出土遺物** 67、68は深鉢F2類である。67は沈線による区画内部に縄文が充填される。外面に煤が付着する。68は沈線による逆U字状の区画と区画内にLR縄文を施す。強く二次被熱している。69は土偶頭部である。顔は逆三角形で、鼻状の突起から下を折損する。山形に鼻状の突起をつくり、下部に2つの刻みを施す。鼻孔を表現したと考えられる。目の位置に右6、左6の刻み、その下から斜め外方に2条の沈線を施す。目と水平位置の同じ側面に浅い円形の窪みをつけて耳を表現する。頭頂部は皿状に窪み、2条の沈線を十字に施す。左右方向の沈線の外端部に焼成前穿孔が認められる。前後方向の後端部で破断面に焼成部が微かに認められることから、この部分にも穿孔があったと考えられる。いわゆる河童形土偶の頭部片である。70はスクレイバーである。一部自然面が残る。細かい調整をして刃部を作出する。

**時期** 床面出土土器から東野II期と判断した。

**SI46（図32～34）（AS1580）**

**検出状況** B地点HD5・6グリッドで検出した竪穴建物である。III層上面で検出した。建物南部をSI45に切られる。南東部は発掘区外である。残存部から隅丸方形と想定できる。竪穴埋土上層部を削平され、検出時に床面が露出していた。炉の位置から想定できる主軸は、N-7°-Wである。

**埋土** 前述のように上層部が削平されていたため、埋土は確認できなかった。

**壁** III層を掘り込んでいる。壁は消失しているため壁面形状は不明である。

**床面** ほぼ平坦である。貼床（4層）が全体にわたって明瞭に残る。貼床は黒褐色土と暗褐色土の混合土でしる。床面で検出した遺構は柱穴2基、壁際溝、炉1基、性格不明土坑2基である。埋甕は確認できなかった。竪穴内の位置関係からP1、P2をこの建物の主柱穴と判断した。4本柱建物と想定できる。2基ともに明瞭な柱痕跡と柱の当たりが認められる。柱径は0.10～0.14m以上と想定できる。残り2基は、位置から搅乱坑内と発掘区外と考えられる。SK2094とSK2112は床面で検出されたが、SI46との関連が不明であり、SI46に後出する遺構の可能性も考えられるため付属遺構としなかった。壁際溝は、建物の残存する部分の壁際を巡る。深さ平均0.18mを測る。

**炉** 主柱穴の位置から建物中央部の北寄りで検出した。炉を囲む炉石は確認できず、その圧痕も不明瞭だったが、外縁側に被熱していない掘方が確認できることから、炉石の抜き取りの可能性がある。黒色、黒褐色、暗褐色の埋土を除去すると被熱部（7・8層）があり、その上部で縄文土器の深鉢（73、74他）が出土した。口縁部や胴部の破片がすべて外面を上に向いている。また、土器片の上で煮炊きをした痕跡は認められない。これらのことから建物廃絶時の儀礼行為の可能性を窺わせる。

**床下** 貼床除去後、遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況** SI46貼床層とSI46関連遺構から、縄文土器20点、時期不明土器類1点、石器類1点が出土した。

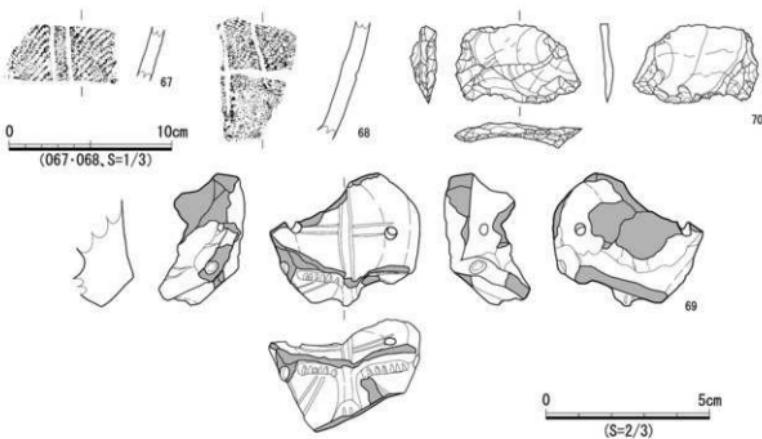


図31 SI43出土遺物

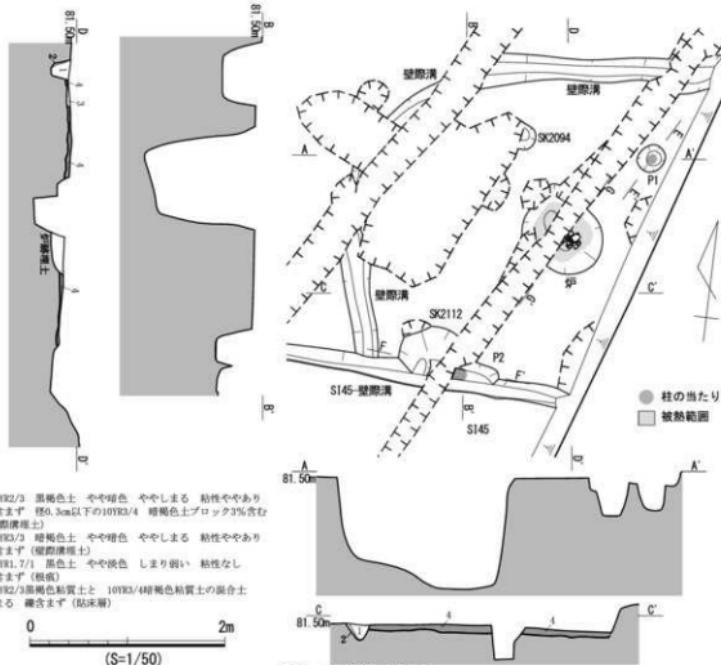


図32 SI46遺構図(1)

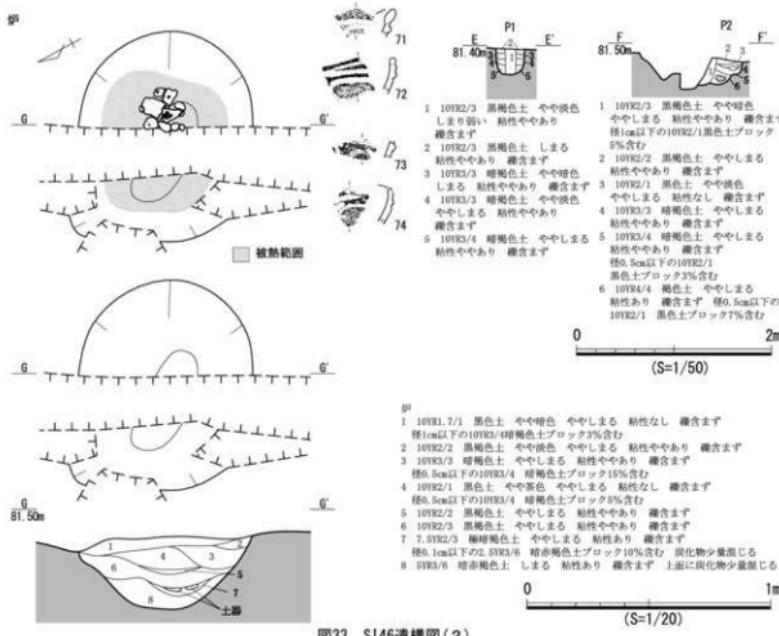
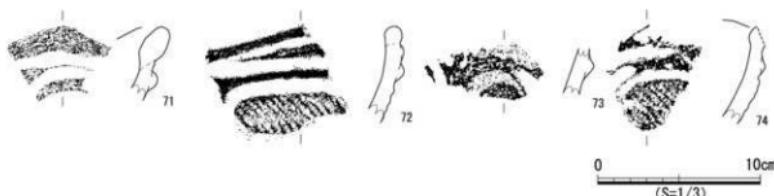


図33 S146遺構図(2)



**出土遺物** 71、72は深鉢A1類である。71は波状口縁で、口縁部文様帶は隆帯によって区画する。72は区画内にLR繩文を充填する。73、74は炉出土の深鉢A類の口縁部である。胎土の類似から同一個体と思われるが、摩耗が著しく、接点が不明のため分けて実測した。波状口縁である。隆帯によって渦巻きをつくり、内部に繩文を埋める。原体は摩耗のため不明である。

**時期** 炉出土土器から東野II期と判断した。

## 2 櫛

当該期に関連すると判断した櫛は1条である。

### SA08（図35）

**検出状況** C地点 JM19 グリッド、III層上面で検出した。柱穴が直線上に位置することから櫛と判断した。長辺の長さは 5.42m を測り、柱間は、P 1 – P 2 で 1.94m、P 2 – P 3 で 2.12m、P 3 – P 4 で 1.36m である。長辺の軸は N-44° – E である。

**柱穴** 4基の柱穴を検出した。柱穴の規模は、直径 0.23~0.46m、深さ 0.16~0.34m を測る。すべての柱穴で柱痕跡を確認し、柱径は約 0.07~0.10m と想定できる。

**遺物出土状況** P 2 の 4 層から縄文土器 1 点が出土した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。P 2 出土の縄文土器（取上番号 5910）は深鉢 EI 類で、区画と思われる沈線が 1 条認められる。

**時期** 柱埋戻土で縄文土器が出土していることから東野Ⅱ期以降と判断した。

## 3 柱穴（図36・37）

当該期に関連すると判断した柱穴は 27 基である。以下、特徴的な柱穴について記述する。

### SP154（図36）（AS0869）

**検出状況** C地点 KK1 グリッド、III層上面で検出した。平面形は円形と想定できる深い穴である。SI06 土層確認作業中に埋土最上層から掘り込まれていることが判明した。

**埋土** 明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は約 0.10m と想定できる。

**遺物出土状況** 柱穴からは、縄文土器 25 点、古墳前期土師器 1 点、時期不明土師器類 4 点、石器類 1 点が出土した。縄文土器は、SI06 と同時期のものである。縄文土器は上層から下層まで散在する。弥生土器・土師器類は、1 層（柱痕跡）から 4 点、2 層（最上層）から 1 点出土している。このことから、SI06 埋没後、掘削されたと考えられる。また、弥生土器・土師器類は柱痕跡と埋土最上層から出土しており、II 期の可能性を否定できないことから II 期以降と判断した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。

**時期** SI06 との重複関係、出土遺物から東野Ⅱ期以降と判断した。

## 4 土坑（図38~44）

当該期に関連すると判断した土坑は 124 基である。以下、特徴的な土坑について記述する。

### SK0353（図38）（AS0212）

**検出状況** C地点 JG20 グリッド、III層上面で検出した。平面形は円形と想定できるやや深い穴である。検出時に長楕円形の川原石が露出していた。

**埋土・遺物出土状況** 長楕円形の川原石の短軸を垂直にして穴に埋める。底部に川原石が接する。川原石に人為的な痕跡は認められない。川原石周囲は黒褐色土で充填される。礫が底部と接することから、立石遺構の可能性が高いと判断した。

**時期** 遺構の状況から東野Ⅱ期以降と判断した。

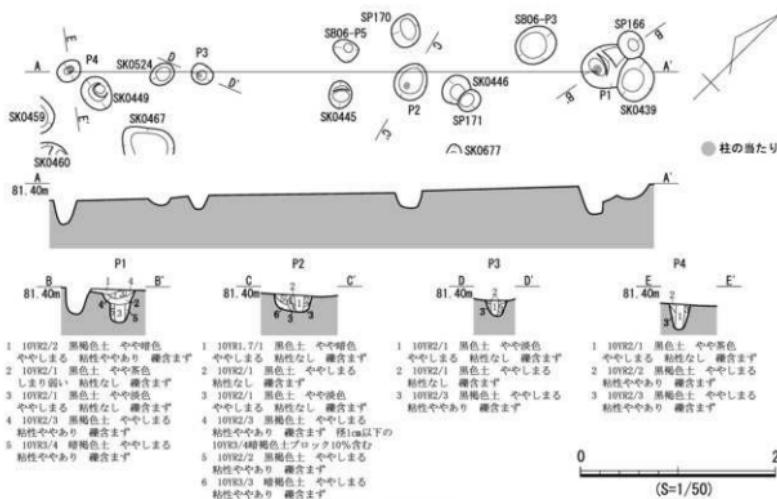


図35 SA08遺構図

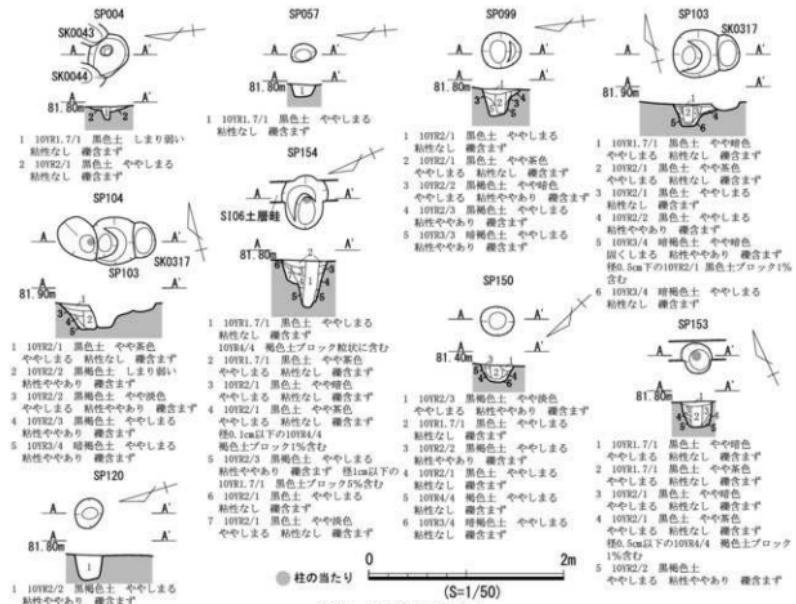


図36 II期SP遺構図(1)

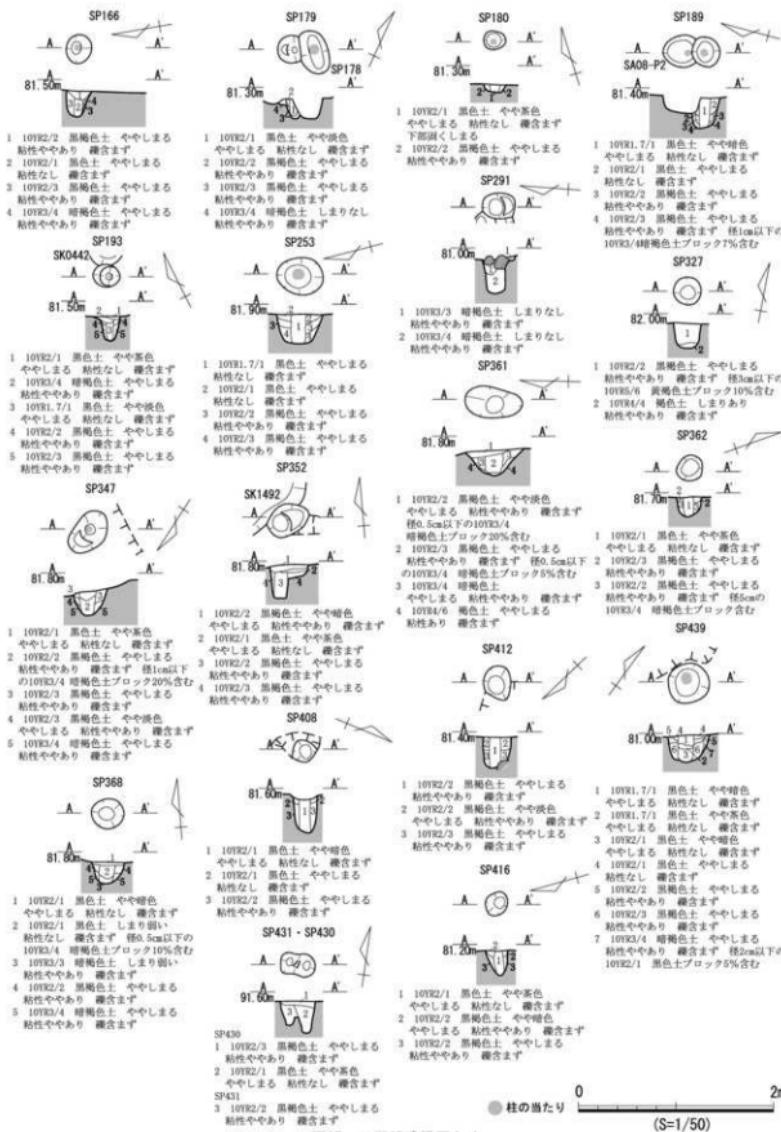


図37 Ⅲ期SP遺構図(2)

## SK0366 (図38) (AS0677)

**検出状況** C地点 JD18 グリッド、SI01 (II期)、SI02 (III期)、SI03 (V期) の各床下で検出した隅丸方形と想定できるやや深い穴である。

**埋土** 埋土はほぼ水平堆積だが、暗褐色ブロックを多く含むことから人為的に埋められた可能性が高いと判断した。底部はほぼ平らで、VI層に到達する。性格不明の土坑とした。

**遺物出土状況** 繩文土器2点、弥生土器1点、時期不明土師器類4点、石器類1点が出土した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。最下層出土の繩文土器（取上番号 5955）は深鉢 E2 類である。胸部区画と思われる沈線が一部残る。

**時期** 壺穴建物との重複関係から東野 II 期以前と判断した。

## SK1447 (図40) (AS1921)

**検出状況** C地点 KD 7 グリッド、III層上面で検出した。円形と想定できるやや浅い穴である。

**埋土** 3層がやや被熱することから炉の可能性が考えられるが、掘方やその周囲に石畠炉を想定させる痕跡が確認できなかったため、性格不明の土坑とした。

**遺物出土状況** 上層から繩文土器2点が出土した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。出土した繩文土器（取上番号 9203、9207）は深鉢 E1 類で、胸部区画の平行する沈線2条が認められる。取上番号 9203 は区画内に L R 繩文を埋める。

**時期** 出土遺物から東野 II 期以降と判断した。

## SK1474 (図40) (AS1975)

**検出状況** C地点 KE 8 グリッド、III層上面で検出した。検出時、繩文土器が多く出土し、北辺が直線状であることから壺穴建物を想定して掘削したが、壺穴建物と認定できるような関連遺構が確認できなかつたため壺穴状遺構とした。SD07、SK1486 に切られる。

**埋土** 黒褐色土、褐色土、暗褐色土が不均一に堆積する。底面は平らである。貼床状の固くしまる層は確認できない。壁はやや外傾する。

**遺物出土状況** 繩文土器11点、古墳前期土師器1点、時期不明土師器類3点が出土した。古墳前期土師器は、SD07 に接する位置で出土していることから混入の可能性も考えられる。その他の土器は最上層からの出土である。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。取上番号 9698 は深鉢 A 類で、口縁端部に薄く隆帯を貼り付ける。その下部に沈線を施す。取上番号 9733-1 は深鉢 A2 類の口縁部文様帯で一部であるが、渦巻文、S字文、区画が残る。頸部に刺突が見られる。

**時期** 検出時及び埋土から繩文土器片が出土したこと、II期の土坑 SK1486 に切られていることから東野 II 期以前と判断した。

## SK1992 (図43・45) (AS2981)

**検出状況** C地点 KL 4 ~ KM 4 グリッド、III層上面で検出した。梢円形のやや深い穴である。

**埋土** 繩文土器が埋土中から多量に出土したがまとまりではなく、意図的に土器を埋設した可能性は低いと思われる。中央がくぼむ堆積である。壁は開き、底面は平らである。性格不明の土坑である。

**遺物出土状況** 繩文土器8点が出土した。

**出土遺物** 75 は深鉢 A2 類である。接点はないが、胎土の類似から同一個体と判断し、合成実測した。

口縁部文様帶がS字文を区切りとして収束しながら並ぶ。隆帶で区画し、渦巻文と区画内に斜方向の沈線を施す。頸部に刺突が巡る。胴部外面に逆U字状の区画と区画内に羽状文を施す。76は深鉢A類である。口縁部が大きく外反する。隆帶で区画し、隆帶にそって沈線で区画を括る。区画内に羽状文を埋める。頸部以下は折損する。

**時期** 出土遺物から東野II期以降と判断した。

**SK2018（図43・46）（AS3066）**

**検出状況** C地点KN4・5グリッド、III層上面で検出した。平面形は東西辺が直線的で長く、南北辺が丸みを帯びる。長楕円形に近い形状で深い穴である。SK2018北西辺とSK2019南東辺が接し、SK2018>SK2019である。SI40北東主柱穴がSK2018埋土で確認できなかつたこと、SI40壁際溝を切ることから、SI40に後出する。

**埋土** 北部の壁はなだらかで、その他の壁は立つ。底面は平らである。埋土が不均一な堆積状況であることから、人為堆積の可能性が高いと考えられる。形状や埋没状況から墓坑の可能性が考えられる。

**遺物出土状況** 埋土から縄文土器9点、石器類4点が出土した。土器は破片で、上層からの出土である。出土状況にまとまりはない。石器は上層から砥石1点、下層から黒曜石のフレイク3点が出土した。

**出土遺物** 77は砥石である。表にV字溝が見られる。敲打痕が残る。背面は表面より砥面が粗い。出土した縄文土器は深鉢A類1点、B類1点、D類1点、E1類1点、E2類5点である。取上番号14113は深鉢A類の口縁部文様帶で、そうめん状の隆帶を渦巻き状に貼る。取上番号14199は深鉢B類の口縁部で、端部が外反する。S字文の一部が見られる。取上番号14197は深鉢D類の口縁部で、端部が内彎する。外面はミガキ状に仕上げる。

**時期** SI40との重複関係から東野II期と判断した。

**SK2019（図43）（AS3067）**

**検出状況** C地点KN4グリッド、III層上面で検出した。平面形は東西辺が直線的でやや長く、南辺は丸みを帯び、北辺が直線的で隅丸長方形に近い形状で深い穴である。SK2019南東辺とSK2018北西辺が接し、SK2019<SK2018である。

**埋土** 南部の壁は立ち、その他の壁はなだらかである。底面は平らである。埋土は中央がくぼむ堆積である。最下層は上層で確認できる黒褐色土ブロックを含むことから、人為的に埋められた可能性も考えられる。形状から墓坑の可能性が考えられる。

**遺物出土状況** 埋土から縄文土器1点、石器類2点が出土した。土器は破片で、上層からの出土である。石器はRFとMFで上層から出土した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。出土した縄文土器（取上番号14248）は深鉢の底部で、外面に煤が付着する。

**時期** SI40、SK2018との重複関係から東野II期と判断した。

**SK2023（図44・45）（AS3073）**

**検出状況** C地点K04グリッド、III層上面で検出した。SI40、SD48に切られる。平面形はやや不整な円形で、壁はなだらかである。

**埋土** 底は中央部から北東寄りがやや深くなる2段構造の深い穴である。底面でVI層に到達する。ほ

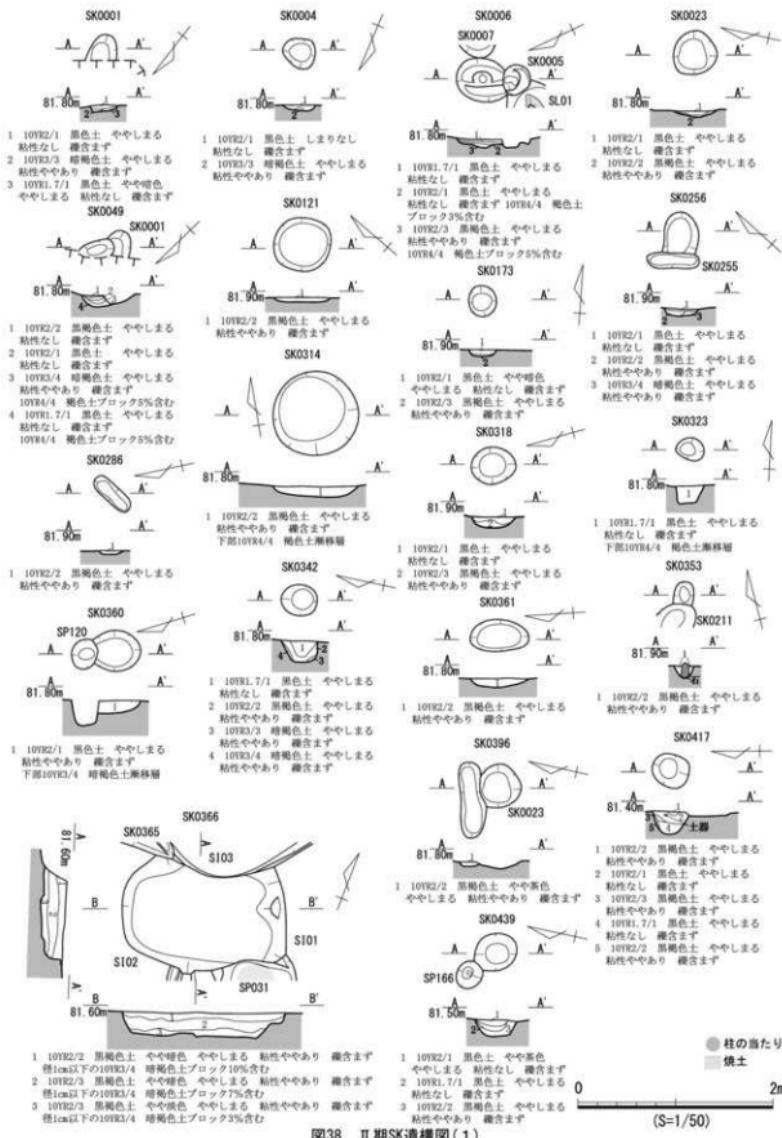


図38 II期SK遺構図(1)

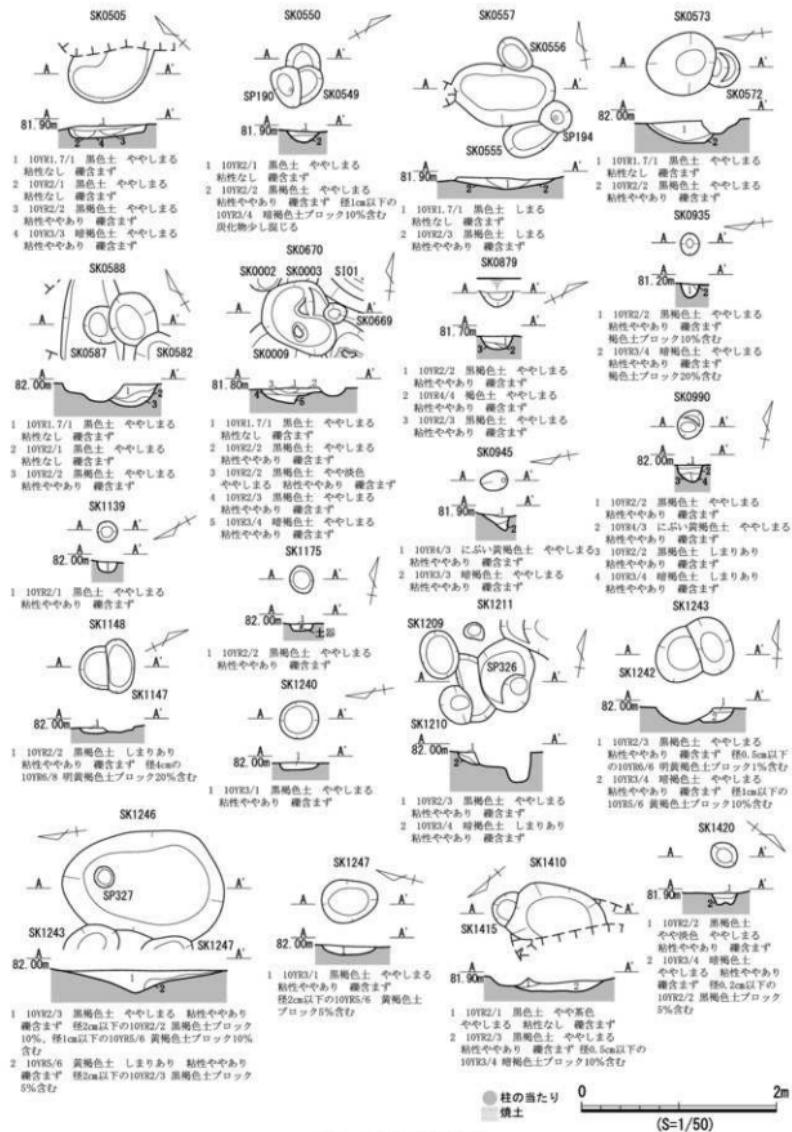


図39 Ⅱ期SK遺構図(2)

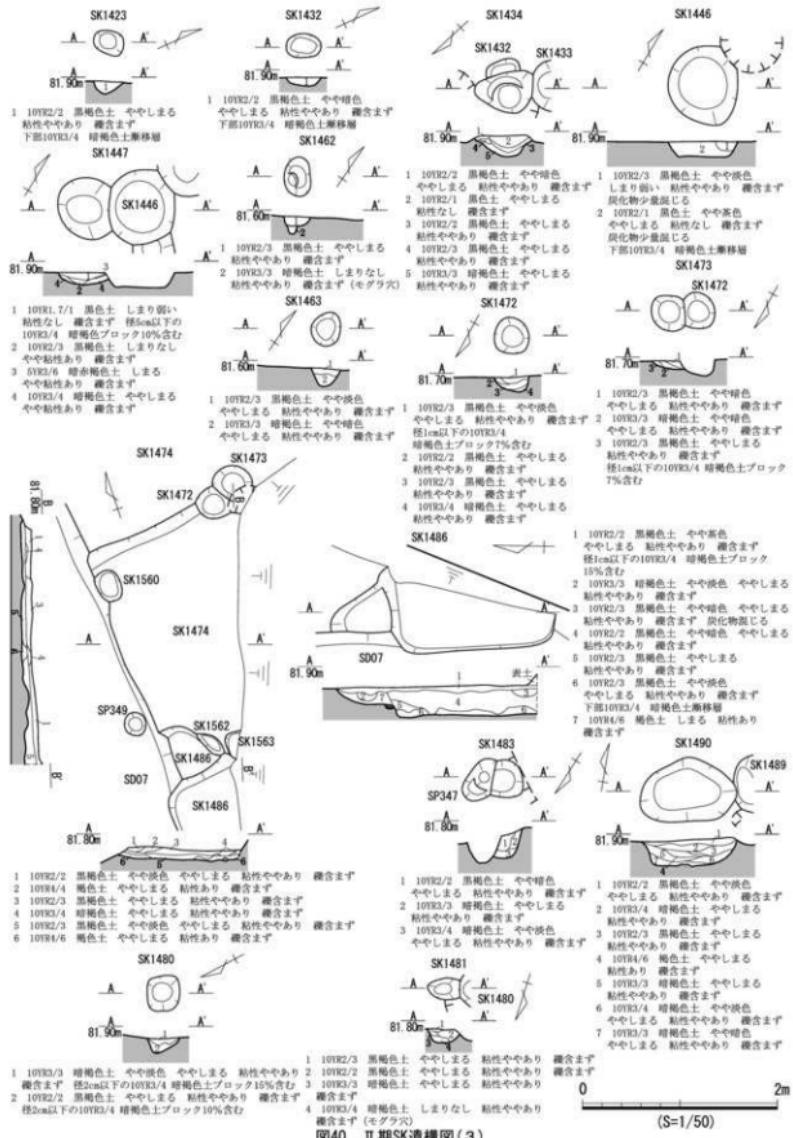


圖40 II期SK遺構圖(3)

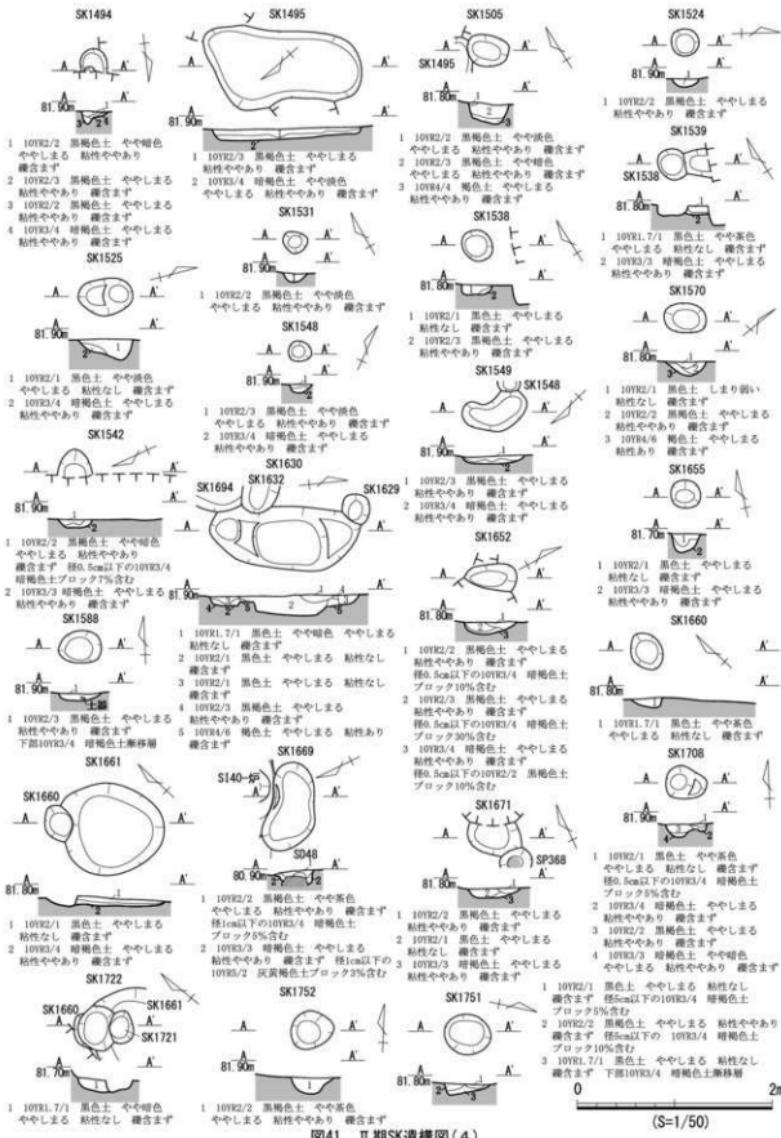


図41 II期SK遺構図(4)

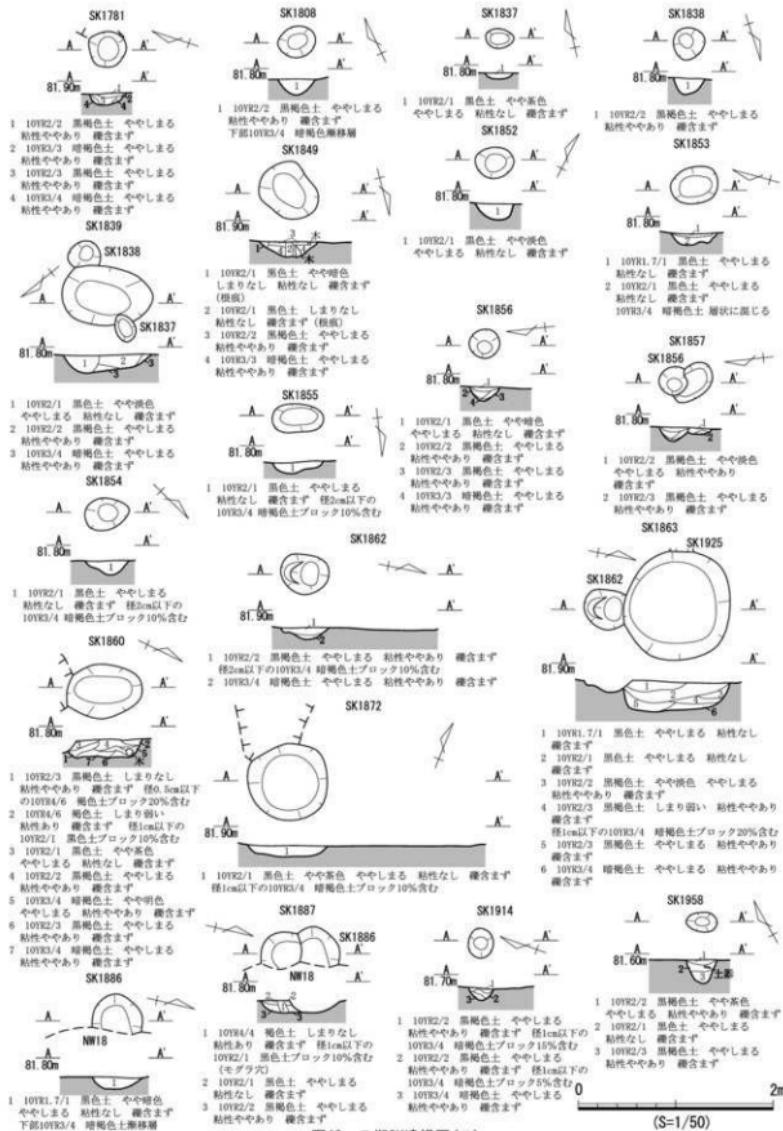


図42 II期SK遺構図(5)

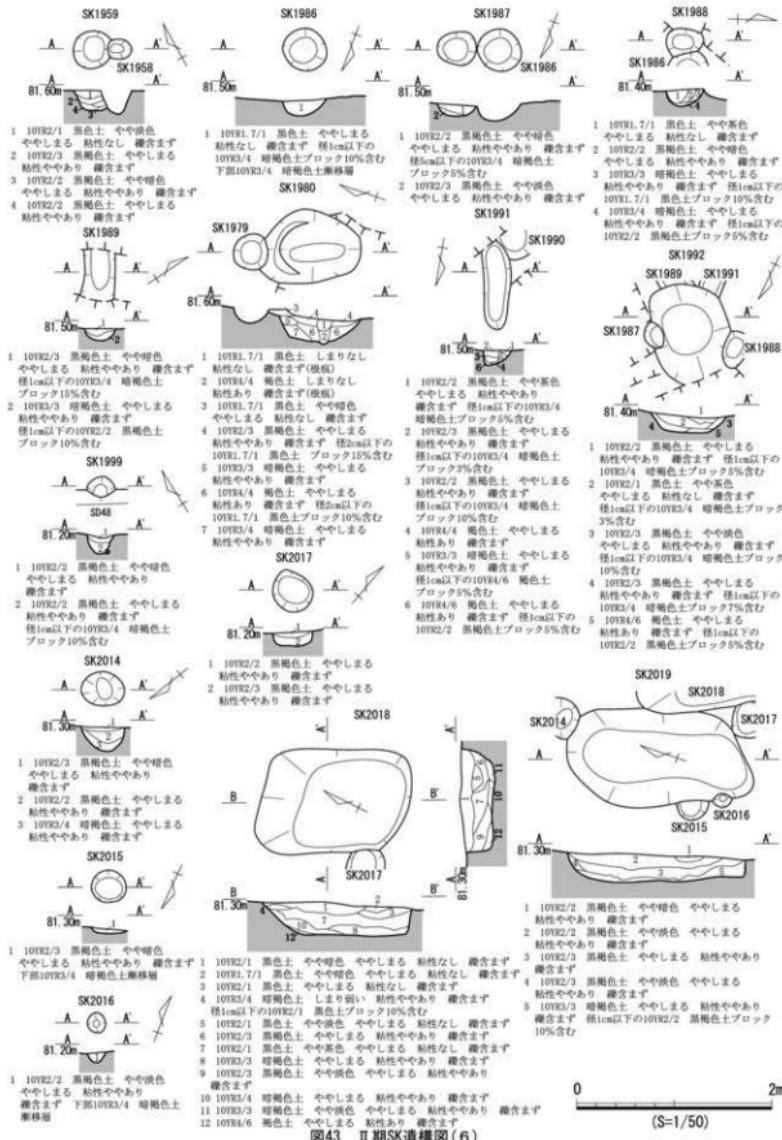


図43 II期SK遺構図(6)

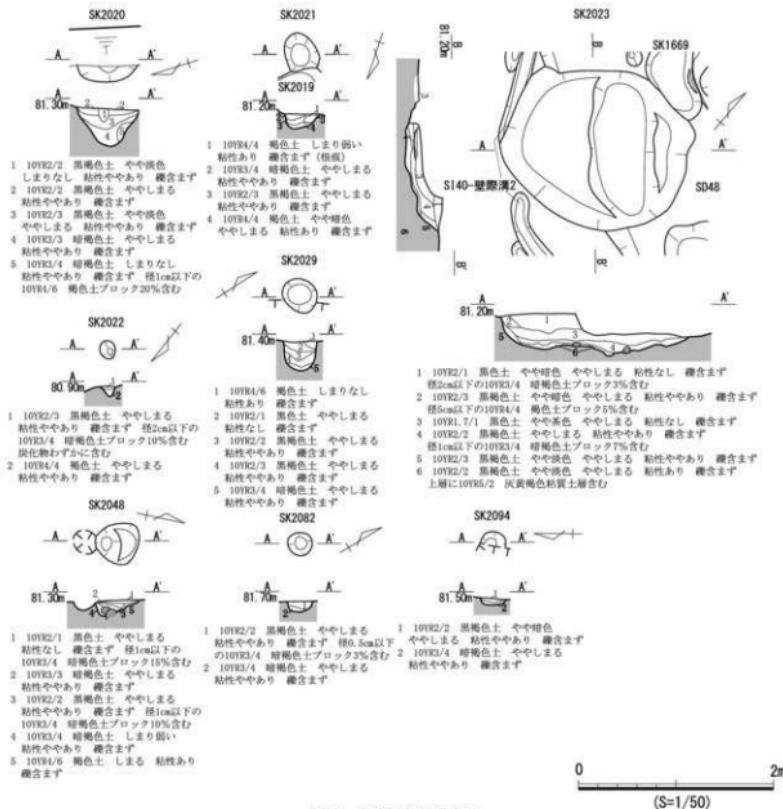


図44 II期SK遺構図(7)

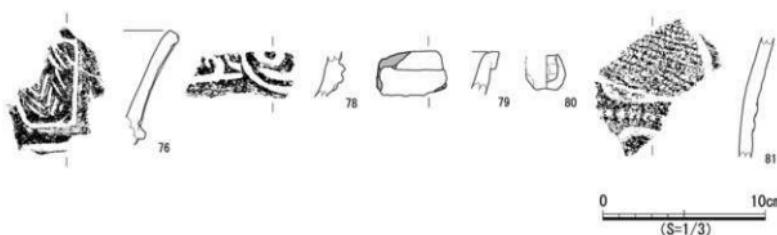


図45 II期出土遺物(1)

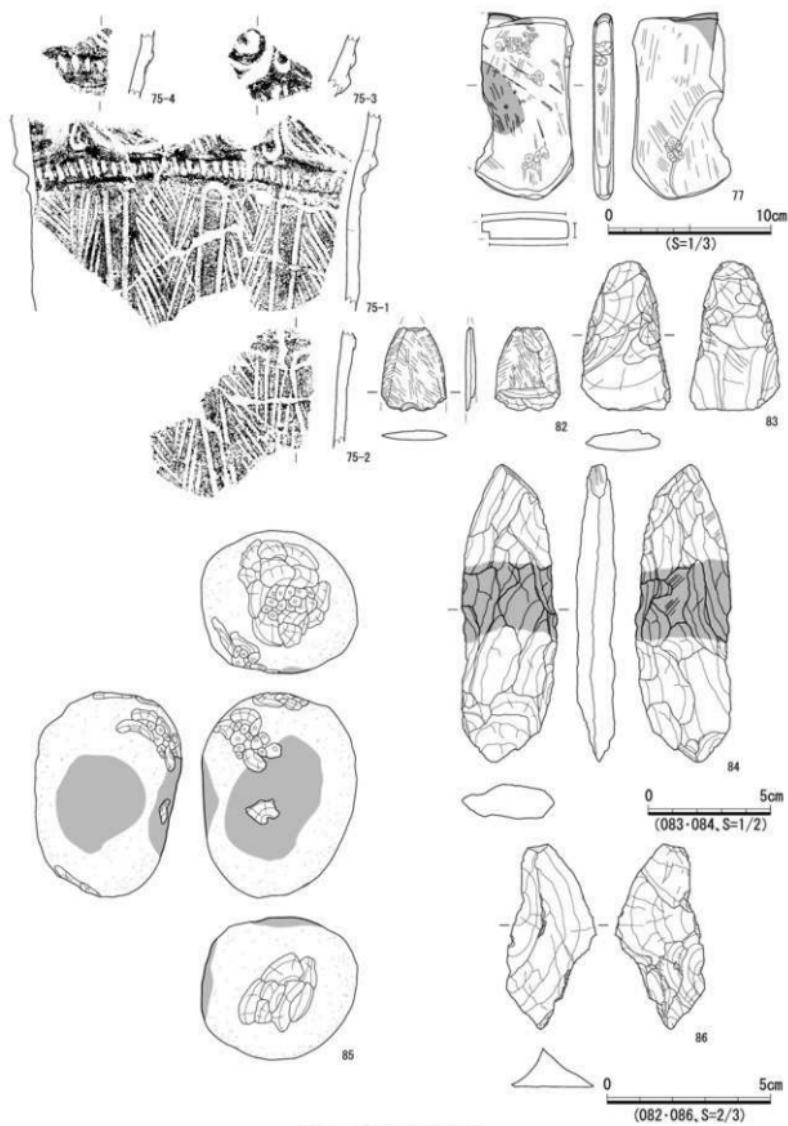


図46 II期出土遺物（2）

ぼ水平堆積であることから自然堆積と考えられる。三角堆積が確認できる。性格不明の土坑である。

**遺物出土状況** 繩文土器 26 点、石器類 2 点が出土した。土器は破片で、出土状況にまとまりはなかつた。出土土器は SI40 と同時期のものである。このことから、SI40 との埋土の類似によって重複関係を認めた可能性もある。石器は M F、剥片類が各 1 点である。

**出土遺物** 78 は深鉢 A 類の頸部付近である。溝巻文を隆帯と沈線を組み合わせて施し、連続する。79 は深鉢 E2 類である。口縁端部に帯状の隆帯を貼り付け肥厚させる。外面は無文である。深鉢 D 類の口縁部の可能性もある。80 は時期不明の手捏ね土器である。内面は指押さえし、爪痕が残る。外面は指押さえと指ナデ調整する。

**時期** SI40 との重複関係から東野 II 期と判断した。

**その他の土坑出土遺物（図 45・46）** II 期に関連すると判断した土坑から出土した特徴的な遺物について記述する。81 は SK1660 出土の深鉢 F1 類である。外面は隆帯による区画文内に L R 繩文を埋め、その下部に刺突が巡る。刺突は摩耗のため明瞭でない。胴部は隆帯による区画文内に L R 繩文を埋める。82 は SK1781 最上層出土の磨製石鏃である。表裏とも、鎌身部に斜方向の線状痕が見られる。刃部は縦横もちかえて磨くため線状痕の方向が異なる。下部に穿孔がある。棒状工具を大きく傾けて穿孔したと考えられ、擂鉢状の穿孔である。先端部は折損する。83 は SK1481 最上層出土の磨製石鏃未製品 2 類である。先端部を粗く打ち欠いて大まかな形状にする。表の下部は層理面が残る。84 は SK1246 出土の打製石斧である。短冊形で、中央部やや上方に装着痕が見られる。基部に線状痕が残る。85 は SK0879 出土の磨石・敲石類である。磨面は 2 面で粗い。敲打面は 4 面で、敲打痕の 1 単位が比較的広い。風化が著しい。86 は SK1410 出土の石核 B 類である。頂部に自然面が僅かに残る。横長剥片を 1 枚とる。剥離した稜線上 3 か所に微細な剥離が連続する。

## 5 搅乱坑・遺物包含層出土遺物（図 47～50）

87 は搅乱坑出土の深鉢 A 類の口縁部で、隆帯を 3 条貼り付け、その間に沈線を 2 条施す。中央の隆帯状に梢円形の刺突を施す。88 は搅乱坑出土の深鉢 B 類の口縁部で、波状口縁と思われる。口縁端部に沈線を 1 条施す。その下に沈線による区画と区画内に羽状文を埋める。89 は SI06 と重複する搅乱坑出土の深鉢 C 類で、SI06 埋土に位置していたと考えられる。立体的に装飾する口縁部文様帶の一部である。口縁端部上面に溝巻文を施し、左方向へのびていく。右側面ははがれているが、断面に焼成が及んでいることから閉じる部分と思われる。下面に沈線を施す。その左側は焼成が及んでいることから透孔があると思われる。右側面はナデで仕上げられるが、相対する左側面は折り返し状で未調整である。90 は倒木痕（NW15）出土の深鉢 E2 類で、口縁端部の面は、上方と外方向に 2 面見られる。深鉢 D 類の口縁部の可能性もある。91 は東海地方西部にみられない深鉢で、把手がつく形状になる。把手上面に S 字文を施す。文様帶は把手によって収束する。隆帯で区画し、区画内は斜方向の短沈線で埋める。92 は KH 7 グリッド出土の浅鉢の口縁部で、キャリバー形を意識した形状である。口縁部上端に面をもち、ヨコミガキを施す。外面に方形区画が連続し、区画間に縦位の隆帯を貼る。その下部に沈線が 1 条巡る。93～100 は打製石鏃である。93 は JI15 グリッド出土で、側縁部の調整時に表裏の打点を一致させることで側縁部を鋸歯状に作出する。先端部は折損する。94 は KK 1 グリッド出土で、側縁部の調整時に表裏の打点を一致させることで側縁部を鋸歯状に作出する。先端部は折損する。背

面は薄づくりである。95はKE8グリッド出土で、表はポジ面でふくらみが強いが裏は平坦になる。そのため全体が平面に向けて嘴状に反る。96は搅乱坑出土で、脚部の調整を放射状に施すことで、脚部を曲線的に作出する。97はJE18グリッド出土で、凸基の打製石鎌である。剥離した形状を利用するために、背面が長軸方向に湾曲する。側縁部を調整した後に基部を調整する。98はKI6グリッド出土で、平基鎌である。全体を薄く調整してから基部、左側縁部、右側縁部の順に調整する。先端部を最後に調整する。99はKD6グリッド出土で、未製品である。薄く作出し、大まかな形状にする。基部は抉りがある。左側縁部下方に刃部調整の微細な剥離が認められる。100はKL3グリッド出土で、右側縁部は外反気味に作出し、左側縁部は直線状に作出する。101～107は打製石斧である。101はKD3グリッド出土で、比較的内から押圧し、薄く広く剥離させて全体を作出する。102はKK5グリッド出土で、風化した自然面に斜方向の線状痕が認められる。側面上方くびれ部に摩耗した部分が見られ、装着痕である可能性が考えられる。103は搅乱坑出土で、刃部を折損する。側縁部がほぼ平行の短冊形である。104はKG5グリッド出土で、短冊形だがやや上方がすぼむ形状である。刃部の最先端に摩耗が見られる。105は搅乱坑出土で、薄く小さくつくる。磨製石鎌の石材に類似するが、側縁部を調整して略長方形に作出していることから打製石斧とした。表裏面中央やや上方に横方向の線状痕があり、装着痕の可能性が考えられる。106はJL18グリッド出土で、刃部が一部残存する。背面に線状痕が見られる。長軸の中央部やや上方に装着痕らしき摩耗範囲がある。107はKO4グリッド出土で、泥岩製のため全体が風化した感じである。特に線状痕が多い範囲は研磨状になる。108は搅乱坑出土の横刃形石器である。縁辺部全体に階段状の剥離を施す。刃部先端がややとがる。右側縁は直線状だが、左側縁は弧状に作出する。109～111は磨製石斧である。109はKD8グリッド出土で、刃部は折損する。左側縁の形状から刃部に近いと思われる。破断部に縦に近い斜方向の線状痕が見られる。110は搅乱坑出土で、刃部の一部が僅かに残る。線状痕は斜方向のものが多い。111は搅乱坑出土で、刃部やや上方が最大幅となる。基部に上部からの敲打痕が見られる。刃部表面にはがれがあり、使用痕の可能性が考えられる。112～114は石錐である。112はKM4グリッド出土で、ポジ面を生かし、菱形をつぶした断面形状になる。先端部は摩耗する。113はKH6グリッド出土で、先端部が摩耗してやや丸みを帯びることから使用痕と思われる。全体を細かく調整する。114はJE19グリッド出土で、先端部が摩耗する。115はKG6グリッド出土のRFである。右側縁部に刃こぼれ状の微細な剥離が見られる。116はKK1グリッド出土のMFである。くびれ部の一部に微細な剥離が見られる。117～119は石核Bである。117はKG5グリッド出土で、横長剥片を3枚以上とる。118はKH7グリッド出土で、縦長剥片1枚、横長剥片3枚をとる。背面は風化した自然面である。119は搅乱坑出土で、縦長剥片を1面で3枚、別の面で貝殻状の横長剥片を3枚とる。

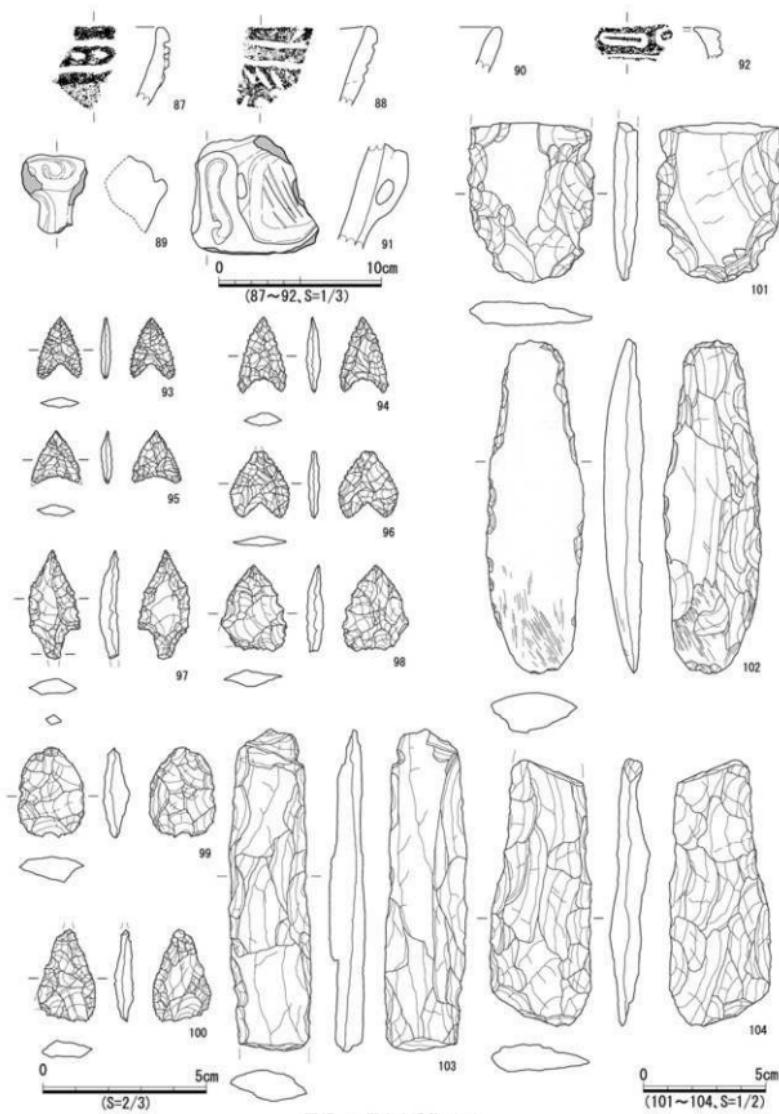


図47 II期出土遺物（3）

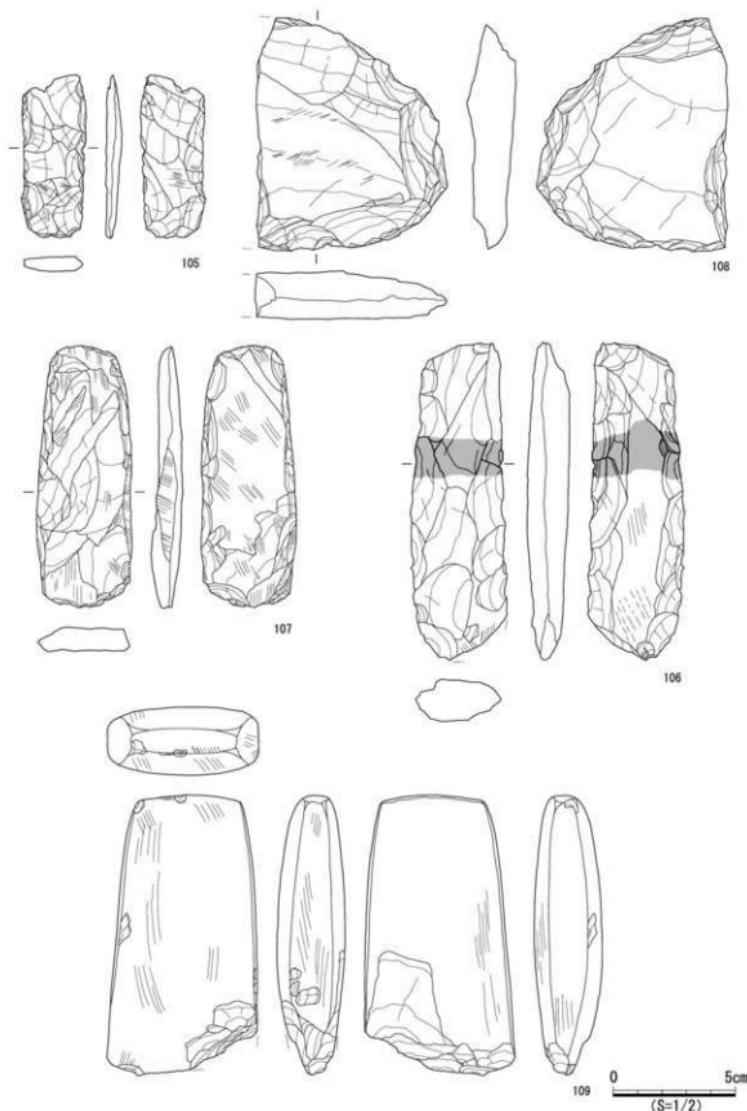


図48 Ⅱ期出土遺物（4）

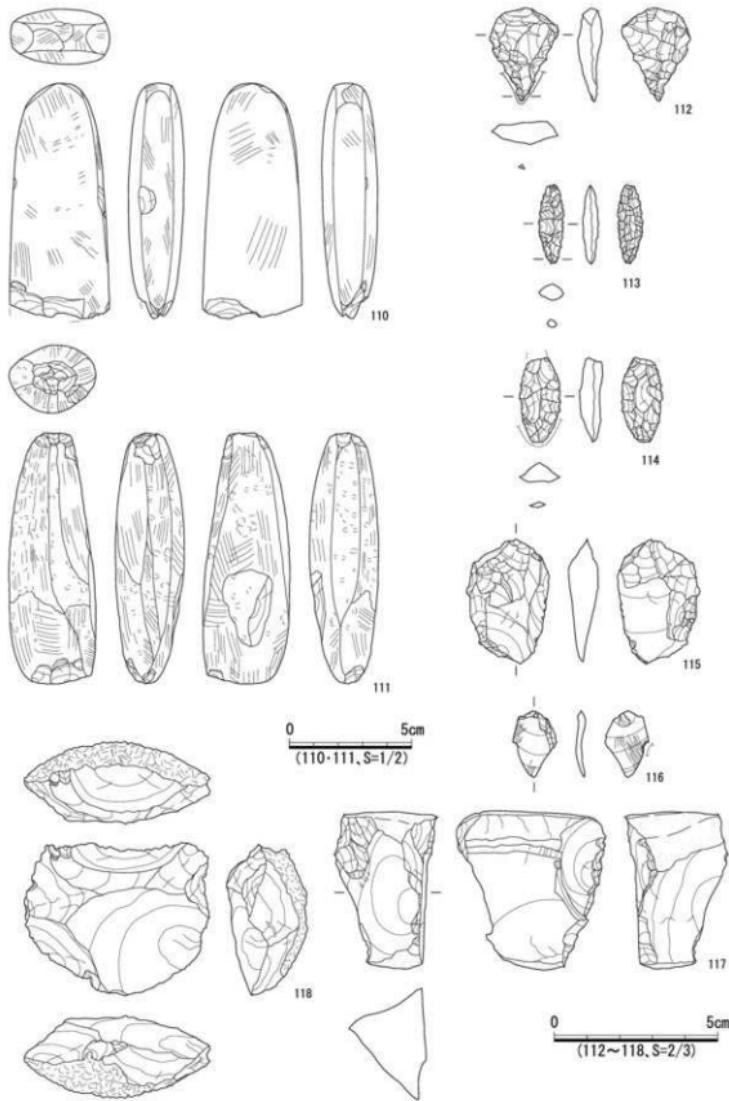


図49 II期出土遺物（5）

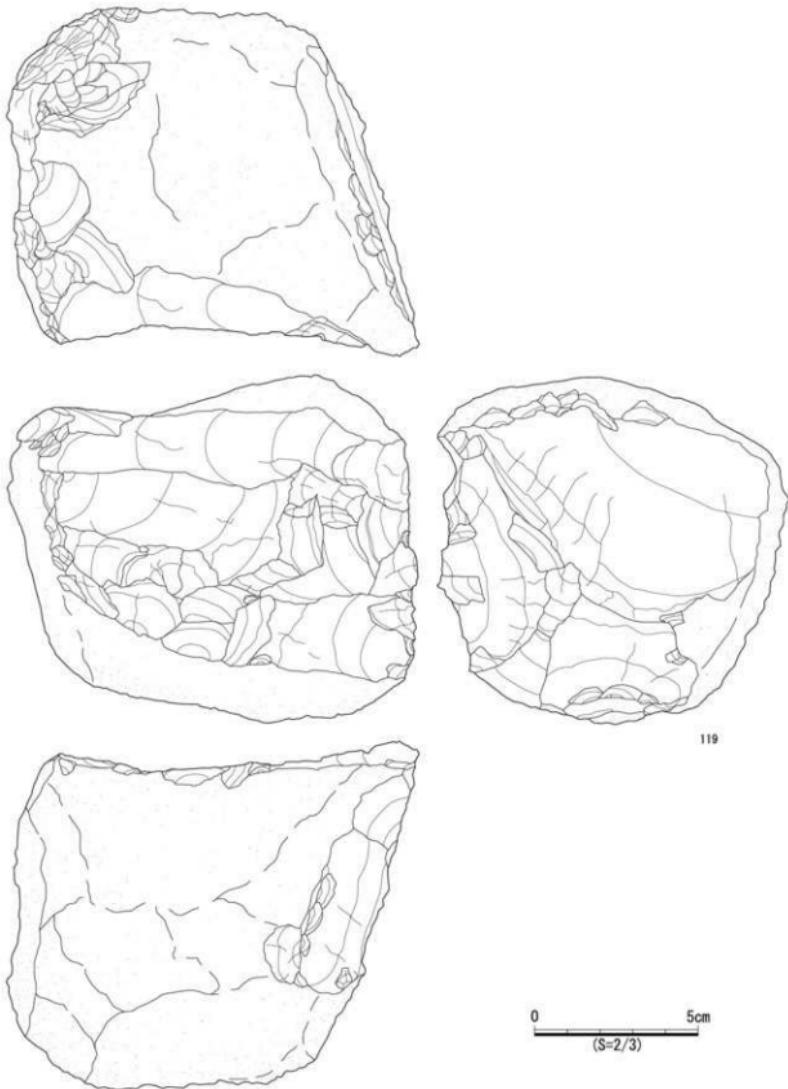


図50 Ⅱ期出土遺物（6）

## 第5節 東野Ⅲ期（弥生時代中期～古墳時代初頭）

### 1 積穴建物

当該期の積穴建物を 11 軒確認した。

#### SI02（図 51・52）（AS0026）

**検出状況** C 地点 JD17～JE18 グリッドで検出した積穴建物である。Ⅲ層上面で検出した。建物北東部を SI03 に切られる。西部は発掘区外である。平面形は不明であるが、残存する三辺から隅丸方形と想定できる。南辺の方位は N-71° - E である。

**埋土** 黒色土、黒褐色土、暗褐色土などが不均一に堆積する。また、埋土中に炭化材や焼土ブロックが散在するが、床面からは浮く。埋土中に黑色土・褐色土ブロックを含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** Ⅲ・Ⅳ層を掘り込んでいる。壁面はやや開く。壁の残存高は最大で 0.06m である。

**床面** ほぼ平坦である。貼床や硬化面は不明瞭で、Ⅳ層に類似する。積穴埋土除去後検出した遺構は柱穴 1 基、壁際溝、性格不明土坑 1 基である。炉は確認できなかった。東西のほぼ中間に位置すること、積穴埋土除去に検出したこと、P 1 埋土状況から、P 1 をこの建物の主柱穴の可能性が高いと判断した。SI02 の平面形がほぼ正方形であれば一本柱建物、南北方向の長方形であれば二本柱建物と想定できるが、現状では不明である。P 1 は明瞭な柱痕跡が確認でき、柱径は約 0.09m と想定できる。柱穴底面は VI 層の木曾川泥流堆積層に到達し、礫が露呈する。壁際溝は、建物が確認できた範囲をほぼ全周するが、東部は一部で途切れる。深さ平均 0.02m を測る。壁際溝南部中央が二段構造となる。中央の段から約 0.6m 西寄りに梢円形の窪みがあるが、窪みの底部に硬化面は確認できない。

**遺物出土状況** 繩文土器 4 点、弥生土器 9 点、時期不明土師器 5 点、須恵器 1 点、石器 4 点、炭化物 5 点が出土した。埋土上層から繩文土器・弥生土器・時期不明土師器・須恵器が出土し、下層から繩文土器・弥生土器・時期不明土師器が出土した。床面で砥面を床に伏せた状態の砥石（I22）が出土した。

**出土遺物** I20 はⅢ期高坪 D 類の坏部である。内外面は摩耗のため調整不明である。坏部に段を有し、端部に向かって外反する。I21 はⅢ期高坪 D 類の坏部である。内外面は摩耗のため調整が不明瞭だが、坏底部外面に僅かにタテミガキの痕跡が残る。I22 は砥石である。砂岩製で、被熱のため赤色化している。砥面は 2 面で、線状痕と敲打痕が残る。U 字状の溝が 1 条残る。

**時期** SI03 に切られることからⅧ期をさかのぼる。埋土下層で出土土器の約 73% を弥生土器が占める。以上のことから東野Ⅲ期の可能性が最も高いと判断した。

#### SI08（図 53・54）（AS0777）

**検出状況** C 地点 JK18～JL19 グリッドで検出した積穴建物である。Ⅲ層上面で検出した。建物南部で SD39、SB06 に切られる。残存する辺はほぼ直線状である。隅部の状況から、平面形は北西-南東方向にやや長い隅丸方形の積穴建物と想定できる。長軸の方位は、N-75° - W である。

**埋土** 埋土は単層である。埋土中に暗褐色土ブロックを含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** Ⅲ・Ⅳ層を掘り込んでいる。壁面はやや開く。壁の残存高は最大で 0.13m である。

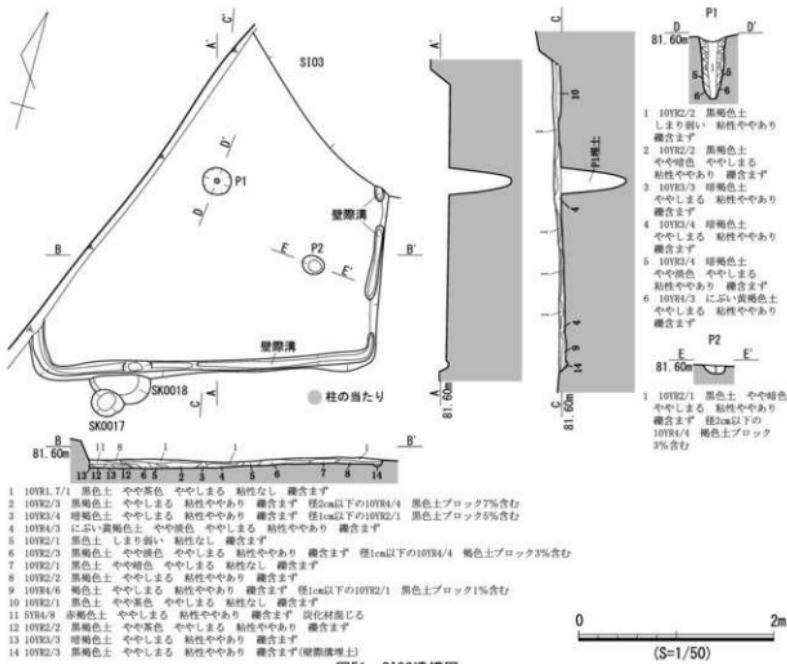


図51 S102遺構図

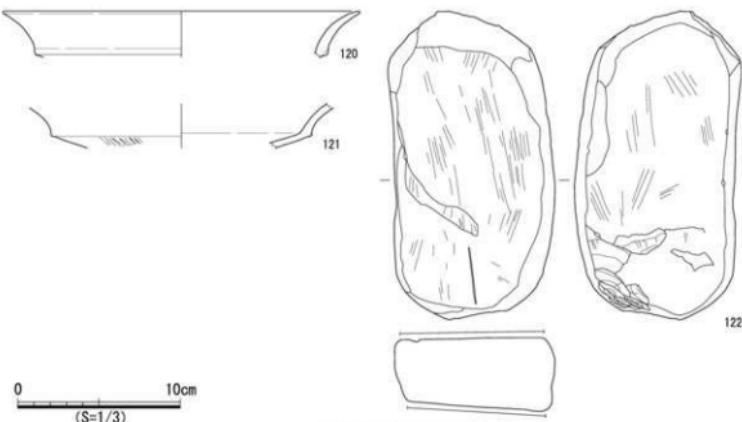
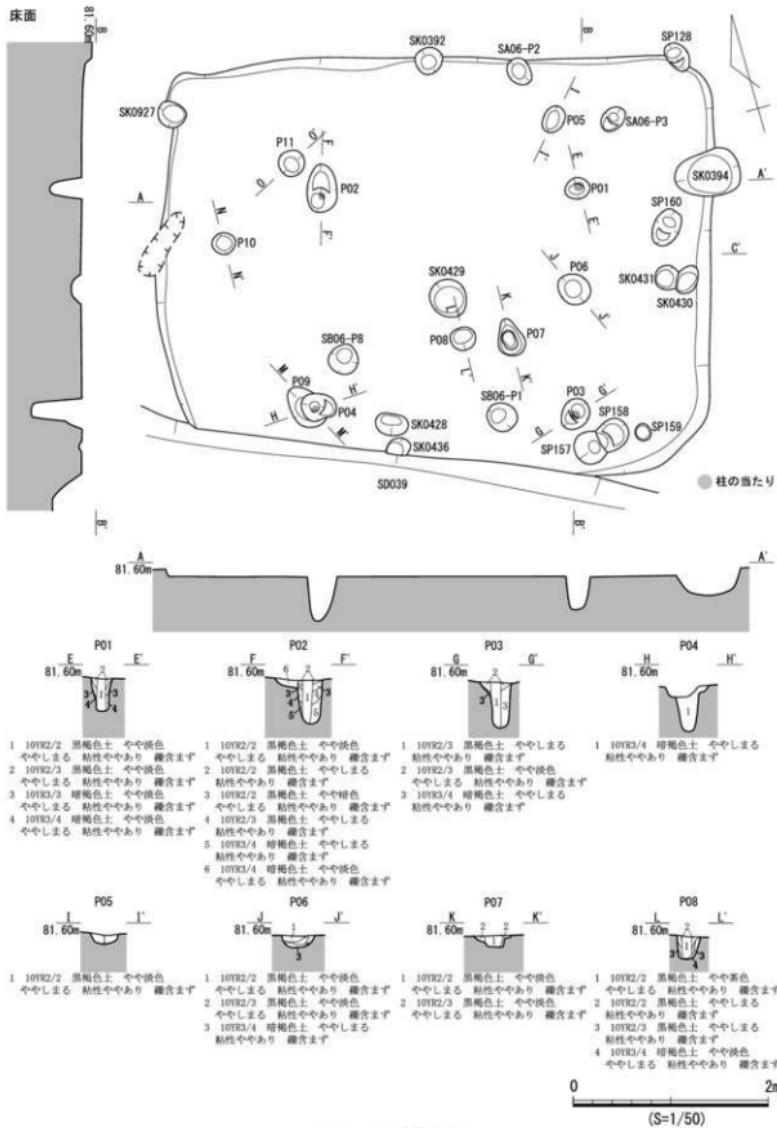


図52 S102出土遺物



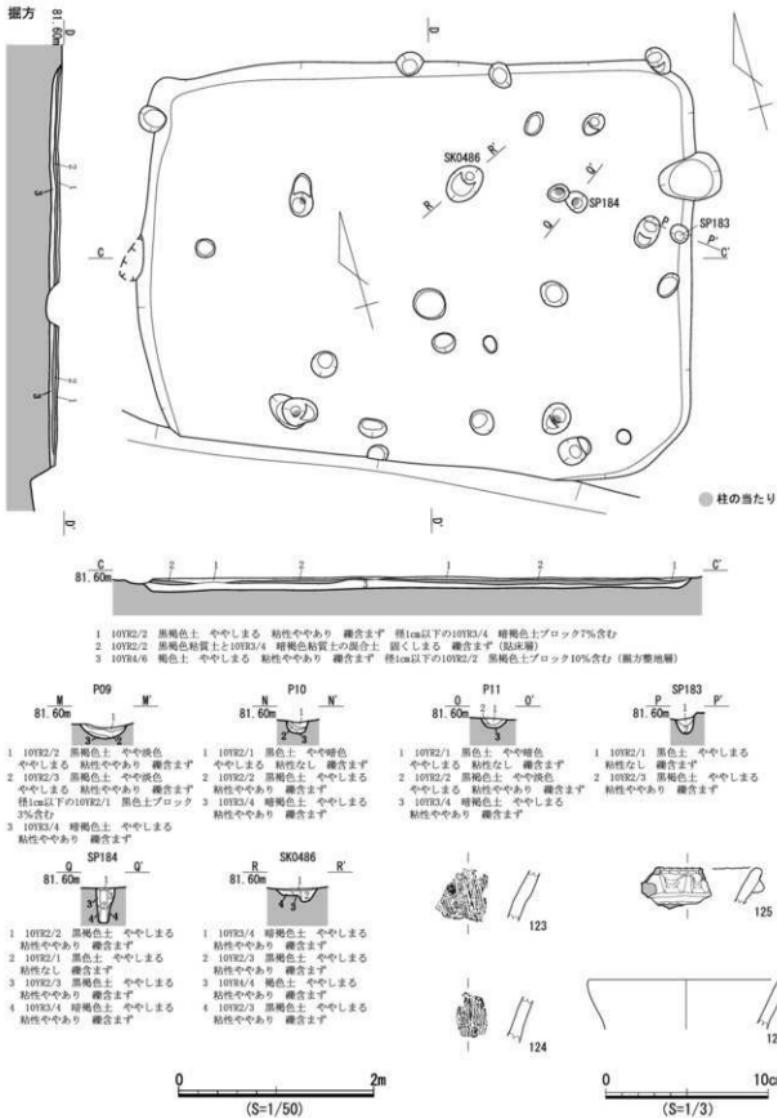


図54 S108遺構図(2)・S108出土遺物

**床面** ほぼ平坦である。貼床（2層）が、建物の残存する範囲全体に、明瞭に残る。貼床は黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合土で、固くしまる。床面で検出した遺構は柱穴4基、性格不明土坑7基である。炉、壁際溝は確認できなかった。竪穴内の位置関係と埋土状況からP01、P02、P03、P04をこの建物の主柱穴と判断した。P04を除く柱穴で、明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は0.08~0.10mと想定できる。柱埋戻土最上層に貼床層が確認できることから、貼床形成後、柱穴が掘削されたと考えられる。

**床下** 貼床除去後、柱穴2基、性格不明土坑1基、掘方整地層を確認した。掘方整地層（3層）は、褐色粘質土が主体の黒褐色土ブロックを含む層である。平均0.04m厚である。貼床層、基盤層よりしまりは弱い。その他の床下で確認した柱穴及び性格不明土坑とSI08との関連は不明である。

**遺物出土状況** 繩文土器1点、弥生土器7点、時期不明土師器11点、須恵器1点、礫1点が出土した。埋土上層から繩文土器・弥生土器・時期不明土師器・須恵器が出土し、埋土下層から弥生土器・時期不明土師器・礫が出土した。礫は建物のほぼ中央部から出土した。被熱した川原石で、床面から浮いた状態で出土した。

**出土遺物** 123、124はIII期壺D1類の胴部である。やや外反する。外面はクシ条痕、内面はナデ調整する。胎土が異なることから別個体と考えられる。125はIII期壺の口縁部である。口縁端部に押引きを施す。その下はヨコナデ後、突帶を貼り付ける。突帶は、間隔を空けつつ押圧する。その下は条痕である。内面はナデ調整する。弥生時代前期後半に比定できる。126はIV期壺B類の口縁部である。内外面は摩耗のため調整不明である。口縁部はやや短めである。折損部に僅かな屈曲が見られることから、頸部と思われる。

**時期** SD39に切られることから古墳時代前期をさかのぼる。埋土下層で時期不明土師器を除くと弥生土器のみが出土している。以上のことから東野III期の可能性が最も高いと判断した。

#### SI13（図55~60）(AS1279)

**検出状況** C地点KG3~KH4グリッドで検出した竪穴建物である。建物中央部を南北に継断する搅乱溝以西を平成24年度、以東を平成25年度に調査した。III層上面で検出した。建物北西部でSI14を切る。平面形は四辺がほぼ直線状の東西にやや長い隅丸方形の竪穴建物である。長軸の方位は、N-60°~Wである。

**埋土** 黒色土と黒褐色土がほぼ水平に堆積し、壁際埋土がやや傾斜して堆積する。埋土中に暗褐色土・黒色土ブロックを多く含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。南南西方向に低くなる地形のため上層が攪拌されており、埋土はその方向に向かって削平されており、残存状況がよくない。

**壁** III・IV層を掘り込んでいる。壁面は緩やかに開く。壁の残存高は最大で0.2mである。

**床面** ほぼ平坦である。貼床（8層）が、建物の残存範囲全体に明瞭に残る。貼床は黒色土と暗褐色粘質土の混合土で、固くしまる。床面で検出した遺構は柱穴4基、炉1基、貯藏穴2基、性格不明土坑4基である。壁際溝は確認できなかった。竪穴内の位置関係と埋土状況からP01、P02、P09、P10をこの建物の主柱穴と判断した。4基ともに明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は0.10~0.14mと想定できる。柱埋戻土最上層に貼床層が確認できることから、柱埋設後、貼床形成したと考えられる。

**炉** 建物中央部やや東寄りで、長楕円形の川原石が出土し、川原石が強く被熱し、その周囲の床面が

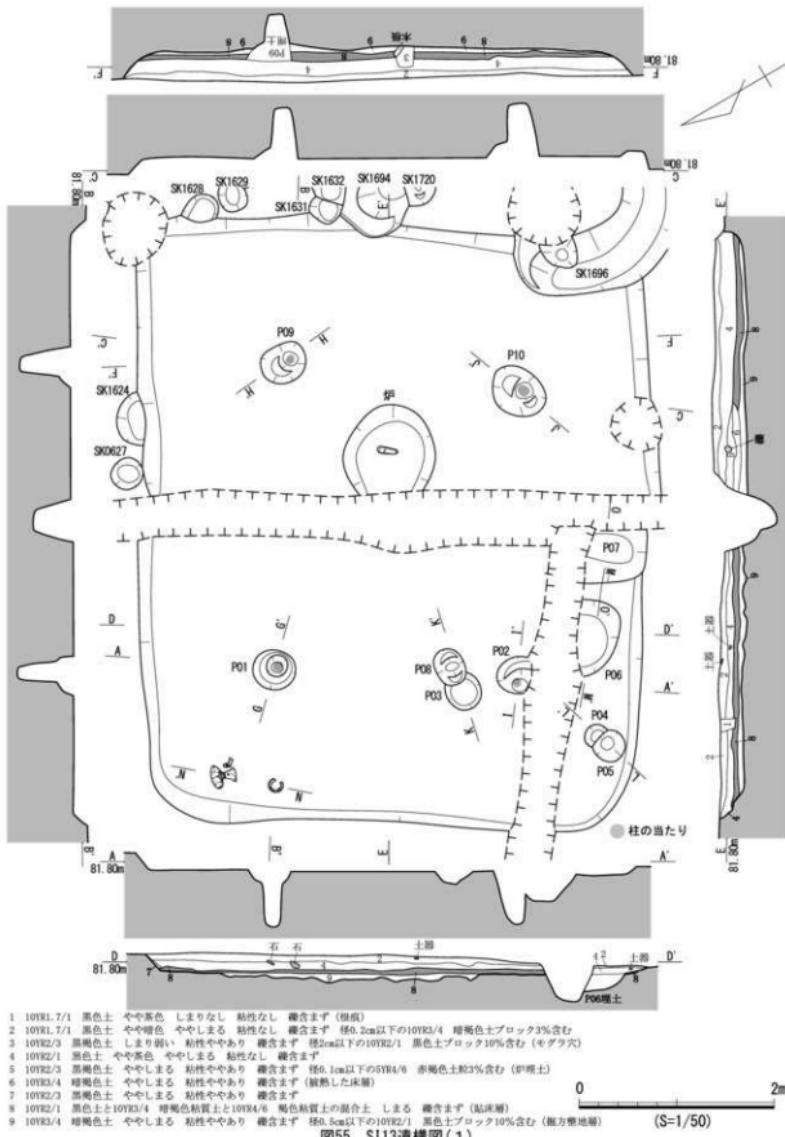


図55 S113遺構図(1)

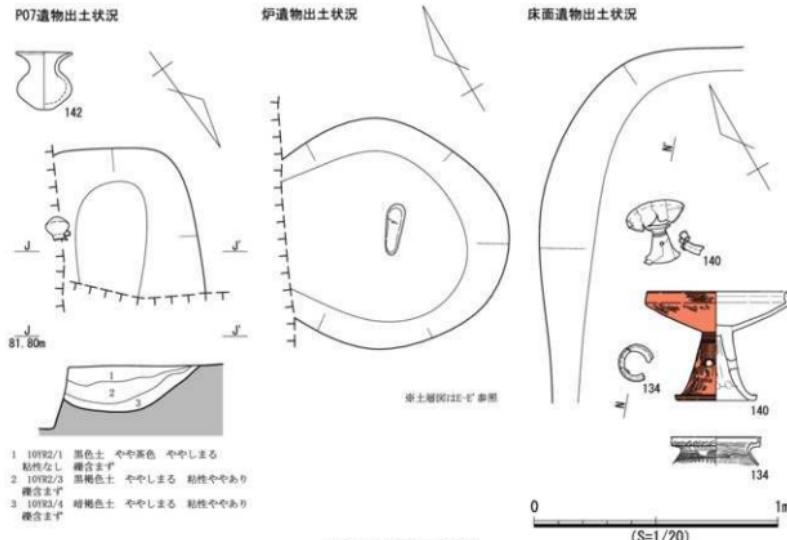
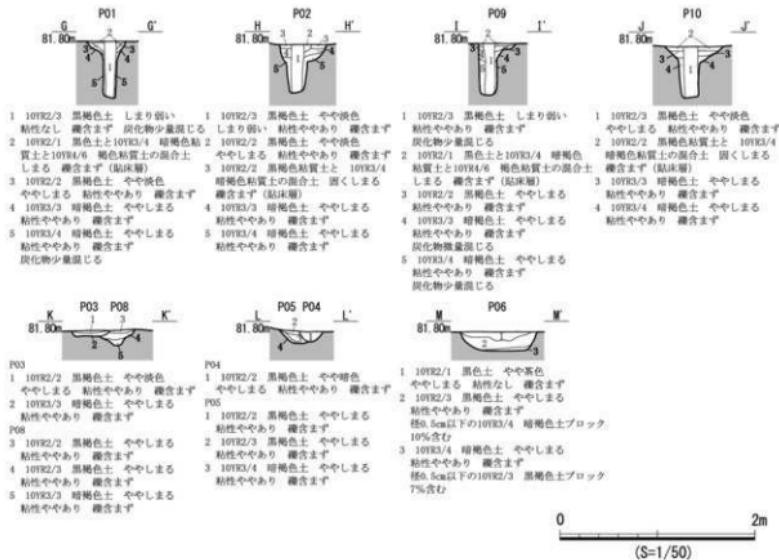


図56 SI13遺構図(2)

やや被熱していたことから、この建物の炉と判断した。床面を浅くくぼませて（E-E'断面5層）、そのほぼ中央に川原石を据えていることから、地床炉と考えられる。E-E'断面6層は、炉の影響で被熱が及んでいる床面の範囲と考えられる。川原石は上面だけが被熱していることから、煮炊き用の土器を支える枕石の可能性が考えられる。

**貯蔵穴** 南部床面で検出したP06、P07を竪穴内の位置関係と形状から貯蔵穴と判断した。P06は残存形状から平面形は円形と想定できる。壁はやや開き、底は平らである。長軸長0.78m、残存短軸長0.42m、深さ0.2mを測る。埋土から弥生土器片1点が出土した。P07は2辺を擾乱坑によって消失している。平面形は南西部で屈曲することから隅丸方形の可能性が想定できる。壁は、西側は大きく開き、南側は傾きが小さい。底面は、東西方向は丸く、南北方向は平らである。残存長軸長0.58m、残存短軸長0.54m、深さ0.19mを測る。底部に接してⅢ期ミニチュア土器（142）が出土した。ミニチュア土器は口縁部を北に横位で出土した。出土状況から建物の廃棄儀礼の可能性を窺わせる。

**床下** 貼床除去後、掘方整地層を検出した。掘方整地層は、暗褐色土層が主体の黒色土ブロックを含む層（9層）で、ほぼ平らである。平均0.04m厚である。貼床層、基盤層よりしまりは弱い。

**遺物出土状況** 繩文土器3点、弥生土器201点、古墳前期土師器15点、時期不明土師器類251点、石器類23点が出土した。埋土上層から弥生土器片、土師器片が多量に出土したが、下層の掘削にしたがって減少し、破片が大きくなっていた。建物西部の床面でⅢ期高坏C類（140）とⅢ期甕A類（134）が出土した（図56）。高坏は坏部を北にして横位で出土した。甕口縁部は正位で出土した。また、南東隅部に近い範囲の床直上や埋土から板状石材や磨製石鐵未製品がまとまって出土した。中央部を南北に縱断する擾乱坑出土のⅢ期土器は、SI13に属する可能性が高いと考えられる。

**出土遺物** 127、128はⅢ期壺A1類である。127は口縁部から頸部で、口縁部は大きく開き、端部下に貼り付けて肥厚させる。内外面は摩耗のため調整不明である。128は、内面はヨコミガキを施す。外面は上段に直線文を8条、中段に刺突列、下段にヨコミガキを施す。129はⅢ期壺C類である。外面はクシ条痕、内面はケズリ調整する。口縁部が極端に短く端部に面をつくる。130～133はⅢ期壺E類である。130は口縁端部外面に直線文が3条巡る。外面は摩耗のため調整不明である。131は口縁端部に向かって内彎し、端部が直立する。口縁端部上方に面をもつ。くびれ部内面に縱方向のユビナデが認められる。132は、内面はタテミガキ、外面は斜めミガキを施す。口縁端部に直線文が5条巡る。破断後に被熱しており、被熱の度合いと炭化物の付着が破片によって異なる。133は口縁端部で内彎する。口縁端部外面に直線文が4条巡る。その下にクシ状工具による刺突列を施し、その下にタテミガキを施す。内面はヨコミガキを施す。134はⅢ期甕A類の口縁部である。口縁部内面の受口上段はヨコナデ、下段から頸部まではヨコハケで調整する。口縁部外面は上段がヨコナデでその下部にクシ状工具による刺突を施す。刺突は4個1単位である。縦に対して下方から斜方向に向かって刺突することで凹凸ができる。下段から胴部はハケ調整後、胴部上段に直線文を6条、その下に刺突列を施す。胎土は当遺跡の他の甕類とは異なる。135はⅢ期甕B2類の口縁部である。口縁端部直線的に開く。内外面は摩耗のため調整不明である。136はⅢ期甕C類である。底部内面と脚台部内面に焼成時の黒斑が認められる。胴部外面はタタキ後ハケ調整する。口縁端部にタタキが残る。胴部内面はケズリで、下半は縱方向、上半は横方向に削る。137はⅢ期甕D1類である。胴部外面はハケ、内面は板ナデ調整する。外面は被熱により赤色化する。内面に煤が付着する。138はⅢ期甕D2類の口縁部である。口縁

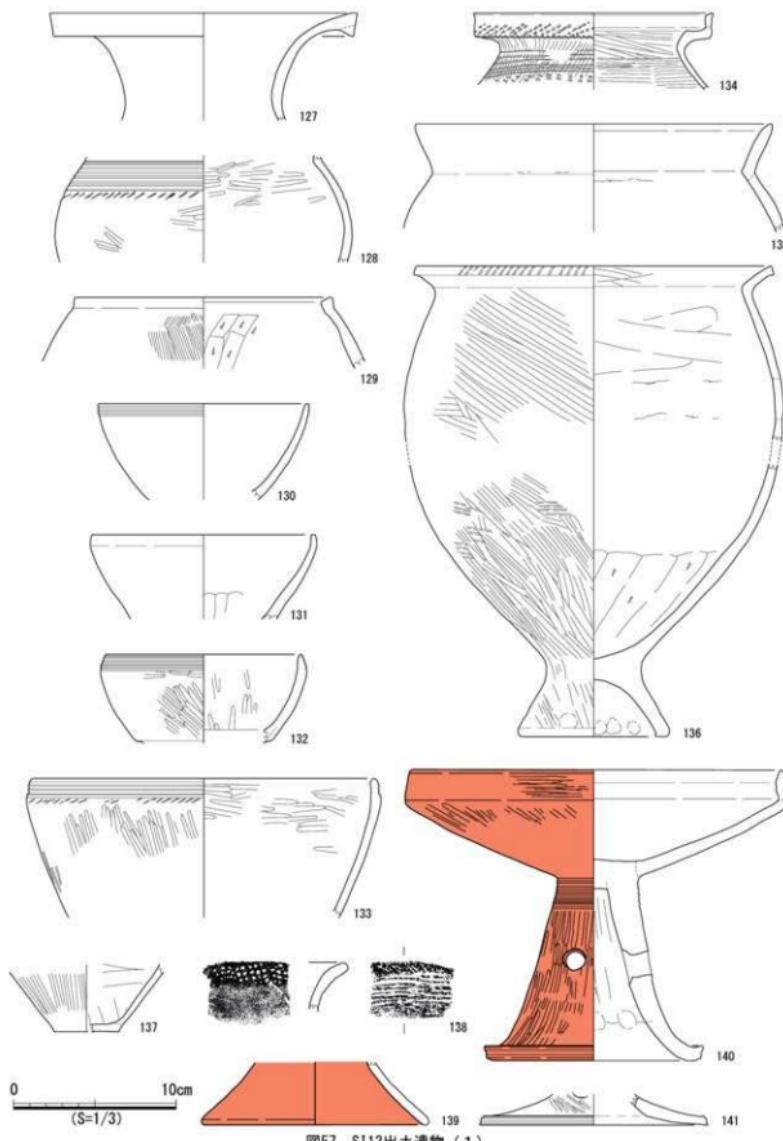


図57 SI13出土遺物（1）

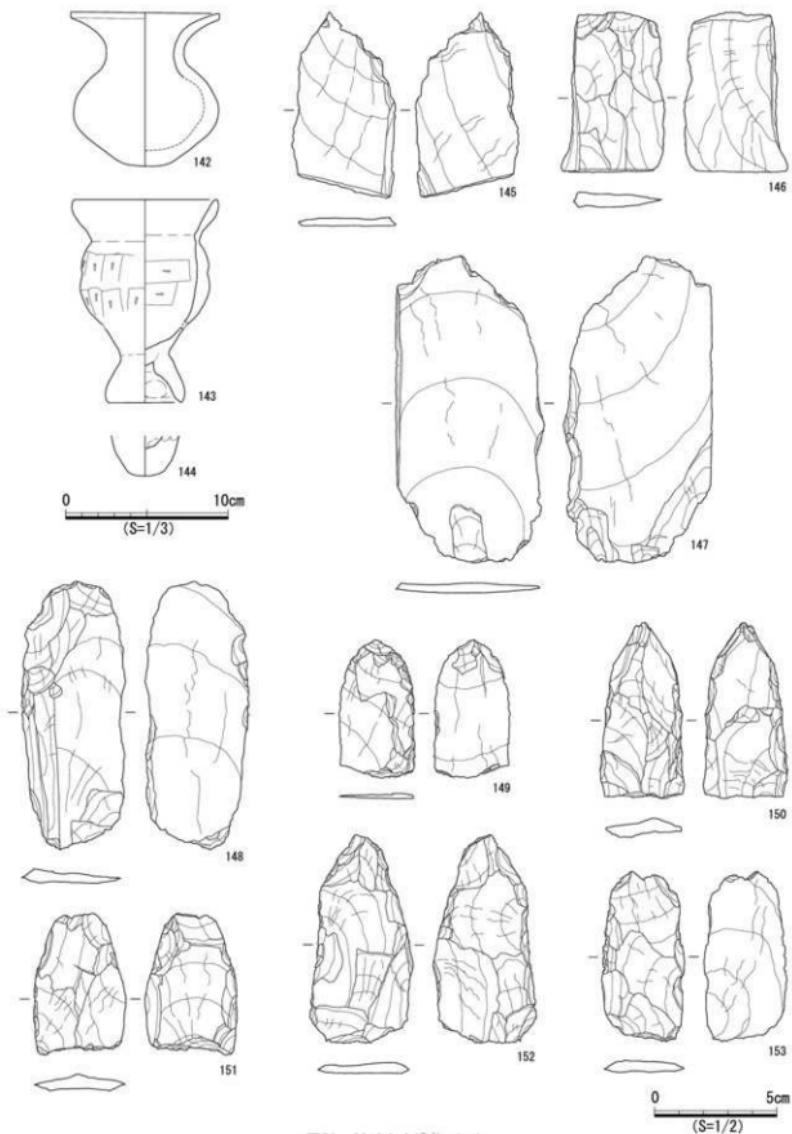


図58 S113出土遺物（2）

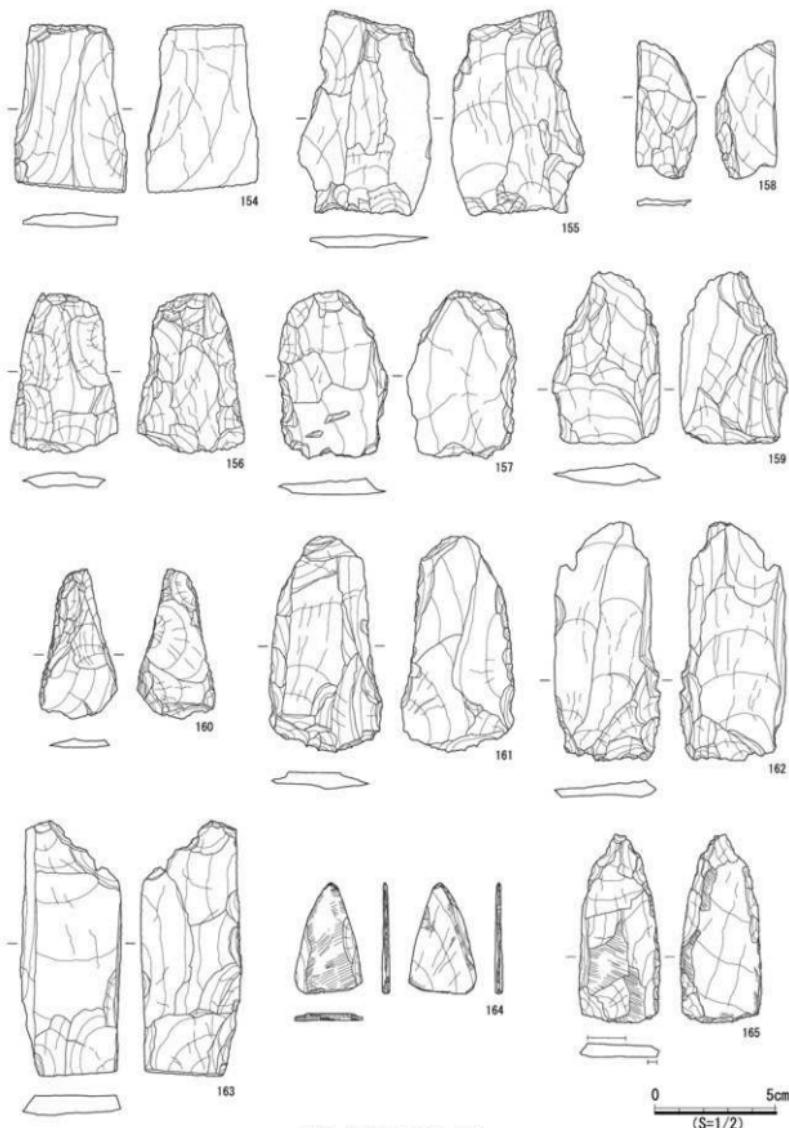


図59 SI13出土遺物（3）

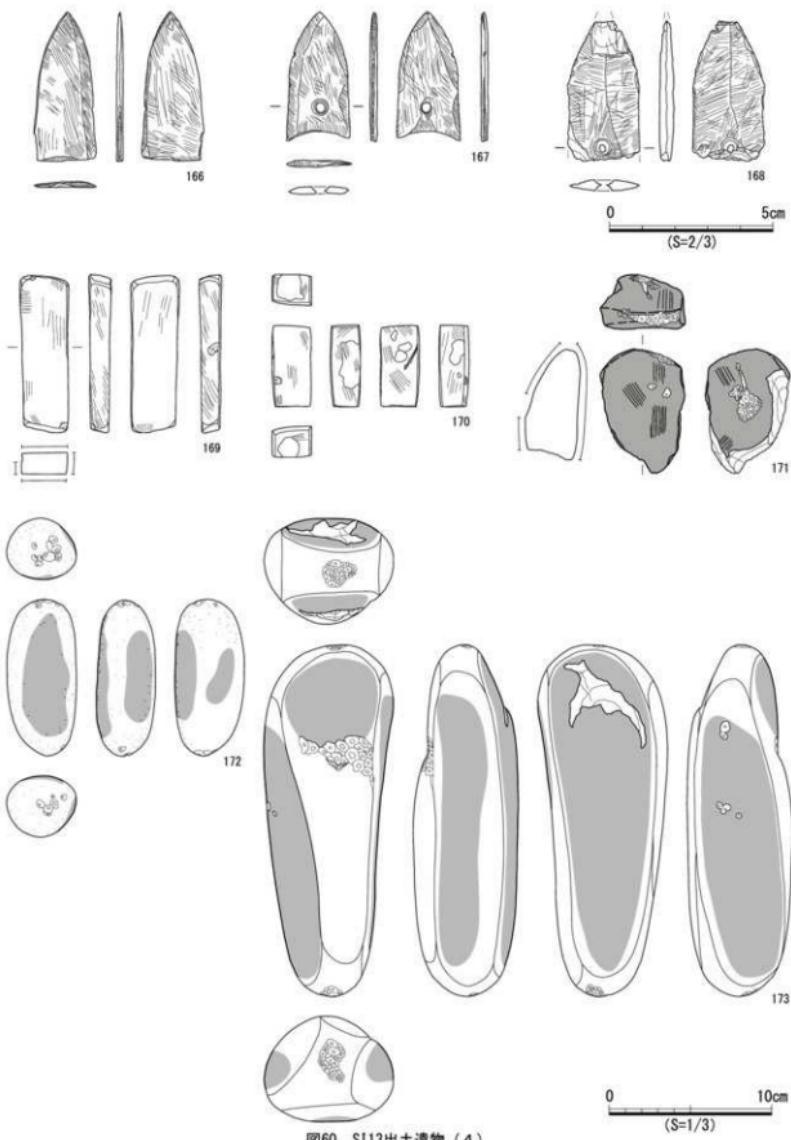


図60 S113出土遺物（4）

部外面は刻みと条痕である。内面は端部に4個1単位のクシ状工具による刺突列を施し、その下はナデ調整する。139はⅢ期高坏A類である。裾部内外面はナデ調整する。赤彩が内外面に残る。開きが小さく裾幅が小さい。140は高坏C類である。口縁端部が内傾する。口縁部の立ち上がり部は、外面はヨコミガキを施し、内面はヨコナデ調整する。坏部外面はタテミガキを施す。内面は剥離のため調整不明である。剥離は敲打痕状である。脚部外面上部に直線文を6条、その下はタテミガキを施す。脚部に1段3方向の透孔がある。脚部内面は絞り込みとヨコナデ調整する。141はⅢ期高坏である。脚部に透孔がある。外面はタテミガキを施し、内面はヨコナデ調整する。裾端部に直線文が2条巡る。142はP06出土のⅢ期ミニチュア土器で広口壺形である。口縁部が大きく開き、口縁端部外方に面をもつ。摩耗のため調整は不明だが、内面頸部に先端の円い棒状工具で縦方向になでた痕跡が溝状に残る。143はⅢ期ミニチュア土器で台付壺形である。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はケズリ調整する。ケズリ調整は、外面は縦方向、内面は横方向である。脚台部は底部内面から粘土を充填して接合する。144は、SI13平面内の遺物包含層KG3で出土した手程ね土器である。SI13に関連する可能性が高いと考えここに記述する。外面はナデ、内面はユビナデ調整する。底部はややまるいが、安定する。145~147は磨製石鐵未製品1類である。146の天地に自然面が残る。3点とも調整や研磨は認められない。148~163は磨製石鐵未製品2類で、周縁全体を打ち欠き、形状をつくる。研磨は認められない。157は形状が三角形になっていないが、側縁部を打ち欠き、形を整えようとしている。表面下半は層理面である。158の左側面は石材時の破断面が残る。先端部から右側縁、基部を打ち欠き、形状をつくる。159は表裏に層理面が残る。160は左側縁部に微細な剥離調整を施す。161、162は基部を調整し、163は背面基部右側縁部を調整する。164、165は磨製石鐵未製品3類である。164は全体を研磨する。側縁部と基部に面が残る。刃部の作出前である。裏面はまだ研磨範囲が小さい。165は表裏面の厚い範囲に斜方向の研磨痕が残る。一次加工を終え、研磨に入った段階と考えられる。166、167は磨製石鐵未製品4類である。166は二次加工を終え、刃部を作出したはじめた段階である。穿孔はない。刃部作出後、穿孔するタイプものといえる。167は全体の研磨を終えて穿孔し、刃部を作出する途中のものである。左側縁部は明瞭な稜があるが、右側縁部の稜はやや不明瞭である。背面に刃部の作出によってできた稜が一部あるが、刃部を研磨しきっておらず、完成には至っていない。基部は内彎し、面をもつ。168は磨製石鐵である。刃部が認められる。基部と先端部が折損する。刃部の作出によってできた稜が、中央部に認められる。その稜は、穿孔のやや先端部側で逆Y字状に枝分かれし、内彎する三角形の面をつくる。穿孔は、断面が碗の底を合わせたような形になっており、やや丸みのある工具を使って作出了と考えられる。先端部、側縁部、基部全体に微細な剥離調整が見られるが刃部は作出されているため、完成品の破損等により再調整した可能性が考えられる。169、170、171は砥石である。169は砥面が4面で、すべての面で縦方向の線状痕が認められる。170は砥面が4面で、線状痕が多い。剥離内にも線状痕が認められる。171は砥面2面で、敲打痕が残る。敲打痕は、背面中央部と頂部に集中する。172は磨石・敲石類である。磨面は3面で、最小の面の磨痕はやや不明瞭である。長軸方向の両端に敲打痕が残る。173は炉の枕石と判断した川原石である。磨痕と敲打痕が確認できることから磨石・敲石類とした。磨面は4面で、全体が被熱し、一部に煤が付着する。磨痕は強くない。長軸方向の両端に敲打痕が残る。

**時期** 床面出土土器、貯蔵穴出土土器から東野Ⅲ期と判断した。埋土や床面から大量の石材、磨製石

鐵未製品、砥石や敲石などの製作用工具が出土したことから、建物の中で磨製石器製作をしていた可能性が考えられる。

#### SI14（図61）（AS1280）

**検出状況** C地点 KF2～KG3 グリッドで検出した竪穴建物である。III層上面で検出した。建物北部で SI11 に、南東部で SI13 に切られる。残存する 3 辺から、平面形は各辺がほぼ直線状の隅丸方形と想定できる。長軸の方位は、N-13° -W である。

**埋土** 埋土は黒褐色土の単層である。埋土中に暗褐色土・褐色土ブロックを多く含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** III層を掘り込んでいる。壁面は西はやや開く。壁の残存高は最大で 0.02m である。

**床面** ほぼ平坦である。貼床（5 層）が、建物の残存する部分全体にわたって残る。貼床は黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合土で、固くしまる。床面で検出した遺構は柱穴 2 基、壁際溝、性格不明土坑 5 基である。主柱穴は不明である。P01、P02 は柱穴で明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は 0.09～0.12m と想定できる。柱埋戻土最上層に貼床層が確認できることから、柱埋設後、貼床形成したと考えられる。壁際溝は建物の北東隅部、南東隅部、南西部、西中央部で検出した。深さ平均 0.06m を測る。

**床下** 貼床除去後、掘方整地層状の浅いくぼみ、柱穴 1 基（SP021）を検出した。くぼみは南東隅部に位置し、深さ 0.02m と浅い。他の当該期の竪穴建物に見られるような掘方整地層の可能性が考えられる。柱穴と SI14 との関連は不明である。

**遺物出土状況** 繩文土器 1 点、弥生土器 1 点、石器 1 点が出土した。すべて埋土上層からの出土である。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。繩文土器（取上番号 6930）は深鉢 F1 類の胴部片で、隆帯によって胴部を区画する。弥生土器（取上番号 6956）は床面で出土した III 期窯 D1 類の胴部片で、外面はハケ調整する。

**時期** SI13 に切られることから III 期以前となる。当遺跡 II 期の竪穴建物は、各辺が丸みを帯びるもので占められ、長軸長が 3 m を切る小型の建物はない。また、床下で掘方を確認できる竪穴建物は III 期以降に限定される。また、床面で III 期窯 D1 類が出土している。以上のことから東野Ⅲ期の可能性が最も高いと判断した。

#### SI16（図62）（AS1426）

**検出状況** C 地点 JE17 グリッドで検出した竪穴建物である。III層上面で検出した。建物北東部で SI02 に切られる。北西部は発掘区外にのびる。東辺がやや中央でくびれるが、平面形は各辺がほぼ直線状の隅丸方形である。長軸の方位は、N-18° -W である。

**埋土** わずかに残る埋土は黒褐色土の単層である。埋土中に黒色土ブロックを多く含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** III・IV層を掘り込んでいる。残存する 3 辺の壁面はやや開く。建物北東部は SI02 によって立ち上がりを消失しているため、壁際溝掘方を SI16 の規模とした。壁の残存高は最大で 0.03m である。

**床面** 中央部東寄りに窪みが認められるが、他はほぼ平坦である。貼床（6 層）が、建物の残存する部分全体にわたって残る。貼床は黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合土で、よくしまる。床面で検出

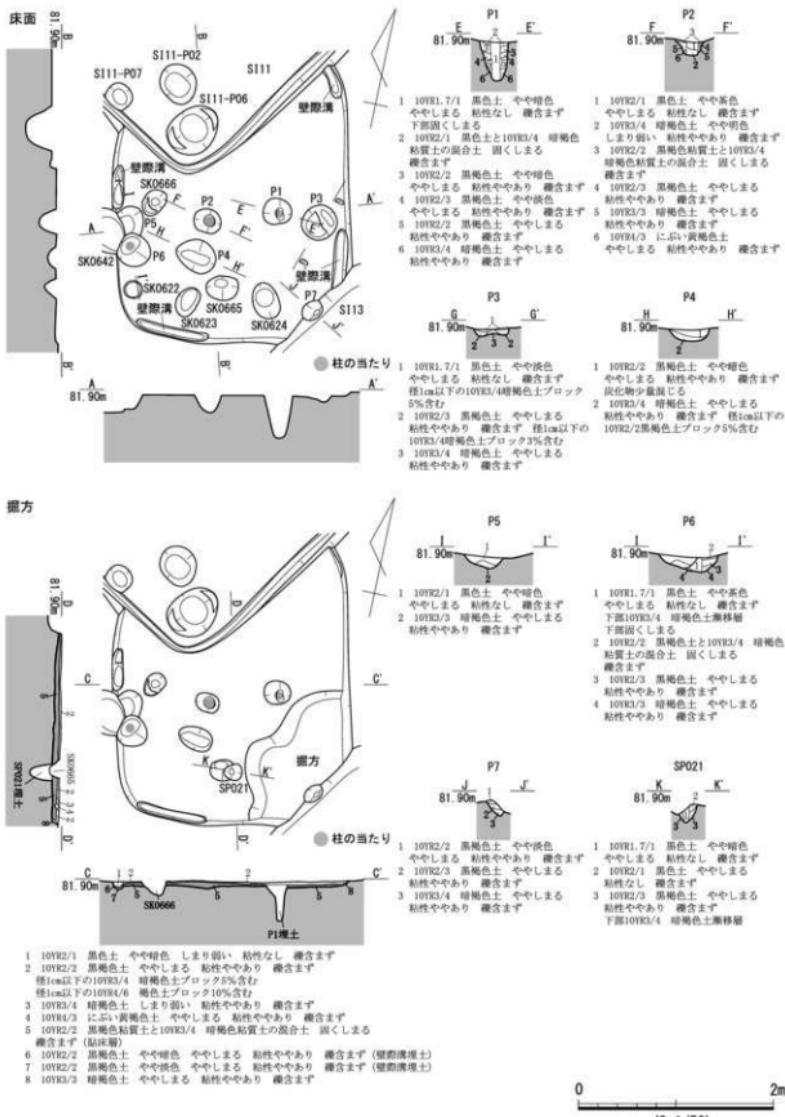


図61 S114遺構図

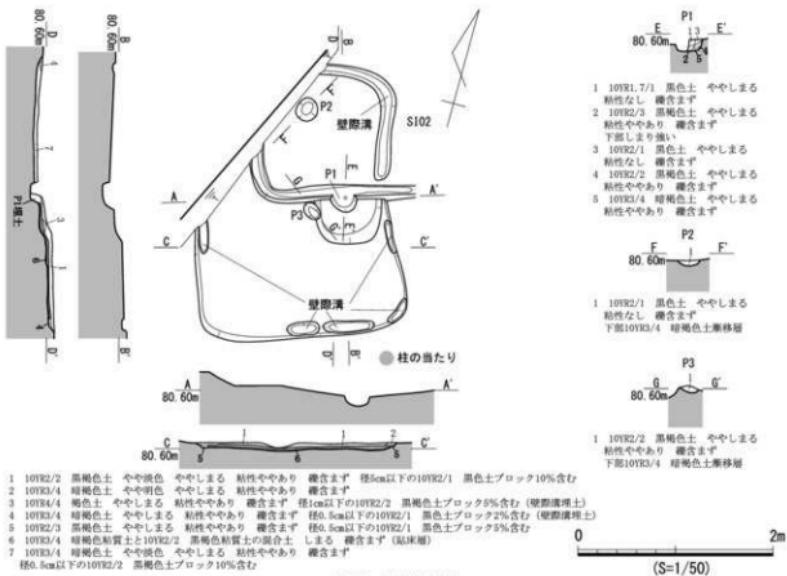


図62 SI16遺構図

した遺構は柱穴1基、壁際溝、性格不明土坑2基である。炉は確認できなかった。主柱穴は不明である。P1は柱穴で、明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は約0.1mと想定できる。柱埋戻土最上層に貼床層が確認できないことから、貼床形成後、柱穴が掘削されたと考えられる。壁際溝は、SI02に切られる範囲では明瞭に検出できたが、東～南～西部で途切れる。後者が高いレベルにもかかわらず途切れる理由は不明である。

**床下** 貼床除去後、遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況** P3上層から時期不明土器1点が出土した。

**出土遺物** 実測に足る遺物は出土していない。P3出土の時期不明土器（取上番号6964）は壺の胴部片で、摩耗のため内外面の調整は不明である。

**時期** III期の可能性が最も高いSI02に切られることから、III期以前となる。当遺跡II期の竪穴建物は、各辺が丸みを帯びるもので占められ、長軸長が3mを切る小型の建物はない。以上のことから東野Ⅲ期の可能性が最も高いと判断した。

#### SI18(図63～66)(BS0031)

**検出状況** C地点JF16～JH18グリッドで検出した竪穴建物である。III層上面で検出した。SZ3、SD32、SD34、SD35に切られる。北西部は発掘区外である。平面形は、南北方向の短軸に対し、東西方向の長軸が約1.4倍の隅丸長方形である。長軸の方位は、N-71°-Eである。

**埋土** 埋土は黒色土の単層である。人為堆積か自然堆積かの判断はつかない。

**壁** III・IV層を掘り込んでいる。壁面はほぼ直立する。壁の残存高は最大で0.03mである。

**床面** ほぼ平坦である。貼床（6層）は、中央部から南部と北部中央に残存する。貼床が北部中央で壁際溝を覆う。貼床はにぶい黄褐色土が主体で黒褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は柱穴6基、壁際溝、炉2基、貯蔵穴1基、性格不明土坑28基である。柱穴や性格不明土坑は床面で検出したことからSI18に関連する遺構と判断したが、検出時にSI18貼床が露出していたことから、SI18より後出する遺構の可能性も考えられる。堅穴内の位置関係からP01、P02、P03、P04をこの建物の主柱穴と判断した。深さは0.30～0.49mを測り、全てVI層上面まで掘り込む。P02、P04で明瞭な柱痕跡が確認できる。柱径は0.19～0.22mと想定できる。柱埋戻土最上層に貼床層が確認できないことから、貼床形成後、柱穴が掘削されたと考えられる。P05、P10は柱穴である。

**炉** 建物中央やや西寄りで炉1、東寄りで炉2を検出した。炉2に比べ炉1は壁に接する。炉1南部、炉2南西部で貼床を切る。炉1の埋土は明赤褐色土に黒褐色土を僅かに含み、底面はやや被熱する。炉2の埋土は黒褐色土に褐色土ブロックを僅かに含む。底面は被熱していなかったが、掘方南東部に接する貼床が被熱していたことから炉と判断した。P35は炉2底面で検出した長楕円形と想定できる小穴である。炉2の南西壁に沿うように位置することから、炉に使用していた石などの抜き取り痕の可能性も考えられるが、現状では不明である。同一床面で検出していることから、2基の炉は併存していたと考えられる。しかし、底面の被熱が明瞭な炉1、底面の被熱が不明瞭な炉2という違いがあり、これは炉1が炉2より長期間使用したあるいは使用回数・時間が多いために起因すると考えられる。調理用、暖房用、あるいは併用等、用途差をもっていた可能性がある。

**貯蔵穴** 床面南部壁際で検出したP26を堅穴内の位置関係、規模、形状から貯蔵穴と判断した。底はほぼ平らだが、北東に向かってやや傾斜する。壁際溝を切ることから、壁際溝埋戻し後に構築される。検出時、Ⅲ期甕C類の破片が出土した（図65）。

**床下** 貼床除去後、遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況** 繩文土器21点、弥生土器21点、時期不明土師器類43点、須恵器4点、石器類8点が出土した。埋土出土は少なく、多くは関連遺構からの出土である。東側壁際溝内から磨製石鏃、西側壁際溝脇の床直上から砥石が出土した。

**出土遺物** 174はⅢ期甕B1類の口縁部である。大きく外反し、端部外方に面をもつ。内外面はナデ調整する。外面に煤が付着する。被熱により器面が荒れる。175はⅢ期甕B3類の口縁部である。口縁部はほぼ直立する。内面はハケ、外面はナデ調整する。176はⅢ期甕D1類である。そこから胴部に向かって大きく開く。内面はケズリ、外面はハケ調整する。底部外間に焼成時の黒斑が残る。177、178、179はⅢ期甕D2類である。177はP15出土で、口縁部が外反する。内面に4個1単位のクシ状工具による刺突列を施す。口縁端部外面に左上がりの刻み、その下は条痕である。端部は丸く収める。178、179はP26出土である。178は口縁部が外反し、横方向の条痕を施す。口縁端部に斜方向の条痕が見られる。179は口縁部が外反する。口縁端部に刻みを施す。内面にクシ状工具による5個1単位の刺突列を施す。外面は条痕である。180はⅢ期甕X1類である。接合部は脚台部側から充填する。外面は縦方向のヘラナデ、内面はナデ調整する。底部内面に煤が付着する。181はⅢ期甕B2類である。口縁部が大きく開く。胴部はなで肩の形状になる。外面はヨコナデ、内面はケズリとナデ調整する。182は壁際溝出土の磨製石鏃である。全体を横位にして磨く。刃部に横方向の線状痕が多い。基部は折損しているが、中央部に穿孔状のくぼみがある。このくぼみは表面で確認できるが裏面にはない。





図64 SI18遺構図(2)

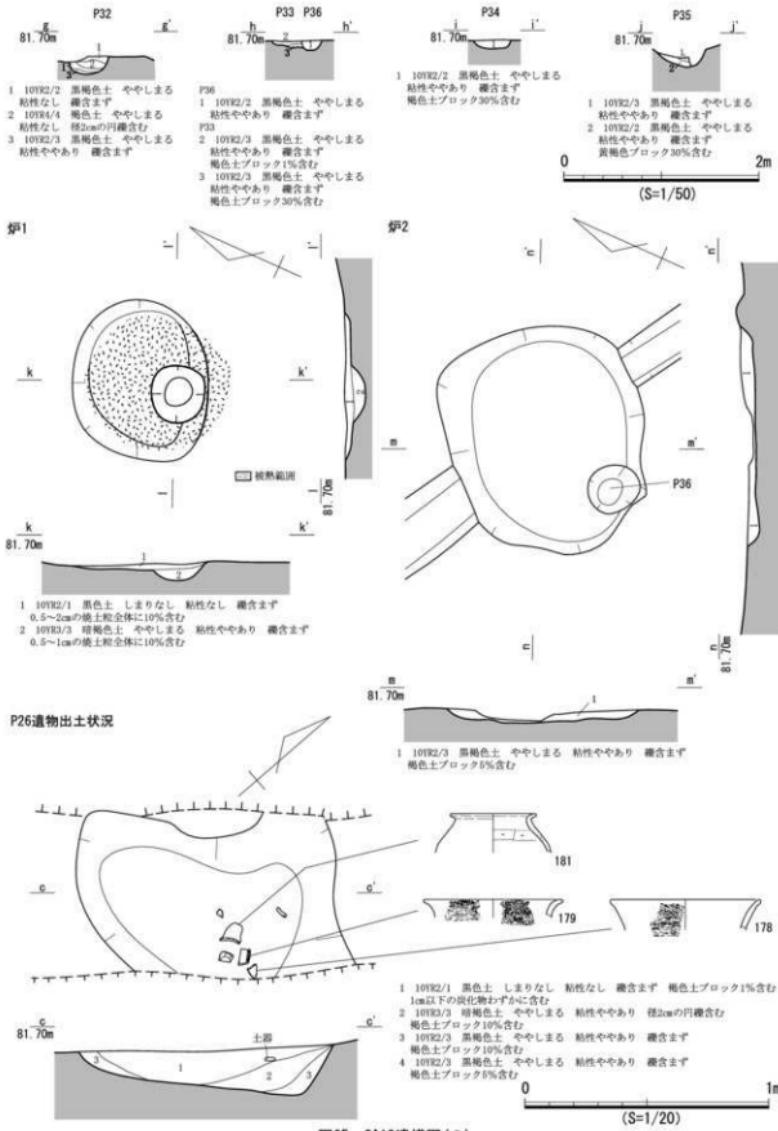


図65 S118遺構図(3)

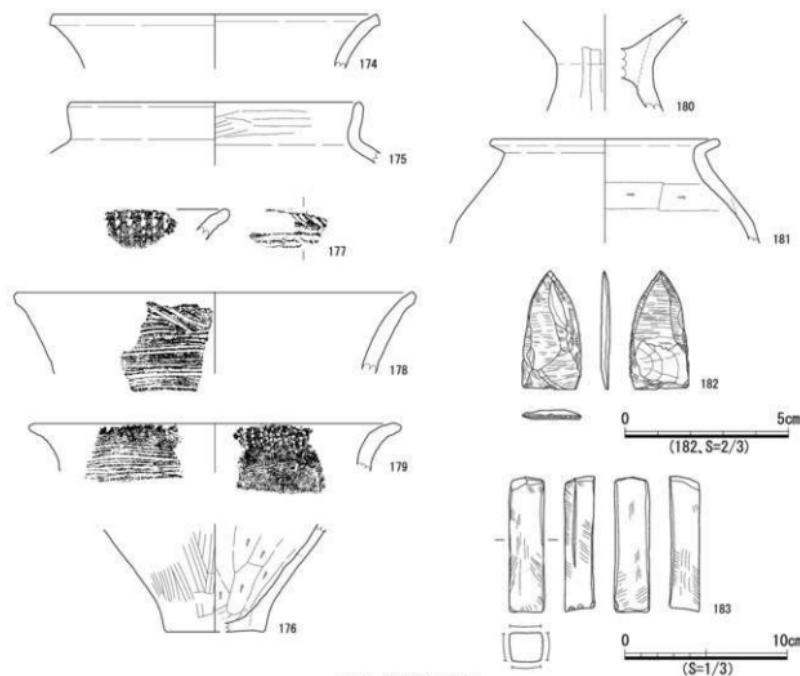


図66 SI18出土遺物

穿孔途中に剥離した可能性が考えられる。183は砥石である。砥面4面で、表面は中央が長軸方向にややくぼむ。側面にV字溝が確認できる。溝の左手がややくぼむ。背面が最もなめらかな砥面である。

時期 SZ3との重複関係と出土土器から東野Ⅲ期と判断した。

SI23(図67~70)(BS0768)

検出状況 C地点KC5グリッドで検出した竪穴建物である。Ⅲ層上面で検出した。平面形は東西方向にやや長い隅丸方形である。現代の住宅の基礎部分が遺構埋土上層を削平する。長軸の方位は、N-76°-Eである。

**埋土** 黒褐色土と黒色土がほぼ水平に堆積し、壁際埋土がやや傾斜して堆積する。埋土中に黄褐色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土ブロックを多く含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

埋土1~3層にしまりがみられたが、現代の住宅建築の影響によるものと考えられる。

**壁** Ⅲ・Ⅳ層を掘り込んでいる。壁面は緩やかに開くが、東壁は中程から直立する。壁の残存高は最大で0.15mである。

**床面** ほぼ平坦である。貼床(4・5・6層)が全体にわたって明瞭に残る。貼床は褐色土と暗褐色土が主体で、黒褐色土ブロックを不均一に含み、ややしまる。床面で検出した遺構は柱穴4基、炉、性格不明土坑1基である。壁際溝は確認できなかった。P1、P2、P3、P4は浅い穴で、底の硬

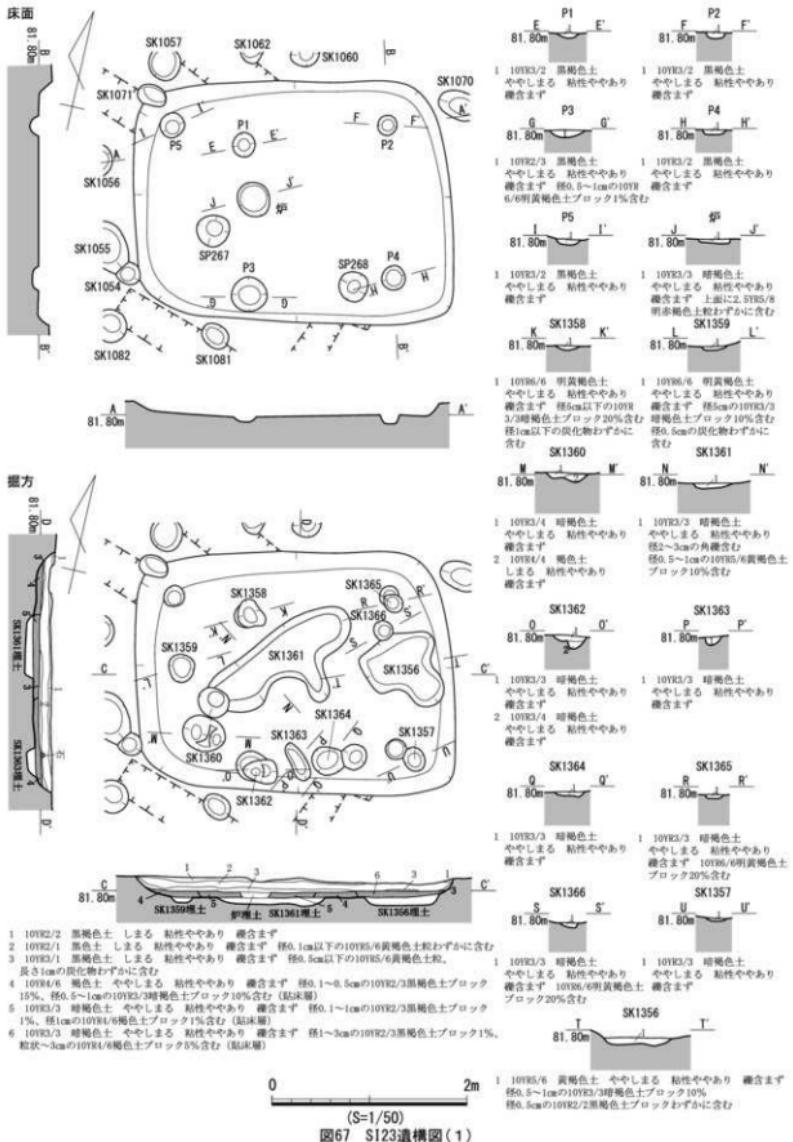


図67 SI23遺構図(1)

遺物出土状況

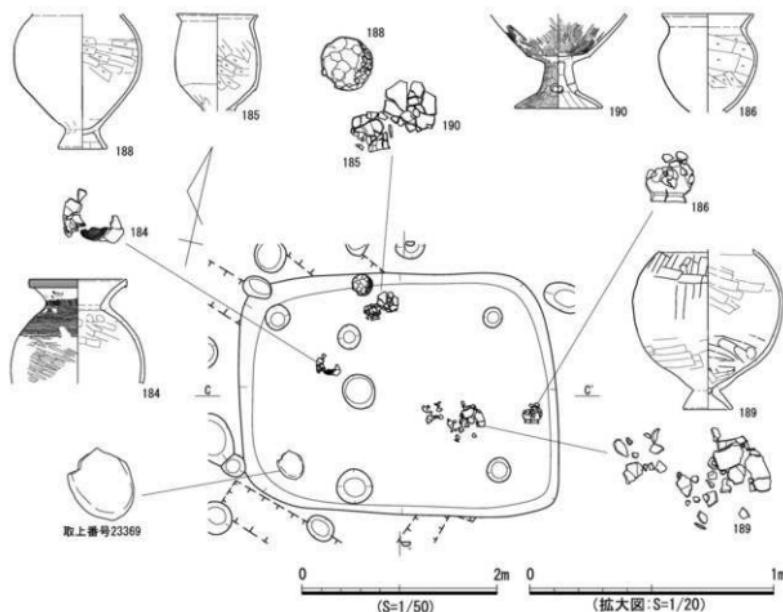


図68 SI23遺構図(2)

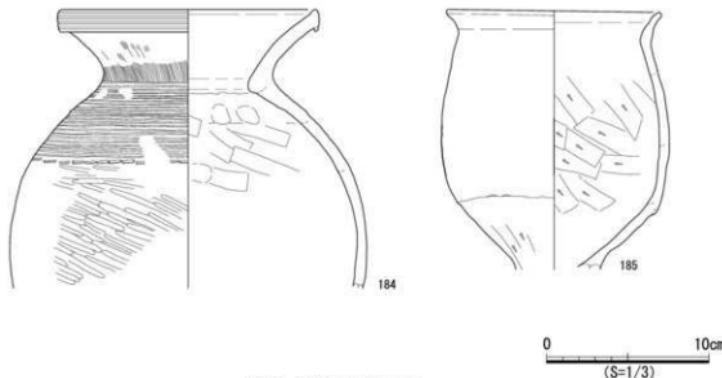


図69 SI23出土遺物(1)

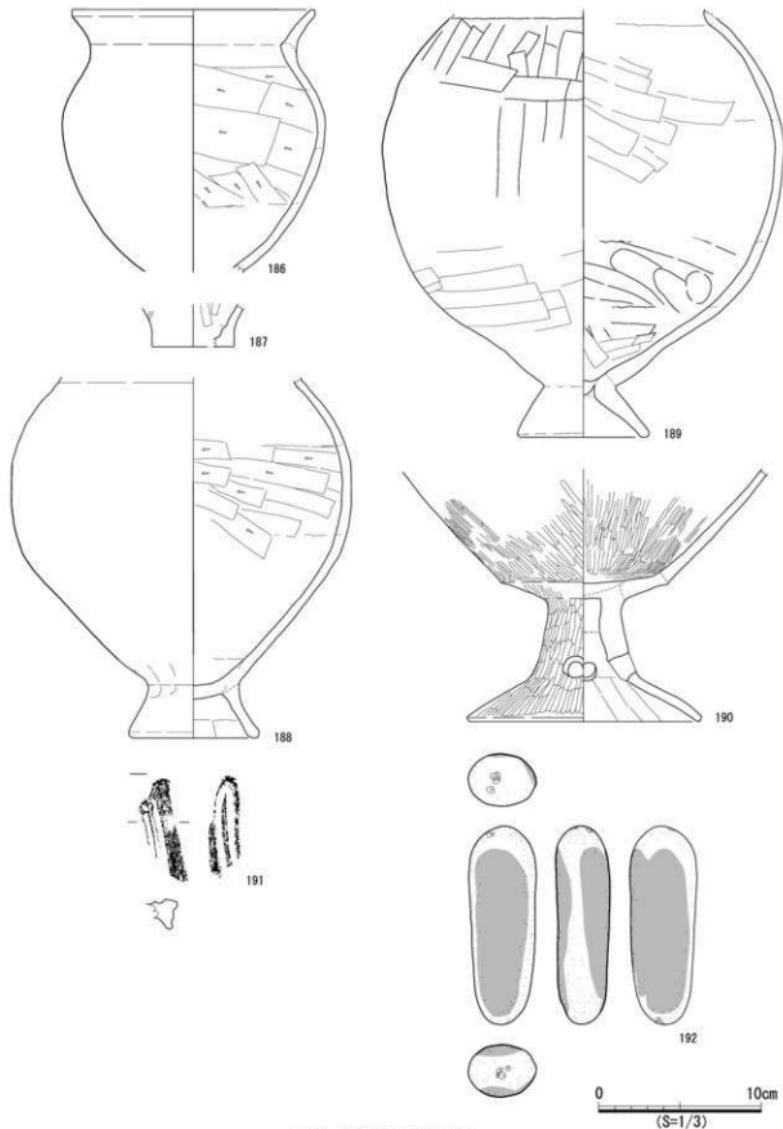


図70 SI23出土遺物（2）

化面や柱痕跡は認められなかったが、竪穴周囲に柱穴が確認できることと竪穴内の位置関係から主柱穴の可能性が高いと判断した。

**炉** 建物中央やや西寄りで検出した小穴である。床面を浅く掘りくぼませる。埋土は、暗褐色土ブロックと径 0.5 cm の炭化物を僅かに含む明黄褐色土である。底面に被熱痕が確認できなかったが、竪穴内の位置と埋土に炭化物を含むことから炉と判断した。

**床下** 貼床除去後、性格不明土坑 11 基を検出したが、SI23 との関連は不明であるが、SK1358、SK1365、SK1362 はそれぞれ P 1、P 2、P 3 の掘方の可能性がある。

**遺物出土状況** 繩文土器 1 点、弥生土器 43 点、古墳前期土師器 1 点、時期不明土師器 69 点、石器類 6 点が出土した。北壁面に接するⅢ期壺 X1 類（188）と南西端の円礫の磨石・敲石類（192）は床面直上で出土した。床面からやや浮いて、Ⅲ期高坏 A 類（190）、Ⅲ期壺 A1 類（184）、Ⅲ期壺 X1 類（189）、Ⅲ期壺 B2 類（186）が出土した（図 68）。

**出土遺物** 184 はⅢ期壺 A1 類である。口縁部外面端部に擬回線文が 4 条巡る。頸部外面は斜方向のハケ調整する。胴部外面は 14 条の直線文、その下に棒状工具による刺突文、その下に斜方向のミガキを施す。内面は板ナデ調整する。185 はⅢ期壺 B1 類、186 はⅢ期壺 B2 類である。ケズリによって器壁をうすぐする。口縁部は僅かに内へ屈曲する。脚台部は欠損する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はケズリ調整する。186 より 185 の内面のケズリの単位が小さいことから、工具が異なると考えられる。187 はⅢ期壺 D1 類である。外面に条痕文、内面は板ナデ調整する。外面は摩滅が激しい。188、189 はⅢ期壺 X1 類である。188 の胴部外面は板ナデ、内面はケズリ調整する。内外面に煤が付着する。内面の煤は底部を中心にしてドーナツ状に煤が付着し、外面の煤は胴部の最大幅部のやや上方まで付着する。189 は口縁部が折損する。胴部外面は板ナデ調整する。脚台部はやや開き気味である。接合部がはずれている。口縁部は頸部との接合部から折損する。190 はⅢ期高坏 A 類である。外面はタテミガキを施す。脚裾部内面は板ナデ調整する。1 段 4 方向の透孔が認められる。191 は繩文土器深鉢の口縁部である。波状口縁で、突起部がある。下方に向かって短沈線 3 条を施す。端部上面に往復する沈線を施す。北白川 C3 式に比定できる。192 は磨石・敲石類である。全体が被熱し赤色化する。長軸方向の端部両端に敲打痕が認められる。平坦面 3 面が磨面である。

**時期** 床面出土土器から東野Ⅲ期と判断した。

SI24（図 71～75）(BS0900)

**検出状況** C 地点 KE 4 ～KF 5 グリッドで検出した竪穴建物である。Ⅲ層上面で検出した。中央部と北東隅部を現代の搅乱坑により消失する。平面形は東西方向にわずかに長い隅丸方形である。長軸の方位は、N-74° -W である。

**埋土** 埋土は黄褐色土ブロックを含む黒色土と黒褐色土がほぼ水平に堆積し、壁際埋土がやや傾斜して堆積する。中央部は搅乱坑による削平で不明だが、C-C' 土層で中央がくぼむ堆積（1・2 層）が確認できる。埋土中に黄褐色土・暗褐色土・黒褐色土ブロックを多く含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** Ⅲ・Ⅳ層を掘り込んでいる。壁面はわずかに開くが、ほぼ直立に近い。壁の残存高は最大で 0.19 m である。

**床面** ほぼ平坦である。貼床（14～17 層）が全体にわたって明瞭に残る。貼床は、黒褐色土を含む褐

色土で、ややしまる。貼床層より硬化した範囲が、北西隅部・西壁際中央部・P17 西部で確認できる。硬化範囲が竪穴壁に近接している理由は不明である。床面で検出した遺構は柱穴 4 基、壁際溝、貯蔵穴 1 基、性格不明土坑 13 基である。炉は確認できなかった。床面で検出した遺構は貯蔵穴を除いてすべて浅い穴であるため、竪穴内の位置関係から P01、P02、P03 と P05、P04 を主柱穴と判断した。壁際溝は、残存する建物をほぼ周囲する。深さ平均 0.04m を測る。

**貯蔵穴** 建物南西部で検出した P06 を、竪穴内の位置関係、規模、形状から貯蔵穴と判断した。中央部を消失しているが、西側土層断面から底は平らになるとみられる。残存する深さは 0.21m を測る。

**床下** 貼床除去後、性格不明土坑 6 基を検出したが、SI24 との関連は不明である。

**遺物出土状況** 弥生土器 19 点、古墳前期土師器 34 点、時期不明土師器類 108 点、須恵器 1 点、礫 1 点、石器類 3 点、炭化材 44 点が出土した。南西角の床面から脚を欠損するⅢ期高壙 A 類（198）が正面で、北壁中央の床面からⅢ期壙 X1 類（197）が横位で出土した。また、埋土から炭化物が多量に出土した。多くの炭化材は、竪穴掘方に対し放射状に出土した。壁際で出土した炭化材の中には、壁に対し平行に出土したものもある。形状を留めている炭化材は壁際に集中し、中央部ほど細片となる。出土部材 44 点のうち 68.2% がクリである（第 4 章第 4 項参照）。材と床面の間に埋土を挟み、挟まれる埋土は中央部ほど厚い。中央部を南北に縱断する掻乱坑出土のⅢ期土器は、SI24 に属する可能性が高いと考えられる。

**出土遺物** 193 はⅢ・Ⅳ期壙 X1 類である。外面は縦方向のケズリと板ナデ、内面は板ナデとユビオサエで調整する。底部は、外面中央を中心にして、工具を押し当てて周回することで高台状に作出する。194 は SI24 と重複する掻乱坑から出土したⅢ期壙 A 類である。口縁部は直立するが端部は折損する。内外面はヨコナデ調整する。195 はⅢ期壙 B1 類である。口縁部が開く。内外面は摩耗のため調整不明である。口縁端部はやや肥厚する。196 はⅢ期壙 B3 類である。内外面は摩耗が激しく調整不明だが、脚台部と底部の接合部外面に板ナデの痕跡が残る。接合部は脚台部から充填する。口縁部は受口状に屈曲するが弱い。屈曲部でやや肥厚する。197 はⅢ期壙 X1 類である。台端部に折り返しがないため、S 字状口縁台付壙の可能性は低い。底部内面は放射状に板ナデ調整する。胴部外面のハケは脚台部と底部の接合部で収束する。198 はⅢ期高壙 A 類である。壙端部内面は肥厚し、直線文が 3 条巡る。直線文下からヨコミガキ、その下タテミガキ、壙部との接合近くで再びヨコミガキをして接合線を消す。外面も同様に調整する。199 はⅢ・Ⅳ期高壙 A 類である。傾きから浅い形状と思われる。内外面はヨコミガキを施す。口縁端部内面は肥厚し、3 条の直線文が巡る。200 はⅢ期高壙 B 類である。口縁端部外面に直線文が 4 条巡る。内面やや右上がりのミガキを施す。壙端部で内彎する。201 はⅢ期ミニチュア土器で壺形である。口縁部はく字状に開く。上半で体部最大幅となる。内面は板ナデ調整する。底部内面は中央から振文状になれる。202 は SI24 と重複する掻乱坑から出土したⅢ期ミニチュア土器で鉢形である。口縁部はユビナデとユビオサエで調整し、片口状の打ち欠きが認められる。打ち欠きは逆三角形を呈する。内面に焼成時の黒斑が見られる。203 は打製石斧である。円礫の自然面を利用している。右側縁上方に装着痕状の摩耗が認められる。

**時期** 床面出土遺物（197、198）から東野Ⅲ期と判断した。

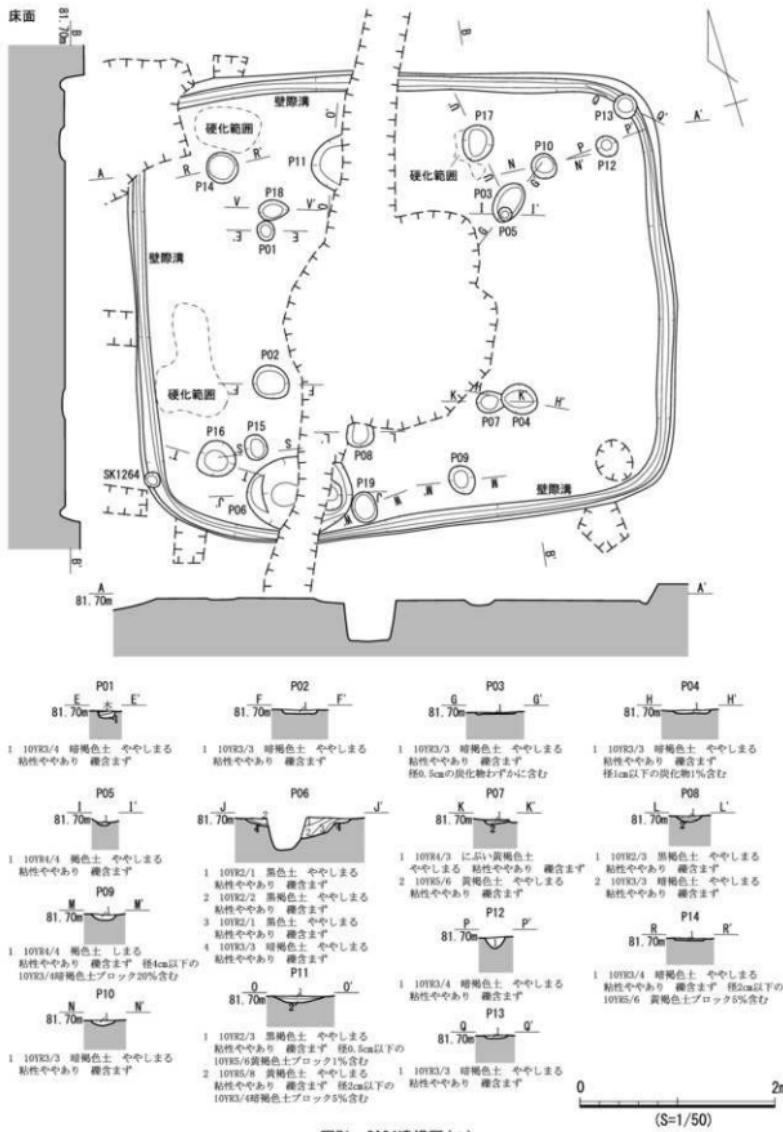
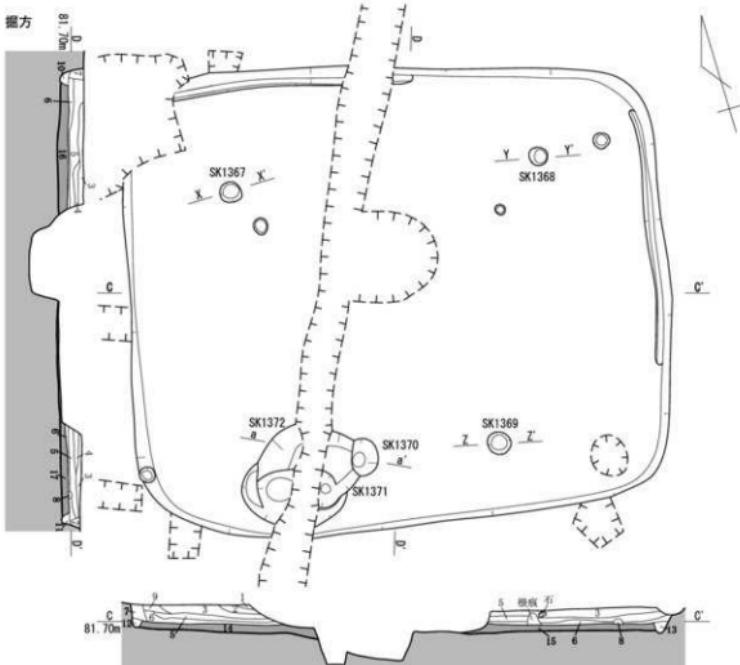


図71 S124遺構図(1)



- 1 10Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず  
 2 10Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず 10Y5/6 黃褐色土わずかに含む  
 3 10Y2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 微10cmの円筒化む  
 4 10Y2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず  
 5 10Y3/2 黒褐色土 やや黒色 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず 程0.1~1cmの10Y5/6 黃褐色土ブロック全体に1~5%含む  
 6 10Y2/3 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず  
 7 10Y2/3 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず  
 8 10Y2/4 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず  
 9 10Y2/4 黑褐色土 しまる 粘性ややあり 繩合まず 程1cm以下の10Y5/6 黃褐色土ブロック全体に1%含む  
 10 10Y5/6 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず 程2cm以下の10Y2/3 黑褐色土ブロック10%含む  
 11 10Y8/4 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず 程1cm以下の10Y2/3 黑褐色土ブロック20%含む  
 12 10Y8/4 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず 程1cm以下の10Y5/6 黄褐色土ブロック10%含む  
 13 10Y8/4 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず 程0.5cm以下の10Y5/6 黄褐色土ブロック5%含む  
 14 10Y8/5 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず 程1cm以下の10Y2/3 黑褐色土ブロック1%含む 上面に程0.5cm以下の灰化物わずかに含む(貼床層)  
 15 10Y8/6 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず 程3cm以下の10Y2/3 黑褐色土ブロック5%含む 上面に程0.5cm以下の灰化物わずかに含む(貼床層)  
 16 10Y8/6 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず 程5cm以下の10Y2/3 黑褐色土ブロック5%含む(貼床層)  
 17 10Y8/6 黑褐色土 ややしまる 粘性ややあり 繩合まず 程5cm以下の10Y2/3 黑褐色土ブロック10%含む(貼床層)



図72 SI24遺構図(2)

## 遺物出土状況

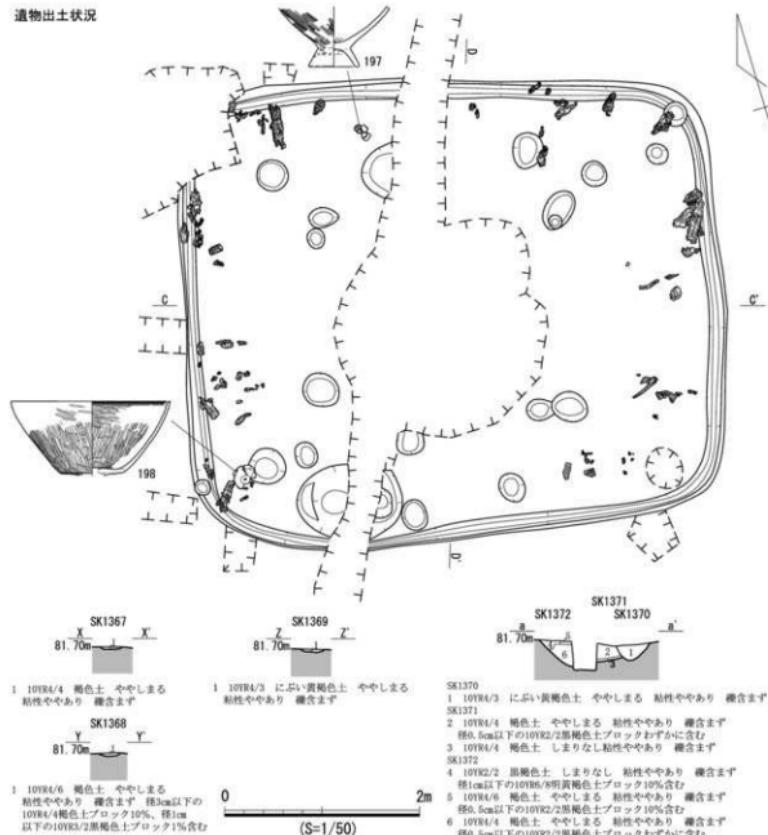


図73 SI24遺構図(3)

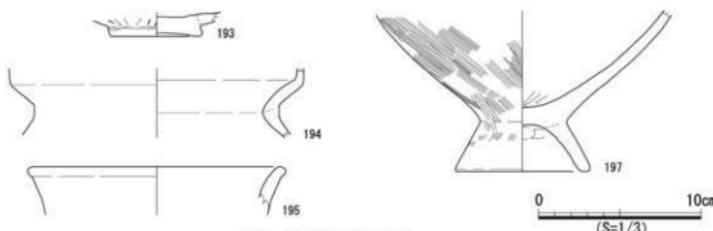


図74 SI24出土遺物(1)

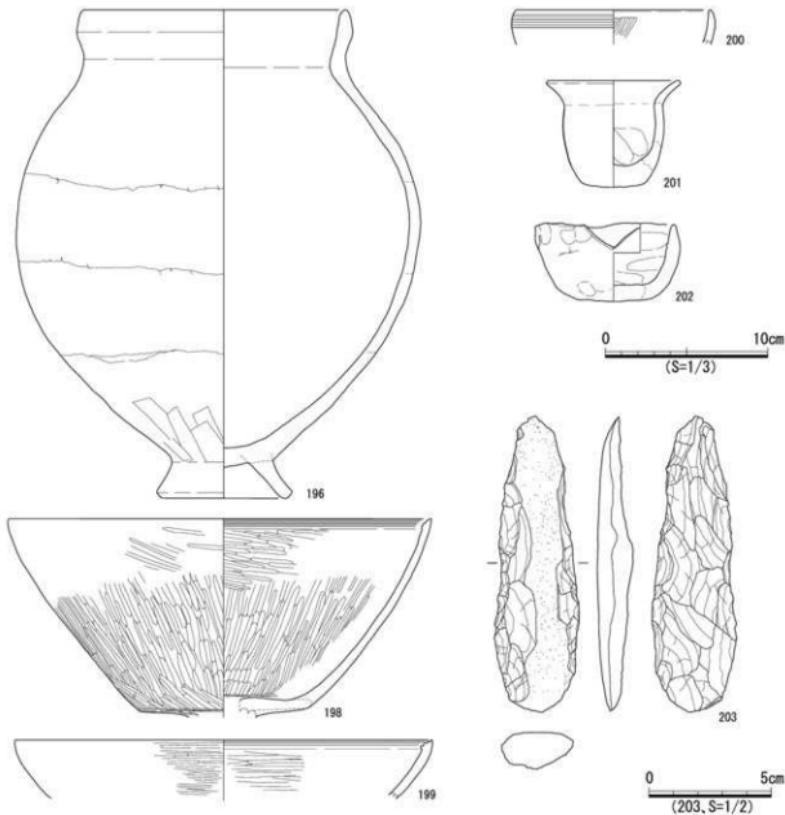


図75 SI24出土遺物（2）

## SI27（図76～78）(AS1897)

**検出状況** C地点 KD 5～KE 6 グリッドで検出した堅穴建物である。III層上面で検出した。建物西部をSI26に切られる。

**平面形** 平面形は各辺がやや胴張りの隅丸方形である。長軸の方位はN-83°-Wである。

**埋土** 黒色土と黒褐色土がほぼ水平に堆積し、壁際埋土がやや傾斜して堆積する。堅穴西部埋土はSI26により消失している。

埋土中に暗褐色土・赤褐色土ブロックを多く含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。

**壁** III～V層を掘り込んでいる。壁面は4辺とも緩やかに開く。壁の残存高は最大で0.19mである。

**床面** ほぼ平坦である。貼床（9層）は全体にわたって明瞭に残る。貼床は黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合土で、固くしまる。貼床層上に貼床層よりしまる層（硬化層・8層）が確認できる。硬化

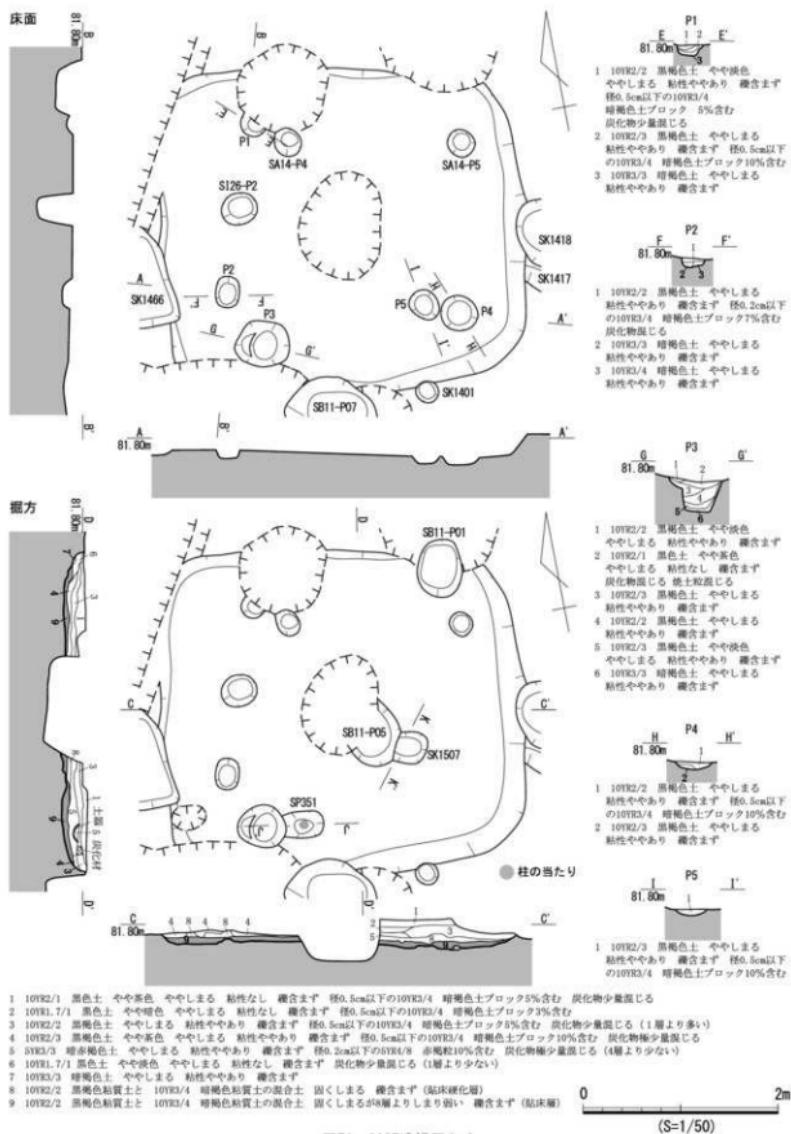


図76 SI27遺構図(1)

## 遺物出土状況

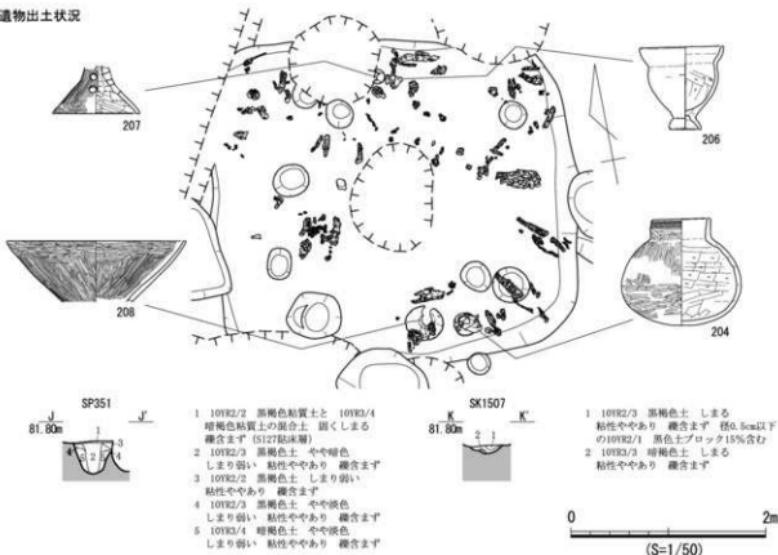


図77 S127遺構図(2)

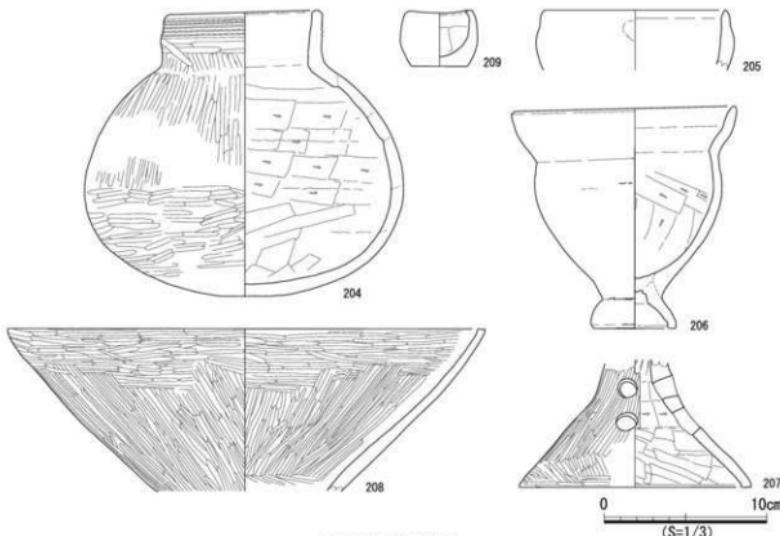


図78 S127出土遺物

層は、SI26に切られる範囲は部分的に残るが、残存する範囲では明瞭に残る。C-C'断面の擾乱坑から西側の硬化層に起伏が認められる。床面で検出した遺構は貯蔵穴1基、性格不明土坑4基である。主柱穴は不明である。炉、壁際溝は確認できなかった。

**貯蔵穴** 南西部床面で検出したP3を竪穴内の位置関係、規模、形状から貯蔵穴と判断した。西部にテラスをもつ二段構造の穴である。壁はやや開き、底は平らである。長軸長0.56m、残存短軸長0.48m、深さ0.31mを測る。埋土は西部がやや壅む堆積である。

**床下** 貼床除去後、柱穴3基、性格不明土坑1基を検出した。柱穴3基のうちの2基はSB11の柱穴である。SB11柱穴を床下で検出したことから、SB11はSI27を巡る掘立柱建物と考えられる。残りの柱穴1基と性格不明土坑1基のSI27との関連は不明である。

**遺物出土状況** 繩文土器2点、弥生土器25点、古墳前期土師器1点、古墳後期以降土師器類1点、時期不明土師器類28点、礎2点、石器類1点、炭化材113点が出土した。炭化材は、3・4・5層からの出土で、竪穴壁際ほど出土レベルは低い。竪穴南壁に近接して出土したⅢ期高坏A類(208)は坏部のみが逆位で出土した。その東側で出土したⅢ期壺B1類(204)は完形の土器が正位で潰れた状態で出土した。竪穴北壁に近接して出土したⅢ期壺B3類(206)は横位で、Ⅲ期高坏A類(207)は脚のみが正位で出土した。前述の高坏2点は別個体である。これらの土器が床面直上で出土しているのに対し、炭化材はその土器に被るように出土している。また、床面と炭化材の間に埋土を挟む。竪穴壁際ほど炭化材の残りは良く、中央部ほど細片になる。南東部出土炭化材は、竪穴中央部に向かって放射状に出土している。土器は、北壁と南壁のほぼ中央部で壁に近接して出土している。

**出土遺物** 204はⅢ期壺B1類である。口縁端部外面に直線文が6条巡る。その直下と胴下半部はヨコミガキ、口頸部から胴上半部はタテミガキを施す。口縁部内面はヨコナデ調整する。胴部内面上半はケズリ、下半は板ナデ調整する。205はP3出土のⅢ期壺E類の口縁部である。内面のナデ調整から口縁部が内彎する壺と判断した。外面はユビオサエである。206はⅢ期壺B3類である。やや小型の台付壺である。口縁部が内彎する。外面はナデ調整する。内面は口縁部がヨコナデ、胴部はケズリ調整する。底部と脚台部は底部側から充填して接合する。207はⅢ期高坏A類の脚部である。坏部は折損する。外面上部はタテミガキ、下部は斜方向や横方向のランダムなミガキが認められる。内面は板ナデ調整する。2段3方向の透孔が認められる。208はⅢ期高坏A類の坏部である。脚部は折損する。内外面上方はヨコミガキ、下方はタテミガキを施す。坏端部に面をつくる。破断する部分が坏部と脚部の接合部である。209はミニチュア土器で鉢形である。内面は横方向の板ナデ、外面はヨコナデ調整する。底部は平らで安定する。

**時期** 床面出土土器から東野Ⅲ期と判断した。

#### S129(図79・80)(AS1925-1)

**検出状況** C地点KC7～KD9グリッドで検出した竪穴建物である。Ⅲ層上面で検出した。北部は発掘区外のため不明である。検出時は1軒の竪穴建物と考えて掘削したが、床面に到達した段階で、SD07以西と以東で、床面の高さが0.05m違い、貼床層の土色・土質が異なることが判明した。また、SI49床下で柱穴と屈曲する溝を検出し、南東隅部の掘方が二段構造となることが判明した。出土遺物は、SI49と重複しない範囲で主に弥生土器片が、重複する範囲で弥生土器片と古墳時代前期土師器片が出土している。なお、重複する範囲で出土する土器は古墳時代前期土師器が弥生土器片よりも多い。以上

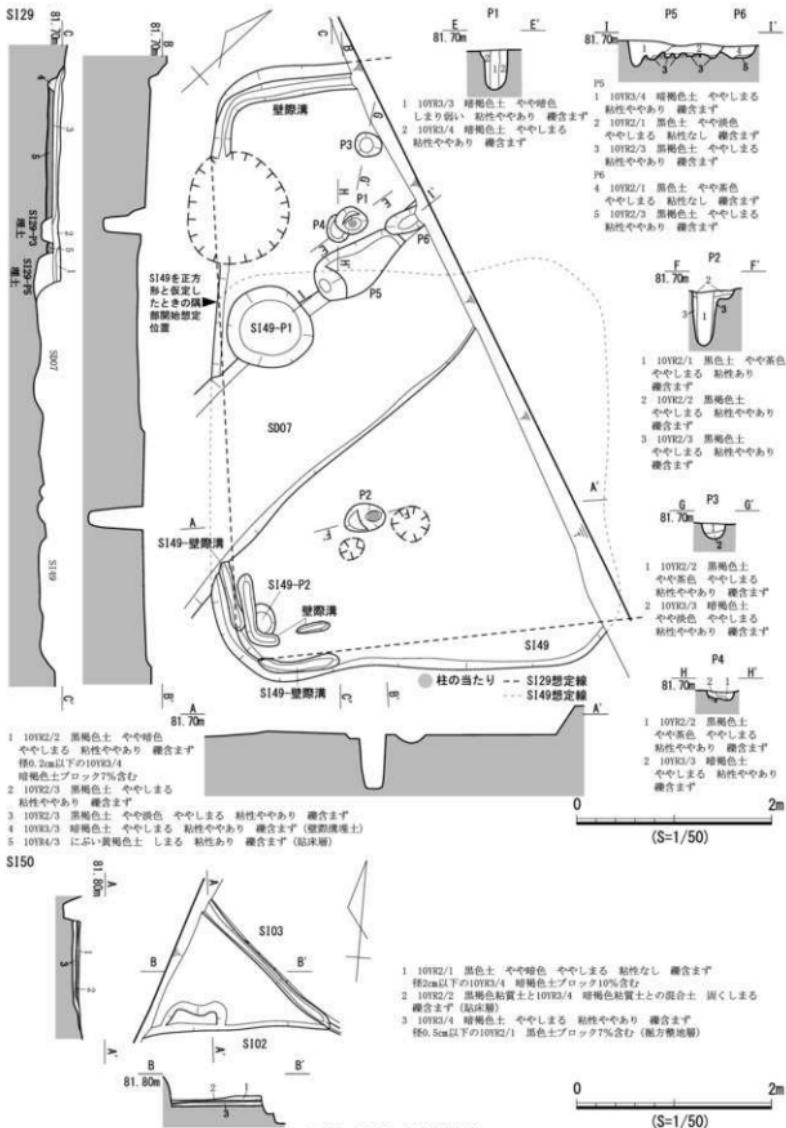


図79 SI29・S150遺構図

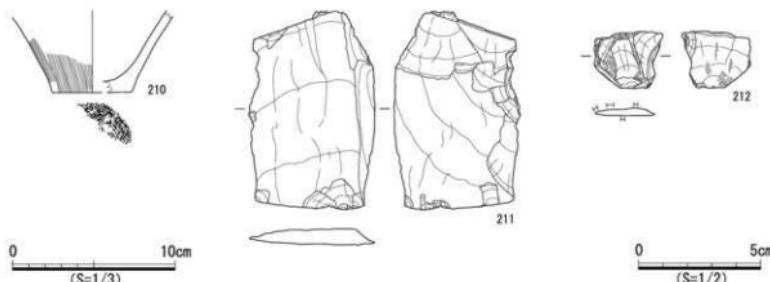


図80 SI29出土遺物

のことから、2軒の時期の異なる建物（SI29、SI49）が重複する可能性が高いと判断した。平面形は不明であるが、残存する二辺とSI49床下で検出した壁際溝と掘方から隅丸方形の可能性が想定できる。SI49、SD07に切られる。長軸の方位はN-55°-Wである。

**埋土** 黒褐色土がほぼ水平に堆積し、北東壁際埋土がやや傾斜して堆積する。埋土中に暗褐色土ブロックを含むことから人為堆積の可能性が高いと考えられる。SI29とSI49の土層から堆積順は、SI29の廃絶→3層の堆積→SI49の構築→SI49の廃絶→2・1層の堆積となる。C-C'土層の1層西端は、緩やかに立ち上がっており、SI49の立ち上がりであった可能性も考えられる。立ち上がりと仮定すると、土色・土質の類似から2層中の立ち上がりを看過した可能性がある。

**壁** III～V層を掘り込んでいる。壁面は開く。建物北東部はSI49によって立ち上がりを消失しているため、壁際溝掘方をSI29の規模とした。北西壁の残存高は最大で0.09mである。

**床面** ほぼ平坦である。貼床（5層）が残存する範囲に明瞭に残る。貼床にはぶい黄褐色粘質土で、固くしまる。床面で検出した遺構は、柱穴1基、壁際溝、性格不明土坑4基である。炉は確認できなかつた。また、SI49床下で確認した柱穴（P2）と屈曲する溝状遺構（壁際溝）をSI29に付属すると判断した。想定できる竪穴内の位置関係からP1とP2を主柱穴と判断した。配置状況から4本柱建物と考えられ、残る2基は発掘区外にあると想定できる。2基ともに明瞭な柱痕跡と柱の当たりが確認できる。柱径は0.10～0.14mと想定できる。P1の柱埋戻土最上層に貼床層が確認できないことから、貼床形成後、柱穴が掘削されたと考えられる。P5の平面形は南北方向の長楕円形である。1層が切っている土層を示していることから別遺構の可能性もある。壁際溝は、北西辺・南西辺・SI49床下南隅部で検出した。深さ平均0.08mを測る。北西辺・南西辺の壁際溝が貼床層を切っていることから、貼床形成後掘削されたと考えられる。

**床下** 貼床除去後、遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土から弥生土器・土師器類、繩文土器の破片が出土した。掘削時には建物1軒と考えて遺物を取り上げたため、SI49と重複する範囲から出土した遺物の帰属建物は不確定である。ただし、明確に重複しないと考えられる北西区埋土や床面から、SI13出土と同質の磨製石鍬石材や磨製石鍬二次加工品等の石器類が出土している。